
魔法少女リリカルなのは S R W O G s

八咫鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは SRWOGs

【Nコード】

N3473L

【作者名】

八咫鴉

【あらすじ】

退屈だが、個人的に充実した生活を送っていた主人公。悪友としゃべり、晩飯の献立を考えながら帰宅する。帰宅途中に目の前の少年に突っ込んで行くトラック！少年を助けたが死んでしまった主人公。

しかし、神によって、リリカルの世界に送られる。
果たして主人公は、平和な生活を送ることができるのか！

この作品は、チート20%作者の文才0%作者の妄想80%ででき

ています。チート、原作ブレイクが嫌いな方にはお勧めしません。

プロローグ（前書き）

朝見ている人はおはようございます。昼見ている人はこんにちは。
夜見ている人はこんばんわ。

文才の無い八咫鴉です。

処女作ですので、誤字・脱字等至らない点があると思いますが、行
ってけると幸いです。

プロローグ

教授「で、あるからして……」

??? 「…ふう」

キーンコーンカーンコーン

教授「ん？時間か、本日はここまでにする。」

??? 「やっと終わったか。あの教授話がすぐ脱線するし、繰り返すから疲れるな…。」

??? 「いいじゃないか、終わったんだし。それよりこれいいかないか？」

右手を軽く回して、パチンコをする動きをする。

??? 「いいよ、行ってもどうせ負けるし。それより透、お前作成中って言ってたプログラムはできたのか？ あれ、企業から依頼されたやつだろ？ 期限明後日までじゃなかったか？」

回してた右手が止まり、固まる。

透「……あゝ、そういうええあったな、一応作っただけど、消えないバグがあるんだよね」

??? 「バグ？透が消せないなんて珍しいな、どんなバグなんだ

「？」

透「ちょっと待ってろ今出す。」

鞆からまともなデータしか入っていないPCを取り出し見せてくれた。

透「これなんだよ、消しても消しても出てきてさ、やる気失せただよね」

「……これか……、これ、ここをこうしてみたらどうだ？」

透「？……なるほど、試してみるか。」

カタカタカタ……ピコン♪

「……お？」

透「消えた…、流石俺の悪友だけあるな、…バケモノめ。」

「……誰が、バケモノか。今日は研究もないから帰るわ、じゃあな。」

透「おう！消してくれてありがとっ！今度なんか奢るよ！」

「……フツ、期待しないで待っていよう。それじゃあな。」

透と別れ、アパートの近くにある商店街へと、足をむける。

「……さて、今日は肉が安かったな、カレーかシチューが妥当

か？」

晩飯のメニューを考えつつ、交差点にさしかかった。
横断歩道を渡っていると、トラックが突っ込んできた。

??? 「なっ！危ない！！」

少し前を歩いていた少年を突き飛ばしたとたん、世界がブレ俺は
宙に舞い、意識を失った。

目が覚めるとそこは、真っ白な空間だった。

??? 「……ここは、どこだ？あの少年はっ?!」

周りを確認すると、美女と美少女がこっちに頭を下げていた。

美女・美少女 「すみませんでしたっ（すまんかったっ）!!」

いきなり謝ってきた。さっぱり状況がつかめない。
とりあえず、説明してもらった。

美少女 「本当にすまなかった、わしは閻魔じゃ、実はの？お主が

死んだ原因なんだから？」

「原因？交通事故だろ。」

閻魔「うっ、すまぬ、お主が死んだ原因はわしらにあるんじゃない。」

「……？」「なんだと？」

美女「実は、仕事が暇になったので二人で、ラ○トレイ○ンをやっていたんです。あっ私はアテナと言います。」

閻魔「での？夢中になってやっていたら、机の上にあったジュースを倒してしまつての閻魔帳にかけてしまったんじゃないよ。」

アテナ「慌てて、拭き取ったんですが、拭き終わった時には、彼方が死んでしまった後だったんです。本当にすいませんでした！！」

「……？」「……そうか、そんなことよりあの少年は無事なのか？」

アテナ「あの少年はかすり傷程度だったので、無事ですよ」

閻魔「しかし、お主自分の死をそんなこととは、随分あっさりしとるのお？」

「……？」「ん？ああ、人間いつかは死ぬからな、それが早いか遅いかだろ？重要なのは悔いを残さず生きられるかさ。」

アテナ「かっこいいですね、ねえ閻魔ちゃん、なんとかできないかな？彼が死ぬのは惜しいよ。」

閻魔「そうじゃのお、生き返らせることも出来なくなってしまうたからのお。」

???「ん？なぜ、生き返らせることは出来ないんだ？」

閻魔「お主の身体は、もう火葬されてしまってるんじゃよ。それに閻魔帳のお主のページの損傷が酷くてこの世界には、転生できないのじゃ。」

???「……」

あまりのことに絶句するしかなかった。 大学院の卒業まであと数日だったのが悔やまれる。

閻魔「ほかの世界に転生させてやろう。それに、お主が望むことを5つまで願いを叶えることができるのじゃが？どうじゃ？」

???「そうか、すこし考えていいか？」

閻魔「かまわんど、ここは、時間があってないようなもんじゃから」

???「……ほかの世界とはどこの世界だ？」

閻魔「それはの、リリカルなのはの世界じゃ。楽しみじゃろ？」

???「それは、貴女達が楽しみなのでは？」

アテナ「大丈夫ですよ、私が選んできました。彼方の部屋に面白そうな題材がなかったの。」

「……俺の部屋に入ったのか？」

アテナ「はい♪ 整理整頓された、きれいな部屋でした♪」

しかし、リリカルなのはの世界か、2次小説しか読んだことないからな大筋はわかるが、細かいところまでは、わからないな。

ふむ、

……5つか……よしっ！

「……」「決めたぞ。」

閻魔「決まったのかえ？早かったのお。」

アテナ「それで、どんな願いですか？」

「……」「一つ目は、OG's・OG外伝・無限のフロンティア・無限のフロンティアEXCEEDの機体・武装を使えるようにしてくれ。」

閻魔「可能じゃ。」

「……」「二つ目は、戦闘技術とそれに対応できる身体能力。」

閻魔「その程度簡単じゃ。」

「……」「三つ目は、高性能のユニゾンデバイスをくれ。」

アテナ「あげてもいいですけど、パーツをあげますから、彼方が作成してみたらいいかですか？」

??? 「…………面倒なのか？神なのに。」

アテナ 「そ、そんなことないですよっ？ほ、ほら、自分で造ったほうが親しみが持てていいじゃないですかっ？」

??? 「それもそうだな、よし、そうしよう。」

アテナ 「ほっ」

閻魔 「あと二つじゃの？決まってるのかえ？」

??? 「ああ、魔力や特殊技能をくれ。」

閻魔 「いいぞ？おまけで魔力のランクは最終的にEXまでいけるようにしておこう。」

??? 「いや、別にそこまでいらないのだが、貰えるものは貰っておくか。」

アテナ 「そうですよ、その方がおもしろい、平和に暮らせますから。」

??? 「…………まあ、いいだろう、あと一つだったな」

アテナ 「（ほっ）はいっ、それで最後の一つは何ですか？」

??? 「最後は、特殊能力と強化パーツをくれ。」

アテナ 「特殊能力はわかりますが、なんで強化パーツなんですか

「？」

「??? 「なに、いろいろ使い道がある物が多いからな。」

閻魔「そうか、うむ、確かに五つ叶えてやるぞ。」

「??? 「ああ、よろしくたのむ。」

「パアアアア!!」

俺の身体を光が包む。

閻魔「完了じゃ! しかし、チートになったのお」

「??? 「否定はできないな。」

アテナ「いいじゃないですか、楽しければ♪」

閻魔「そうじゃの♪ さて、そろそろ送ろうかの?」

「??? 「世話になったな。会うかどうかかわからないが、またな。」

アテナ「はい! また会いましょう!」

閻魔「うむ、機会があったらまたの。」

「パチンッ シュッ」

閻魔が指を鳴らすと、俺の足元が無くなった。

「??? 「もう少し、穏便な送りかたがあるだろおおおおお」

お！？！？
└

大声を出すことが珍しい???は大声で落ちて行った。

[illegible]

閻魔 ー ● ● ● ○ ー

アテナ
「
・
・
・
○
」

閻魔「行つたのお。」

アテナ「はい、行きましたね。」

閻魔「さてと」

アテナ「はいっ」

「……」を送ったのを確認した二人は、徐に懷からP○Pを取り出し

「閣・アテ「Battle! Lady! Go!」」

再び、ラス〇レ〇ブンを始めるのであった。

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？

文章的におかしなところがありましたら、直そうと思いますのでよろしく願います。

第1話（前書き）

前回と同じ要素でお送りします。

第1話

S市立病院

看護婦「生まれました！ 元気な男の子ですよ！」

??? 「ん、おぎゃあ、おぎゃああ」（ん、ここは、何処だ）

看護婦「元気に泣いてますよ、よかったですね。」

色「ふふふ、そうですね、無事生まれてきてよかったです。」

看護婦「抱いてあげて下さい、一時期危険でしたが、神様と奥さんのがんばりで無事生まれたんですから。」

色「はい、あの人との結晶ですから、いい名前を付けないといけませんね。神様に感謝の意味も籠めて、神、^{じん}この子の名前は、龍鬼^{たつき}神にします。」

看護婦「よかったですね、いい名前をもらって。」

色「これから、よろしくね。神。」

神「おきやおう」（こちらこそ、よろしくね母さん。）

時は流れて、3年後、身体は3才、頭脳は25才のアンバランスな状態になっている。

俺は今、父親の実家のあるM市に住んでいる。なぜかって？それはn

??? 「おおーい、じーん何処におるんじや、時間じゃぞ」

神「（ん？もうそんな時間か）帝祖父ちゃん今行くよー！」

なんでも、父さんの遺言？で男の子なら実家の修行をさせてやってくれと、女の子なら母さんの好きに育てるようにと。

父さんの実家は、武家で身体と心の修行になるらしい、3才からは、早すぎではないだろうか？

疑問に思い、聞いてみたら・・・。

帝祖父「最初のうちは柔軟と精神統一じゃよ、ハッハッハ。」

と、言っていたが実際は・・・。

帝祖父「そらそら！どんどん増やしていくぞー！」

今年で87才の年寄りと思えない、腕力で薪を投げ続ける。

10分ごとに秒間10本から20本とだんだん増えていき、今は・・・

神「祖父ちゃん！（シュッ）これは！（ヒュンッ）いつまで！（シュシュッ）続けるの！！（ビュンッ）」

帝祖父「薪が無くなるまでじゃーハッハッハッハッハ（シュバババババババッ）」

てことに、なっている。

母さんは・・・・・・・・

色「義父さんも元気ですねー」

雫祖母「孫が来て嬉しいんですよ」

と、薪を割り増やしている。そんな毎日を過ごし1年ぐらいたった。

色「義父さん、そろそろに大学病院に戻らないといけないので戻ろうと思います。」

帝祖父「そうか、寂しくなるのお、神や、教えたことしかと守るんじゃぞ。よいな？」

神「己の正義を貫け、決めたことを諦めるな、目の前の事だけを信用するな、そして。」

帝祖父・神「「女性には親切に」」

帝祖父・神「ハハハハハハ」

こうして祖父と祖母とのたのしい？毎日を過ごし、母さん仕事先、海鳴大学病院のある海鳴市へ
海鳴市に着いた俺と母さんは、商店街で買い物をして大学病院近くにある家に着くと電話が来た。

プルルルプルルルガチャ

色「はい、龍鬼です。はい、はい、急患ですね、わかりましたすぐに向かいます。」

神「母さん、病院にはすぐいくの？」

色「ごめんなさいね、晩御飯作って行きたいけど時間が無いみたいなのだ。」

神「大丈夫だよ、母さんの分の晩御飯も作っておくから、行っなきゃよ。」

色「そお、わかったわ、じゃあ行って来るわね。」

神「いってらっしゃい。」

カチャ、バタン

神「さて、晩御飯作って食べてるか。」

母さんは急患だと言っていたから、夜遅くなるだろう。

トントントントン

あつという間に麻婆豆腐の出来上がり、ご飯によく合うね。

神「そうだ、早いうちにデバイス造っておこう、備えあれば憂いなしと。ごちそうさま。」

食器を洗い、母さんの分をラップに包み書置きで、よし。

二階にある自分の部屋に行き出かける準備をする。海に行く必要がある。

神「しかし、祖父ちゃんの家からここまで自動航行で行かせたけど、魔力の消費が感じられないな。魔導炉が働いているのか？」

そう、自分の部屋でやるにも限界がある。だから俺は戦艦を祖父の家に行った時に海鳴市の深海に向けて航行させていた。

祖父と祖母との充実した毎日を過ごしている最中も出したままだったが、機体の大きさが大きいほど魔導炉が内蔵され大きくなるらしい、秘密基地にするにはベストだった。

ただ、戦艦を毎度浮上させていては秘密基地にはならない、なのでデバイス「リユーズ」を造ってみた、転送系と認識阻害系と結界系を重点的にいれ、他の魔法は必要最低限しか入れなかった。

セットアップすると懐中時計になる、ちなみに待機状態は首飾りである。

神「リユーズ、転送。」

R「OK」

足元に二重の円の中心に十字架があり、十字の先端には小さな円

が配置されている魔法陣が赤黒く光ると転送された。

――――戦艦格納庫内――――

シュン

神「さて、研究室に行かねば、時間もないし。」

コツコツコツ

戦艦内は広く艦橋、格納庫、個人部屋、医療室、食堂、風呂、研究室といろいろな施設があった。

（研究室）

神「ふむ、構成率50%か、あと半分だな、母さんになんて紹介するか考えておかないとな。」

画面を見つつ、時間を確認すると母さんが帰ってくる時間が近かった。

神「そろそろ、帰るか。目が覚めるのは明日か明後日だな、またくるからな。」

魔方陣を展開して転送する。

戦艦は再び深海へ潜っていった。

神「明日は荷物の整理しなきゃいけないな。」

布団に入り、その日は眠りについた。

時間は流れ、俺は4才になった。母さんは相変わらず忙しい、なので家には俺しか居ないのは不安だと言う母さんに、桜花を紹介した。桜花は俺のユニゾンデバイスだから信用できる、しかし母さんにはどう説得しようか考えていると……

色「んー、うん、いいわ神のこと桜花さんに任せるわ。」

理由を聞いてみると。

色「神は人を見る目あるし、桜花さんの真直ぐな瞳を見て決めたの、あとは女の勘よ。住込みだけどよろしくね♪」

俺と桜花は呆けてる間に母さんは出勤していった。これで桜花を家に無事？住ませる事ができた。

桜花「よかったのでしょいか？」

神「いいんじゃないか？母さんがOKだしたし。母さんは俺以上に人を見るあるから問題なし。」

桜花「はあ。」

そんなこんなで、桜花が共にすごせるようになった。
……しかし、医療に関わる者が勘っていいのか？

今俺は、桜花と晩御飯の買い物をしに商店街に来ているのだが、

桜花「むゝ、こっちのほうが新鮮ですが、大きさはこちらですね」

はぁ、生まれて間もない筈なのになんで食材の良し悪しがわかるんだ？

能力の共有を確認した時に、雫祖母ちゃんから教わったことも、共有されたか？

晩御飯が美味くなるのはいいが、時間がかかりそうだな・・・。

神「桜花、適当にうろついてるから、買い物が終わったら連絡してくれ。」

桜花「んゝ、はい、わかりました。んゝこっちな？」

当分終わらないな。

神「しかし、どこで時間を潰すかn」

キキッ！ バタッ バタンッ

神「何だこの状況」

誘拐犯A「黙れ！！殺されたくなければ大人しくしろ！！」

女性「ちょっと、誘拐するなら私達だけで十分でしょ！」

誘拐犯B「五月蠅い！お前らを大人しくさせる為の人質だ！」

女性「くっ」

何をして暇を潰すか考えてたら攫われたしまった、しかも月村忍と月村すずかの誘拐に遭遇するとは……………。
さて、これからどうするか。

のんきにそんなことを考えて居たら人気のない場所にある建物内に連れて行かれた。

俺は1階の部屋に投げ入れられた。月村姉妹は、2階に連れて行かれたようだ。

神「さてと」

ブチッ パサ

神「ふう、こんな状況で自分一人だけ逃げる気はない、リ्यूズ、索敵」

R「OK……………1階…入り口に1、奥の部屋に14、2階…2人の正面に3、2階の部屋の外に2」

神「下から潰していくか。」

s i d e 忍

誘拐犯D「リーダー、こいつらどうするんですか？」

誘拐犯A「こいつらか？身代金を受け取ったら殺すから、好きに
していいぞ」

誘拐犯F「じゃあ俺はガキのほうをいただくかな」

すずか「い、いや・・・」

誘拐犯D「相変わらず幼女趣味だな・・・」

誘拐犯A「犯罪者め」

誘拐犯F「俺ら全員犯罪者だろ！！」

誘拐犯A「そりゃそうだ！」

誘拐犯A・D・F「ハッハッハッハッハ！！」

忍「すずか、安心しなさい。私がなんとかするから。」

すずか「・・・お姉ちゃん。」

まずいことになったわね、早く脱出しないと、でも私達だけなら
ともかく関係ない人までまきこんじゃったからなあ。

下手に動けないじゃない、ここは機会を待つしかないかしら。

side end

side 神

誘拐犯 B 「はああああ、暇だ、上じやいいことしてんだろぅなあ」

神 「じゃあ、お前はいい所に送ってやるよ。」

誘拐犯 B 「へっ？」

ゴキッ ドサッ

神 「まずは、一人か」

瞬転刀を使い、誘拐犯の頭上に転移し、誘拐犯の顎と頭を掴み一気に捻った。

ゲーム内では19mだったが、再現したのはわずか20cmだった。

普通の短剣としても使え雷を纏わせて切ることも可能な代物だ。投擲しても自動で戻ってくるし、使い勝手が良すぎるが、数が10個までしか出せなかった。

神 「さっさと片付けるか。」

瞬転刀を3つ転移させ、自身も転移した。

誘拐犯 C 「はあ、中は楽しそうだな」

誘拐犯 E 「仕方ないぜ、リーダーが決めたんだから。」

誘拐犯C「交代の時間まで暇だな」

神「じゃあ、俺と遊ぶか？」

誘拐犯C・E「「!？」」

バツ

神「後ろだ」

ゴキッ ドサッ

誘拐犯C「て、てめえ!!」

神「遅い」

バリバリッ ドサッ

神「雷撃強すぎるな、スタンショックにしておこう。あとはここだけだな。」

s i d e e n d

s i d e すずか

誘拐犯A「おい、提示連絡どうした？」

誘拐犯D「そういえば、連絡来てないな。」

誘拐犯F「ちょっと確認してくる。」

誘拐犯達が急に慌てだしました。

???「その必要は無いぞ。」

誰かの声が聞こえた瞬間

バリッ ドサッ

誘拐犯の一人がいきなり倒れました。

そこに、一緒に誘拐された男の子がいました。

s i d e
e n d

s i d e
神

誘拐犯A「おい、提示連絡どうした？」

誘拐犯D「そういえば、連絡来てないな。」

他の誘拐犯から連絡が来なくなったので慌てだした

誘拐犯F「ちょっと確認してくる。」

神「その必要は無いぞ。」

ビリッ ドサッ

女性たちに近い誘拐犯を気絶させ、彼女たちの縄を解きに近づく。

神「大丈夫か？」

忍「ええ、無事よ。」

神「そっちの娘も今解く。」

すずか「は、はい」

カチャ

忍「！危ない！！」

神をかばうように忍が飛び出した

バンッ！

忍「くっ」

すずか「お姉ちゃん！！」

わき腹に弾をくらい膝をつく

神「……てめえら、死なずに済むと思うなよ」

誘拐犯D「はっ！餓鬼に何ができる！！」

神「できるんだよ、これがな」

誘拐犯D「へっ？」

バリバリバリッ！！
ドサッ

誘拐犯A「ひっ、ひいいい、く、くるなあああ！！！！」

バンッバンッバンッ！！

神「・・・・・・・・ウアタイルスクラフト」

神は手のひらにエネルギー球をつくり、誘拐犯に投げる。

誘拐犯A「な、なんだこ、これはっ！」

バンバンバンッ

誘拐犯を包んだ球に必死に中から発砲するが、球はビクともせず
徐々に部屋の隅に移動して行った。

神「・・・・・・・・」

神が右手を徐々に閉じていくと球も同調して縮んでいく。

誘拐犯A「た、頼む！た、助けてくれ！！」

神「・・・・・・・・殺そうとしたんだ、殺される覚悟をしてるだろ。」

」

手がピンポン球ぐらいの大きさまで縮んでくると、誘拐犯は身体を丸めているが限界のようだった。

神が手を完全に閉じようとしたとき

忍「やめなさい！」

ピタッ

神「なぜ止める」

忍「それぐらいで十分でしょ？これ以上やる必要があるの？」

神「こちらに向けて撃ってきた、それだけで十分だ。」

忍「いいえ、もうそれ以上やら無くていいわ、私達は望んでない。」

」

神「・・・そうか。」

神はそう言うと言を開き、球を消した。

ドサッ

誘拐犯は出されたが気絶していた。

神「じゃあな。」

神が建物から出ようとする

すずか「待って！」

神「なんだ？」

すずか「な、名前を教えて！私は月村すずか！」

神「・・・神、龍鬼神だ、じゃあな」

そう言うのと、神はあっという間に居なくなった。

すずか「龍鬼、神君かあ」

すずかは、神がいなくなった方を見て呟いていた。
忍はその様子を微笑みながら見ていた。

すずか達から離れ商店街まで戻ってきた。

神「さて、結構時間もたったな、桜花はどこだ？」

桜花「あー！やっと見つけましたっ探したんですよ！」

荷物を持った桜花が私怒ってます、といった風に立っていた。

神「念話すればよかっただろ？」

桜花「あ」

神「忘れてたな？」

桜花「だ、だっていい食材買って帰ると色様の料理と主の作る一品がより美味しくなりますから、食材は厳選しませんと!!」

余程美味しかったのか桜花が力説してきた。そんなに気に入ってくれたなら、いいもの作るとするか

神「まあいいか、じゃあ帰るか」

桜花「はいっ」

家に帰ると母さんが帰っており、皆で仲良く晩御飯を作り食べた。桜花が終始笑顔だったと言っておこう。

神「ふう」

桜花「どうしたんですか？ため息なんてついて。」

神「今日誘拐されてな、撃退したのはいいが感情にまかせて危うく犯人を殺すところだった……。」

桜花「主……。」

神「覚悟が足りなかったのかもな、己が正義を貫くための覚悟が。」

桜花「主なら大丈夫ですよ、私もいますし、色様もいますから。」

神「そうだな、そうだったな。さて、寝るか」

桜花「はい、お休みなさい、主。」

神「ああお休み、桜花。」

カチ

こうして俺は、自分の覚悟を固めていくのであった。

第1話（後書き）

感想、誤字脱字あったらご連絡ください。

キャラクター設定（前書き）

今回は主人公達の設定です。

キャラクター設定

八咫鴉（以後八咫） 「初めまして！作者の八咫鴉です。」

神「どうも、主人公の龍鬼神だ。」

八咫「いやあ、ようやく第1話だせたよ」

神「おい」

八咫「はい？」

神「はじめから平和とはかけ離れてるな。」

八咫「……………」

神「……………」

八咫「そ、そうそう、キャラ設定いってみよ」

神「おいっ」

氏名…龍鬼^{たつきじん} 神CV…森川智之

性別…男

年齢…4歳（第1話終了時）（精神年齢26歳）

容姿…服装は、黒のシャツ、紺のGパン、黒の野球帽をかぶっている。

髪は黒く膝裏まで、瞳は黒、顔は中世的だが少し女性よりで、よく女に間違えられる。

ステータス…魔力C 身体能力SSS（祖父の特訓前はS） 空戦S 知力SS

性格…帝祖父の影響で女性には優しい。

信用している人には優しいが、敵、或は信用していない相手には厳しい。

信用してる人は、名前で呼ぶが、信用していない相手は、フルネーム或は役職だけで呼ぶ。

能力…OG's・OG外伝・無限のフロンティア・無限のフロンティアEXCEEDの機体（無印時同時再現数 S…100機、M…10機、L…5機、LL…戦艦を除き1機）・武装が使用可能

OG's・OG外伝の特殊技能

OG's・OG外伝・無限のフロンティア・無限のフロンティアEXCEEDの特殊能力と強化パーツ・アイテム

デバイス…リユーズ

ストレージデバイス

待機時は首飾り、セットアップ時は懐中時計とナイトファウルになり腰に下げている。

バリアジャケットは無限のフロンティアのハーケンの格好、サングラス。

氏名…南舞^{なんぶ} 桜花^{おうか} ユニゾンデバイス CV…ゆかな

性別…女

マスター…神

年齢…外見20歳

容姿…無限のフロンティアの神夜。

普段着は、淡い青無地の着物 或は、白の裾の長いシャツ、淡い紺のGパン

性格…基本的に大人しいが、主人公と色の作るご飯の事となると多少暴走する。

戦闘中は護式・斬冠刀、花札を基本的に使用する、剣技なら神より少し劣る程度。

ユニゾンしなくても神の能力を共有しているため、武装などが使えるが、許可がない場合は5段階能力が下がる。

ユニゾンすると神の姿は漆黒の甲冑になる。髪は銀になり、兜の隙間から出ている、指先は鋭利。

Fate／Zeroのバーサーカーの容姿が一番近い。

八咫「・・・チートだな」

神「書いてるお前が言うな。」

八咫「いいじゃんか」

神「桜花は斬冠刀か、能力の共有にユニゾン後の格好は甲冑か。」

八咫「当分出ないけどね！」

神「そうなのか？」

八咫「そそ、無印は戦闘には出ないかな？ A、Sからかな？と考
えてたり考えてなかったり。」

神「言っていいのか？」

八咫「まあ、予定は未定だからな！」

神「そうか」

八咫「じゃあそろそろ本編の戻ってくれ」

桜花「こんにちは」

神「もう終わるぞ？」

桜花「え！ようやく来れたのにひどいですよ」

八咫「ごめんね、じゃ皆さん本編で」

神「ではな。」

桜花「え！本当に終わるんですか？！えっと、本編で会いまし
ょう♪」

キャラクター設定（後書き）

神「そういえば、帝祖父ちゃん達のことは言わなくてよかったのか？」

八咫「んゝ、読者様からみたいって来たら機会を見てあげるかな？」

神「そうか」

八咫「ではではゝ」

第2話（前書き）

お待たせしました。

ようやく出来ました。

では、どうぞ！

第2話

S i d e 神

月村姉妹誘拐事件から数日経ったある日。
今日は母さんが仕事で帰ってこないの、俺が作ることになる。
そのお蔭で桜花が食材選びに余念がない。
また時間がかかるな。

神「桜花、またその図書館にいるからな。」

桜花「はーい、誘拐されないでくださいねー、んーこっちなー」

神「はあ」

商店街から出て図書館へ向かう。

交差点に差し掛かったとき信号で高級車が停まった。

神「ふぁー（この間は、誘拐に巻き込まれたからな、一応気を付けておこう。）」

そんなことを思いながら横断歩道を渡ろうとしたとき、高級車に向けてトラックが突っ込んできた。

男1「大人しくしろ!!」

少女「離しなさいよ!」

トラックから出てきた男達は、高級車の後部座席から金髪の少女を連れ出してトラックに乗っけて何処かへ行ってしまった。

神「・・・・・・・・リ्यूズ、今のトラックを追尾」

R「了解・・・・・・・・現在北東へ移動中」

神「そうか、おい、運転手大丈夫か？」

執事「わ、私よりも、お、お嬢様を・・・」

神「わかってる、救急車呼んでおくからな。」

現場から少し離れ、路地に入る。

神「リ्यूズ、トラックの現在位置は？」

R「はい、現在北東へ移動中」

神「追うぞ、認識障害を」

R「了解」

トラックを追って移動するとトラックは廃工場で停まっていた。

神「リ्यूズ、中の様子は？」

R「索敵・・・・・・・・工場内に12人、2人が部屋の中で、10人が部屋を囲むようにいます。」

神「周りから始末していく。」

R「了解」

side end

side アリサ

車で家に帰る途中、突然の衝撃に驚いていると、見知らぬ男が来て

男B「大人しく来てもらおうか」

アリサ「なによ!」

男B「大人しくしろ!!」

アリサ「離さないよ!」

男達にトラックに無理やり乗せられ、手足と目隠し猿轡を付けられた。

鯨島は大丈夫だろうか、トラックは長距離移動し停まった、何処かについたようだ。

目隠しと猿轡がはずされると見知らぬ男が目の前にいた。

男A「手荒なこととして失礼しました、お嬢様。」

アリサ「誰よ」

男A「私は少々お嬢様のお父様に用事があるものですよ。」

アリサ「ふん、あんたなんてお父さんは相手にしないわよ。」

男A「それはどうでしょうねえ、やってみませんか
よ、ふっふっふ」

???「その必要はないぞ」

部屋の扉が開き大剣を持った少女?が立っていた。

男A「!?!? 誰だ! 外のやつらはどうした!!」

???「さあな」

少女?はゆっくり近づいてきた。

side end

side 神

部屋の外にいる犯人達をまとめて始末する。

神「ふっ、つばくろのかい燕の介」

護式・斬冠刀で、円を描くように唐竹割り、斬り上げ後3連続で
斬り上げていく。

犯人達「ぐはっ！」

神「ラストだ、如来の鉢」
によらいのはち

犯人達を巻き上げるように月麟がちりんを射出し、上がったところを唐竹
割りで斬る。

犯人達「がはっ！」

神「ふう、リ्यूズ残りは」

R「部屋の中の2人だけです。」

神「いくぞ、警察に連絡を」

R「了解」

犯人を倒すのに能力の再確認をしていた。
戦艦以外は機体の元のサイズによって一度に再現出来る数に制限
があるようだ。

神「ラスボス級と幹部級は使用を控えよう、加減が難しいが、い
つでも使えるようにしておかないとな。」

神はそんなことを呟きながら扉の前まで来たとき中から声が聞こ
えてきた

男A「手荒なこととして失礼しました、お嬢様。」

少女「誰よ」

男A「私は少々お嬢様のお父様に用事があるものですよ。」

少女「ふん、あんたなんてお父さんは相手にしないわよ。」

男A「それはどうでしょうねえ、やってみませんか
よ、ふっふっふ」

神「その必要はないぞ」

男A「!?!? 誰だ! 外のやつらはどうした!!」

神「さあな」

男を無視して少女に近づこうとすると男は神に拳銃を向け照準を
あわせる。

男A「動くな! これが見えていないわけじゃないですよ? 大人
しくお帰りなさいお嬢さん?」

神「それは聞けないなっ!」

花札を創り射出し拳銃を吹飛ばし、男に斬りかかる。

男A「がはっ」

斬られた男Aはその場に倒れた、血が出ていないところを見ると
みねうち

神「ふう、さて大丈夫か」

少女の縄を解きながら確認すると

少女「誰よあんた」

神「単なる通りすがりだ、じゃあな」

少女「待ちなさいよ！」

これ以上時間がかかると桜花に怒られるかもしれないから帰ろうとすると少女に止められた

少女「あんた名前は？私はアリサ・バニングスよ」

神「名乗られたら答えないとな、龍鬼神だじゃあな」

パトカーのサイレンが聞こえてきたのでさっさと帰ることにした。廃工場から離れ歩いているとパトカーとすれ違った、これである娘は大丈夫だろう。

桜花のいる商店街に急ぐことにした。

結果的に桜花に怒られた、晩御飯のおかずを一品増やすことになった。

晩御飯の間桜花は終始嬉しそうに食べてた、作った側としてはうれしい限りだ。

時はさらに進みある日の昼下がり、俺は5才になり、日課の散歩に出ていた。

最初のころは桜花がまた事件に巻き込まれるのではと気にして、ついて来ていたが、母さんに

色「大丈夫よ桜花さん、神だってもう5才だもの、ちゃんと帰って来れるわよ。」

と言われて、しぶしぶ了承して見送ってくれた。

まあ、たまに物陰から見ているが・・・。

今日も公園のベンチで日向ぼっこでもしようかと来てみると女の子が泣いていた。

神「・・・・・・・・。」

少し様子を窺って見てもいっこうに泣き止む気配がない。ここで無視するのも寝覚めが悪いので話しかけることにした。

神「大丈夫か？」

なのは「ぐすつ、ふえ？」

神「俺は龍鬼神、きみは？」

なのは「なのはは、高町なのはなの。」

神「そうか、でなぜ泣いていた？」

なのは「そ、それは・・・」

まとめるとこうなる。

父親が大怪我をして入院しているために母親も姉も忙しく、兄は毎日訓練をしており、怖い顔している。

ということらしい。

神「そうか、じゃあお父さんのお見舞いに行こうか。」

なのは「お見舞いにいくの？」

神「そうだ、お見舞いに行けばお父さんが早く元気になるかもな。」

なのは「それならなのは行くの！」

なのはは、泣き止んですぐに病院に向かおうとする。

神「ちょっと待った。」

なのは「きゃっ、なにするの?!」

俺は襟を掴んで止める。

神「先に家の人に言うてから行こう、俺も行くから。」

なのは「わかったの!」

side end

side なのは

お父さんが大怪我をして入院しちゃったから、お母さんもお姉ちゃんもお兄ちゃんも忙しそうなの。

なのはいい子にしているの、そうしたら皆に迷惑がかからないから、今日も公園に行くの。

でも、悲しいからこっそり泣いてるの。

??? 「大丈夫か？」

なのは「ぐすつ、ふえ？」

知らない男の子？が声をかけて来たの

神「俺は龍鬼神、きみは？」

なのは「なのはは、高町なのはなの。」

神「そうか、でなぜ泣いていた？」

なのは「そ、それは・・・」

なのはは、今の家の状態を話したの。

神「そうか、じゃあお父さんのお見舞いに行こうか。」

なのは「お見舞いにいくの？」

神「そうだ、お見舞いに行けばお父さんが早く元気になるかもな。」

なのは「それならなのは行くの！」

そうと決まったらすぐに行くの！

神「ちょっと待った。」

なのは「きゃっ、なにするの?!」

神君が私の襟を掴んで引っ張る。

神「先に家の人に言ってから行こう、俺も行くから。」

なのは「わかったの！」

俺達はなのはの家である翠屋に向かった。

翠屋という名を聞いて母さんが話していたのを思い出した。

病院の患者さんが話していたのを聞いたらしい、言ってみたいって言ってたな。

そんなことを考えているうちに着いたらしい。

なのは「ここなの！」

神「ここか、いい店だな。」

なのは「お母さんただいま」

桃子「おかえりなさい、なのは。あら？そっちの子は？」

なのは「公園で遊んで友達になったの！」

神「龍鬼神です。こんにちは。」

桃子「あら、礼儀正しいのね。こんにちは、なのはと仲良くしてね。」

神「はい、こちらこそよろしくお願いします。」

???「なのは帰ったのか。」

なのは「あっ、お兄ちゃんただいま」

恭也「お帰りなのは。そっちの子は？」

なのは「この子は「妹をほおって復讐に眼がむいている人に名乗る名は無い。」神君?!」

突然なのはが神君をお兄ちゃんに紹介しようとしたらすごい事言ったの！

桃子「あらあら」

恭也「きさま、気に入らないな道場に来い！」

なのは「お兄ちゃん?!」

神「ああ」

道場に移動していく恭也と神、そんな2人を見ていたなのはと桃子は

なのは「お母さんどうしよう」

桃子「見てきなさい、なのは。」

なのは「うん！」

side end

side 神

なのはが道場に入るとお互いに距離をとり木刀を構えていた。

恭也は木刀を2本を持って構えている。神は何も持たずただ立っているだけだった。

恭也「武器を持って！」

神「武器は不要体術で十分だ。」

恭也「なめるなあっ！」

恭也は左右の木刀を連続に斬りかかったが、神はバックステップや身体を反らしたり、するのみでいっこうに攻めようとしな

恭也「逃げるなっ！」

苛立った恭也は神速の構えをとる。

神「甘いっ！」

神は恭也が構えをとる瞬間に接近し顔面・連ジャブ

恭也「ぐっ」

怯んだところを2連アッパーで上げ

恭也「がっ」

上がったところを6連続蹴りでさらに上げ

恭也「ぐがっ」

落ちてきたところを正拳でふっ飛ばす！

恭也は木刀で防ごうとしたが、木刀は碎け散り鳩尾にめり込んだ

恭也「がはっ！」

恭也は道場の壁まで飛び崩れ落ちた。

なのは「お兄ちゃん！」

なのはは慌てて恭也に近づく

なのは「お兄ちゃん大丈夫なの？！」

神「気絶しているだけだよ、問題ないけど無理に動かさないようにな。」

なのはが恭也を揺すろうとしていたのを止め、仰向けにしておく。

神「(恭也はこれで少しはまともになればいいが・・・)」

神「さて、なのは、なのはのお父さんのお見舞いに行くか。」

なのは「うん、でもお兄ちゃんが・・・。」

神「大丈夫だ、加減はしてあるからそのうち起きるだろ。」

神はそう言うのと道場から出て行く、なのはは慌ててついていく。

神「それでは、お邪魔しました。」

なのは「お見舞いに行ってきます!」

桃子「あらあら、2人ともいつてらっしゃい。」

病院に向かう2人を微笑みながら見送っていた。

病院に着きなのはの父が寝ている病室に来ている。

なのは「お父さん・・・。」

神「大丈夫だ、祈っていればすぐに元気になるさ。」

なのは「うん、がんばってお祈りするの!」

なのはが一生懸命祈っている間に神はなのはの父の状態を見て、早急に手を打つことを決めていた。

その後、面会終了時間が近づいて来たのでなのはを家に送り帰宅した。

色「ねえ神？今日病院に来てなかった？」

晩御飯の最中母さんがそんなことを聞いてきた。

神「友達と行ったよ。どうかしたの？」

色「いえね、他の看護師さんたちがかわいい女の子と男の子の格好をした女の子が父親の面会に来たって話してたからもしかしてとおもってね。」

神「はあ、やっぱり女の子に見えるのか……（ボソツ）切ろうかな髪。」

いい加減長い髪を切ろうかなとおもったら

色・桜花「だめよ！（です！）」

神「!!」

母さんと桜花に力強く止められてしまった。
理由を聞いて見ると

色「神の髪は綺麗から大事にしなきゃね。」

桜花「そうですよ！」

力説されてしまった。切るに切れない状況なので髪を切るのを諦めることにした。

色「で、話がそれちゃったけどもう一人のかわいい女の子ってだれ？」

神「ん、ああ母さんが前言ってた翠屋の子だよ。その子の父親が入院してるんだってさ。」

桜花「そうなんですか、はやく良くなるといいですね。」

色「そうね。」

神「うん。」

そんな話をしながら晩御飯が終わり、各自寝る時間になり寝た。

深夜、家を抜け出し、なのはの父親の居る病室へ向かう。

神「早速役に立つとわな。」

神は腰につけているポーチから金のりんごを取り出した。

神「このまま、食べさせるのもまずいか。」

近くにあったコップに金のりんごを搾り、なのはの父親に飲ませると淡く全身が光に覆われ、光が収まる

士郎「・・・・・・・・ん」

神「気がついてきましたか。」

士郎「ここは・・・・・・・・君は誰だい？」

神「貴方の末娘の友人と言っておきましょう、それとこれを飲んでおくといいですよ多少は回復します、それでは。」

神は手短に話し、カプセルをテーブルに置くと、士郎が呼び止める間も無く病室から出て行った。

士郎「なのはの友達か・・・・。」

士郎はそう呟くと、カプセルは飲まずに眠りについた。

家に帰ると桜花が自分の部屋に居た。

桜花「よかったですか？これで平和に過ごせなくなるかもしれませんよ？」

神「助けられる人は助けようと思ってるからな、それに泣いている子をほってはおけないだろ？」

桜花「ふふふ、そうですね。寝ますか。」

神「そうだな。」

神と桜花はそれぞれのベットに入り眠りについた。

side end

side なのは

今日はお母さんとお姉ちゃんと3人でお父さんのお見舞いに行くの！昨日たくさんお祈りしたからお父さんきつと元気になってるの！病室につくとお父さんが寝てるの。

桃子「じゃあ、花瓶の水換えてくるわね。」

美由希「あつわたしも行くよ。」

2人が病室から出ていくなか、なのはは士郎のベットの脇にある椅子に座り士郎の手を握った。

なのは「お父さん……。」

士郎「ん……んーよく寝た、おはようなのは。」

なのはが呟くとそれに答えるように士郎が眼を覚ました。

なのは「えっ！」

ガシャン！

桃子「士郎さん……。」

美由希「お父さん……。」

士郎「やあ、おはよう桃子さん美由希。」

桃子「士郎さん!!」

お母さんがお父さんに飛び込んでからいつきにあわたしくなったの！お母さんはわんわん泣いちゃうし、お医者さんは奇跡だ信じられないって言って倒れちゃうし、でもお父さんが元気になってよかったの！

お母さんとお姉ちゃんがお医者さんの話を聞きに行ってから、お父さんがこっちを見て

士郎「なのは、なのはの友達に髪が膝まで女の子っているかい？」

なのは「髪が膝まで？んゝわかんないの、男の子ならいるの！神君っていうの！どうかしたの？」

士郎「（男の子だったのか）そうか、その子はやさしいかい？」

なのは「うん！公園で一緒に遊んだり、お見舞いにも来たの！」

士郎「お見舞いにも来たか、ありがとねなのは（なのはがここまですぐに信用してもいいかな？）」

士郎はしまっておいたカプセルを取り出し飲んだ。

なのは「？お父さん何飲んだの？」

士郎「ん？もっと元気になるお薬だよ。」

その後お父さんといろいろ話したの、神君の話とかお兄ちゃんが怖かったとかお兄ちゃんを神君が倒しちゃった話とか

士郎「その神君はそんなに強いのか。」

なのは「うん、お兄ちゃんが壁まで飛んでいったの。」

士郎「！そこまでかい。」

s i d e e n d

なのはと士郎が話していると桃子が医者を連れてきた。医者は士郎を診察して

医者「信じられないですが健康そのものですね。これなら今日退院しても問題ないですよ。」

と言っていた、退院許可がでたので退院することにした。話しながら家に帰る途中

士郎「なのは、なのはの友達に会ってみたいな。」

なのは「なのはもまた遊びたいから呼んでくるの♪」

なのははそう言うど公園の方に走っていった。

桃子「あらあら、元気ね。」

士郎たちはなのはを見送り家に向かつていった。

side 神

なのはの父親、士郎を回復させた日の次の日、日課の公園で日光浴をしていた。

今日は母さんが休みなので3人で日光浴をしている。最初は一人で行こうとしたが

色「神が普段何やってるかみてみたいな。」

と言って一緒に日光浴している、桜花は

桜花「色さんが行くならわたしもいいですよね。」

と言ってついでにきた。まあいいんだが

そんな感じで3人並んでベンチに座っているとなのはがこっちに走ってくる。

なのは「神くーん！」

神「ん？」

色「誰かしら？」

桜花「誰でしょう？」

なのはが神達の前まで走って来ると

なのは「やっと見つけたの！」

神「どうしたんだ？そんなに急いで。」

なのは「遊ぶの！」

神「そうか、今日は公園で遊ぶのか？」

なのは「なのはの家で遊ぶの！」

色「なら、私達もご挨拶に行きましょうか。」

桜花「そうですね。」

なのは「神君、この人たちは？」

神「俺の母さんと住込みで働いてる桜花だよ。」

なのは「はじめまして、高町なのはです、よろしくお願ひします
なの。」

色「ふふ、こちらこそ初めまして、神の母親の龍鬼色たつきしきよ。」

桜花「南舞桜花です、こちらこそよろしくね。」

神達はお互いに挨拶をした後なのはの家に向かった。
向かってる途中になのはの家が翠屋だと聞いて色と桜花は喜んで
いた。

雑談しながら歩いているとなのはに家についた。

なのは「お母さんただいまなの。」

桃子「お帰りなさいなのは。」

神「こんにちわ。」

色「初めまして、神の母の色といいます。」

桜花「初めまして、南舞桜花です。」

桃子「あら、こちらこそ初めましてなのはの母の桃子といいます。

」

色達が挨拶をしていると士郎が奥から出てくる。

士郎「お客さんかい？」

桃子「なのはが友達を連れてきたんですよ。」

士郎「おおそうか」

神「初めまして、龍鬼神です。」

色「神の母の色です。」

桜花「初めまして、南舞桜花です。」

士郎「これはご丁寧に、翠屋の店長をやってる高町士郎です、よろしく。」

士郎と神達も挨拶を交わし、紅茶を飲みながら雑談していると士郎が神に耳打ちをしてきた。

士郎「神君。」

神「なんでしょう士郎さん。」

士郎「怪我を治してくれて本当にありがとう。」

神「いえいえ、なのはちゃんが泣いてましたから。」

士郎「そうか。」

神「でも、秘密にしてくださいね？過ぎたものは争いをうみますから。」

士郎「わかった、僕の心に秘めておこう。ところで、神君？」

神「なんですか？士郎さん。」

士郎「恭也をのしたのは君かい？」

神「恭也？ああ、妹をほっておいて復讐に眼がいった人ならそうですね。」

士郎「そうか、ありがとう。本来なら僕がやらないといけないことだったのに。」

神「気にしないでください。個人的に気に入らなかつただけですから。」

士郎・神「あはははっ」

士郎と神が2人で笑ってるのを見て女性陣は首を傾げていた。夕方になり、お茶会はお開きになり、神達は家に帰っていった。

神達は、それ以降も時々翠屋に行ったり、公園で遊んだりした。お互いの家に泊まったこともある。翠屋で手伝いもした。

いつしか神となのはは、私立聖祥大附属小学校に入学した。

1年2年は神となのはは、同じクラスにならなかった、なのはは残念がっていたが、

神が「いつかは同じクラスになるだろう。」と言っていたのでクラス変えの時はものすごく祈っている。

アリサとすずかにも再開した、なのはが神に紹介したときは2人とも驚いていたが、すぐにうちとけた。

そんな日々を過していた。

そして

神「ん？ ついに来たか。」

ついに海鳴市に

桜花「これからですね。」

21個の古き結晶が

神「ああこれから始まる。」

降りそそぐ

神は空に流れる青い流星を見ながら、呟いた。

神「……………己が正義を貫く時が」

第2話（後書き）

八咫「次回から無印本編に入れると思う。入れるといいなあ。」

神「やっとか」

八咫「言わないでください。気にしてるんですから。」

神「まあ、自覚があるだけましだな。」

八咫「うう、これ以上攻められると精神的にきついので今回はこの辺で！」

神「ああまたな」

八咫「それでは皆様、次回から無印スタート！」

第3話 『無印』 (前書き)

やっとできました。

アニメを見ながら書いているので更新が遅れてってます。

項目に原作ブレイクと書きましたが出来ているかは不明です。

それでは、駄文ですがよろしくお願いします。

第3話 『無印』

21個の古き結晶：ジュエルシードが海鳴市に降り注いで数日たった。

神と桜花は広域エリアサーチでジュエルシードを探し、回収することに成功した。

「誰か：僕の声聞いて：力を貸して……魔法の：力を……。」

昨夜睡眠中にそんな声が聞こえてきた。

原作と同じくユーノが一人でジュエルシードを回収しようとして力尽きたんだようだ。

神に聞こえたようになのはにも聞こえているのだろう。

となるとフェイトがこの町に来るのも時間の問題である。

神は現在準備が終了している項目をチェックしながら、授業を受けていた。

昼になりなのは達に誘われ、屋上で昼食をとることになった。

side 神

戦艦内の設備の改造状況を確認しているとなのはがお弁当を食べながら呟いてる。

なのは「将来かあ……。」

神「将来がどうした？」

アリサ「さっきの授業で今から将来のこと考えてもいいかもって

言われたのよ。」

神「なるほどな」

なのは「神君は将来どうするの？」

神「俺か？まあ旅に出てみたいな。」

すずか「旅に？」

神「この世界で見たことない場所はまだまだあるからな。」

なのは「ふえー、いいなあアリサちゃんとすずかちゃんはどう決まってるんだよね？」

アリサ「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、ちゃんとあと継がなきゃぐらいだけど？」

すずか「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいなってるけど。」

なのは「そっか3人共すごいよね。」

神「（ふあ眠い、遅くまで艦内で設備の確認してたから眠い。少し寝るか…。）」

アリサ「でもなのはは喫茶翠屋の2代目じゃないの？」

なのは「うん…それも将来のビジョンの一つではあるんだけど…やりたいことは何かあるような気もするんだけどまだそれが何なの

かハッキリしないんだ……私特技もとりえも特にないし……。」「ばかちん!」」

アリサ「自分からそういうこと言うんじゃないの!」

すずか「そうだよ、なのはちゃんにしかできないこときつとあるよ?」

アリサ「大体あんた!理数の成績はこのあたしよりいいじゃないの!それでとりえがないとはどの口が言うわけ?」

アリサがなのはを押し倒し背後から頬を引っ張った。

アリサ「ああ?」

なのは「らってなのは文系苦手らしくらくも苦手らしく」

すずか「2人共やめようよぉ、神君もとめてよ」

神「……ZZZ」

神はアリサの2代目あたりからすでに寝ていたが、なのは達はなのはに氣をとられて氣がついていなかった。

すずか「神君起きてよ」。

すずかが神を起こそうとするが起きる気配がなく、神は昼休みが終わるまで寝ていた。

side end

side　なのは

授業も終わり放課後神は用事があると言って、1人で帰っていった。

なのは達は塾に行く途中アリサが見つけた近道を通ることになった。

「たすけて」

なのは「！（今声が聞こえた気が？）」

アリサ「なのは？」

すずか「なのはちゃん？」

なのは「今何か聞こえなかった？なんか声みたいな。」

アリサ「別に。」

すずか「聞こえなかった…かな？」

アリサとすずかは聞こえなかったと言うがなのはは気になって仕方なかった。

「たすけて！」

なのは「！（ハッキリ聞こえた！）」

なのは声が聞こえた瞬間聞こえた方向に走り出していた。
なのはが走り続けると道の真ん中にフェレットが居た。

近づくともフェレットは反応を示しなのはの方を見上げた、どうやら怪我をしているようだ。

なのはが抱えあげるとアリサとすずかが追いついてきた。

アリサ「どうしたのよなのは、急に走り出して。」

すずか「あっ見てフェレットが怪我してるみたい。」

なのは「う、うんどうしよう?」

アリサ「どうしようって…とりあえず病院?」

すずか「獣医さんだよ。」

アリサ「この近くの獣医さんって」

すずか「待って家に電話してみる。」

すずかが家に電話し獣医の住所を聞きなのは達は急いで獣医に行った。

side end

side 神

なのは達が獣医に向かっていくと……。

カサカサッ

??? 「キシィ」

なのは達が居た近くの木の上から30センチぐらいの大きさのカメレオンのような生き物？が姿を現した。

【八咫鴉MEMO】

—ボフリィ 烈級修羅神

—

—能力…周囲の地形に合わせて自在に体色を変化させることが出来る。—

ボフリィを通して神がその状況を確認していた。

神「（ふむ、接触したか。当分は監視だけでいいな。）」

神が先に帰った理由はこれだった。

なのはとユーノが会うのを確認と再現した機体の遠隔操作限界を探ることにあった。

なのは達の方は問題なく終わり、遠隔操作限界は現状海鳴市内なら問題ない事がわかった。

神は分割していた意識を戻し、リユーズの調整を再開した。

神「今夜か…。」

神は調整の手を止めて夕暮れを眺めていた。

side end

sideなのは

なのは達はフェレットを動物病院へ連れて行き、治療が終わるのを見届けた後急いで塾に向かい助けたフェレットをどうするか相談していました。

アリスの家は犬、すずかの家は猫、なのはの家は飲食店だが、なのはは家族に相談することにした。

塾が終わりなのはは晩御飯の時に家族相談したら皆OKしてくれた。

寝る前にアリスとすずかにOKが出たことをメールしなのはは寝ようとしていた。

キイイイイン

「聞こえますか？僕の声が…聞こえますか?!」

なのは「夕べの夢と昼間の声と同じ声？」

「聞いてください…僕の声が聞こえるあなた…僕に少しでも力を貸してください。」

なのは「(あの子が喋っているの?)」

「お願い！僕のところへ！！時間が…危険がもうっ！」

なのは声が聞こえなくなると急いで動物病院へ向かった。

なのはが動物病院へと着くと病院内からフェレットが逃げ出てきた。

フェレット「助けに来てくれたの？」

なのは「しゃべった?!」

フェレットの後から何かが出てきてた。

なのははフェレットをつれて逃げ出した。

逃げている途中なのははフェレットからどういう状況であるかを確認すると

協力を求められた、簡単に説明するところなる。

彼は探し物をしに別の世界から来たという。

自分だけの力だけでは集められない可能性があるから資質のあるなのはに協力してほしい。

ということになる。

話している間になぞの生物が降ってきた。

なのは「どうすればいいの。」

フェレット「これを」

フェレットは首に下げていた赤い宝石をなのはに渡した。

フェレット「それを手に目を閉じて心を澄まして。僕の言う通り

に繰り返して。いい？いくよ？」

なのはは宝石を持ち目を閉じ念じる。

フェレット「我使命を受けし者也」

なのは「われ使命を受けし者なり」

フェレット「契約の下その力を解き放て」

なのは「えと、契約のもとその力を解き放て」

宝石が脈動する。

フェレット「風は空に星は天に」

なのは「風は空に星は天に」

さらに力強く宝石が脈動する。

フェレット「そして不屈の心は！」

なのは「そして不屈の心は！」

フェレット・なのは「この胸に！この手に魔法を！レイジング
ハート！セットアップ！」

RH「Stand By Ready Set UP」

宝石…レイジングハートは光輝く

フェレット「…成功だ。」

なのは杖を手に持ち、私立聖祥大附属小学校の制服を改造したような服装に変身した。

なのはが自分の格好に動揺し、フェレットが感動していてもなぞの生物は襲ってくる。

高く跳びなのはめがけて急降下してくる。

なのは「きゃあ！」

なのはは動けず身を固めるが

RH「Protection」

レイジングハートが防御壁を張りなぞの生物を跳ね返す。

なのは達はなぞの生物がばらばらになっているうちに逃げた。
逃げている途中に魔法やなぞの生物の説明を受ける。

再度なぞの生物が襲ってくるがなのはは落ち着きながら防御壁を張る。

なのは「リリカル・マジカル」

フェレット「封印すべきは忌わしき器、ジュエルシード！」

なのは「ジュエルシード封印！」

RH「Sealing Mode Set UP」

レイジングハートから幾つもの桃色のリボンがのび、なぞの生物を縛る。

RH「Stand By Ready」

なのは「リリカル・マジカル ジュエルシードシリアルXXI
封印！」

RH「sealing」

桃色のリボンがさらに伸び今度はなぞの生物を貫く

なぞの生物が消滅すると後から青い宝石が出てきた。

フェレット「これがジュエルシードです、レイジングハートで触れて。」

なのはがレイジングハートをジュエルシードに向けるとジュエルシードは浮き上がりレイジングハートに取り込まれた。

なのはの変身が解け普段着に戻る。

なのは「あれ？終わったの？」

フェレット「はい、あなたのお蔭でありがとう…」

フェレットはお礼を言い終わると倒れてしまう。

なのははフェレットを心配ししゃがむが、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

なのは「ご、ごめんなさ〜い!!」

なのはは謝りながらフェレットを抱え逃げ公園でお互いに自己紹介してから家に帰った。

家に帰り家族にユーノを見せると両親に気に入られ飼うことを許可された。

s i d e e n d

次の日授業中にユーノは今までのことを念話を利用して説明していた。

ジュエルシードがユーノの世界の古代遺産であり願いを叶える魔法の石であること。

古い遺跡の中で発見し輸送中になのはの世界に散らばってしまったこと。

今まで集めたジュエルシードは残り19個であること。

学校が終わり家に帰る途中ジュエルシードの発動を感知した。

なのははユーノと合流すると神社の階段を駆け上っていく。

なのは達が階段を上りきると、原住生物を取り込んだジュエルシードがいた。

黒い体、鋭い牙、鋭い爪を生やした四肢の狼のような姿をしていた。

ユーノ「なのは、レイジングハートの起動を！」

なのは「ふえ？起動ってなんだっけ？」

ユーノ「えっ」

なのは達がそんなことをしている間に狼は駆け出し襲い掛かってくる。

ユーノ「我は使命をから始まる起動パスワードを！」

なのは「ええゝあんな長いの覚えてないよゝ」

狼はなのは達の目の前まで近づき噛み付こうとしていた。

???「シュルター・プラッテ！」

なのはと狼の間に漆黒の円盤がなのはを守るように通り過ぎ神社脇の森の中へ戻っていく。

なのは達と狼は円盤が戻っていった方を見ると漆黒の円盤を装備した大きな漆黒の馬が走ってきていた。

馬は走っている勢いのまま狼に突っ込んだ。

狼「ガアアッ」

狼はかわせず反対側の森に吹っ飛んだ。

なのはとユーノが呆然としていると馬がゆっくり近づいてくる。

なのは達の傍まで来るとその大きさがよくわかる。

なのはに比べて倍以上に大きいのだ3mはあるだろう。

馬はなのはと目線を合わせるように首を下げる。

???「呆けていないで早くセットアップしろ。」

なのは「ふえ?!」

ユーノ「念話?!」

???「早くしろ!」

馬はなのはに怒鳴りながらも狼を飛ばした森を見続けている。

ユーノ「なのは今のうちに!」

なのは「う、うん レイジングハート セットアップ!」

RH「Stand By Ready Set UP」

なのはがバリアジャケットを装備するのを見届けると漆黒の馬は静かに居なくなった。

なのは「あ、あれ? 馬さんは?」

狼「グルアアア!」

なのはが辺りを見渡していると、森の中から狼がなのはめがけ突進してきた。

なのは「きゃあ!」

RH「Protection」

なのはにぶつかる前にレイジングハートが防御壁を展開する。

防御壁と突進力が拮抗するがレイジングハートが弾く。
狼は弾かれ倒れる。

なのは「えっと、封印ってのをすればいいんだよね？レイジングハートお願いね。」

RH「All Right Sealing Mode Set UP」

レイジングハートから幾つものリボンが伸び狼を縛る。

なのは「リリカル・マジカル ジュエルシードシリアルXVI
封印！」

RH「Sealing」

狼の姿は消えジュエルシードがレイジングハートに吸い込まれる。

なのは「これでいいのかな？」

ユーノ「これ以上ないってぐらいに。」

なのは「えへっ、あっあの馬さんの名前聞くの忘れちゃった。今度あったときちゃんと聞かなきゃ！」

ユーノ「（あの馬はいつたいなんだったんだろう？使い魔なんだろうか？）」

なのは達は敵か味方かわからない使い魔？のサポートを受け無事ジュエルシードを封印することができた。

なのは名前を聞くことに決意を固め、ユーノは馬の存在に疑問をもったが答えはでなかった。

ことを終えたなのは達は夕暮れの中を歩いて帰るのだった。

side 神

日曜日、なのはに誘われ士郎さんがコーチをしているサッカーチーム翠屋JFCの試合の観戦しに来ていた。

神「(原作だとサッカーのあとにジュエルシードが発動するが…さて、どうするかな?)」

アリサ「神、あんたはやらないの?」

神「やらない。」

すずか「うまいとおもうけどなあ。」

神「煽ててもやらないぞ?この手のスポーツは苦手だな。」

アリサ「へへ、あんたでも苦手なものあるんだ」

神「力加減が難しくてな、昔祖父ちゃんとやったけどサッカーボールが粉碎した。」

なのは・アリサ・すずか「「……………」」「」」

アリサ「が、がんばれー！」

神「ふぁあゝ。」

審判「ピピッー！ 試合終了！！」

サッカーは何の問題もなく終わった。

け、決

して作者がスポーツに疎いからではない。たぶん。

打ち上げは翠屋で開かれた、神はユーノの紹介のためなのは達と外にテーブルを出して、ケーキを食べてた。

アリサ「それにしても改めてみるとこの子フェレットとはちよつと違う？」

なのは・ユーノ「「！」」

すずか「そういえばそうかな、動物病院の医院長先生も変わった子だねって言ってたし。」

神「案外フェレットじゃなかったりしてな。」

なのは・ユーノ「「?!」」

アリサ「じゃあ何だって言うのよ?」

神「新種とか突然変異とか」

すずか「そうなのかなあ?」

なのは「ま、まあちょっと変わったフェレットってことで、アリサちゃんすずかちゃん撫でてみて。」

アリサ「わくかわいい」

すずか「本当かわいいよね」

そんな会話をしていると翠屋の中から選手達が出てくる。

選手達「ごちそうさまでした」

士郎「今日はすごいできだったぞ、来週からまたしっかりがんばって次の試合もこの調子で勝とうな！」

選手達「はい、ありがとうございました」

選手達は解散していく、そのうちの1人が鞆から青い宝石を取り出しポケットに入れているのを神となのは見たが、
なのはは気のせいかと思ったのか追いかけなかった。

神「なのはどうかしたか？」

なのは「ふえっ！う、ううんなんでもないよ。」

アリサ「あゝ面白かったはい、なのは」

なのは「え？」

アリサはユーノをなのはに差し出すがユーノは目を回していた。

アリサ「さて、私達も解散？」

すずか「うん、そうだね。」

なのは「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね。」

すずか「お姉ちゃんとお出かけ。」

アリサ「パパとお買い物。」

神「桜花と買い物だな。」

なのは「いいねえ、月曜日にお話聞かせてね？」

士郎「お？みんなも解散か？」

アリサ「今日はお誘いいただきありがとうございました。」

すずか「試合かっこよかったです。」

神「また見たいですね。」

士郎「ははは、みんなありがとな。帰るなら送っていいこうか？」

すずか「迎えが来るので。」

アリサ「同じくです」

神「1人で帰れますよ。」

士郎「なのははどうする？」

なのは「んゝおうちに帰ってのんびりするゝ」

士郎「はは、そうか」

アリサ・すずか「じゃあねゝ」

神「それでは。」

なのは「また明日ゝ」

なのはと別れ俺は一端家に帰りジュエルシードの発動を待つことにした。

少し経つと遠くで発動を感知した。

素早くアウセンザイターを全身装備し、プフェールト・モードで現場に向けて走り出す。

side end

side なのは

なのはとユーノもジュエルシードの発動に気づきマンションの屋上に上がり変身する。

なのは「レイジングハート、お願い！」

RH「Sealing Mode Set UP」

なのはは街の状態を見て驚いていた。

なのは「ひどい…。」

ユーノ「ジュエルシードを人間が発動させちゃったんだ、強い思いを持ったものが願いを持って発動させたとき一番強い力を発揮するんだ。」

なのは「（やっぱりあの時の子が持ってたんだ、私気づいていたはずなのにこんなことになる前に止められたかもしれないのに…）」

レイジングハートのコア周辺が桃色に光る。

ユーノ「?なのは?」

なのは「ユーノ君、こういうときはどうしたらいいの?」

ユーノ「えっ?」

???「ジュエルシードの位置が不明だからな、サーチ系を使うのがいいだろう。」

なのは「あのときの馬さん!」

???「現状を開きたいの难道?」

なのは「はい!」

なのはは杖を掲げると足元に魔法陣が展開される。

RH「Area Search」

なのは「リリカル・マジカル 探して災厄の根源を！」

魔法陣から幾つもの光が木々に向けて放たれる。
そして、

なのは「見つけた！」

ユーノ「本当？」

なのは「すぐ封印するから。」

ユーノ「無理だよ、ここからじゃ遠すぎる。」

なのは「できるよ大丈夫。そうだよねレイジングハート…。」

RH「Shooting Mode Set UP」

レイジングハートの塚がのび、先端の形状は音叉のような形状に変化した。

なのは「行って！捕まえて！」

レイジングハートの周りに幾つもの輪ができジュエルシードに向けて光が放たれる。

RH「Sealing Stand by」

なのは「リリカル・マジカル ジュエルシードシリアルX 封印
！」

なのはのかけ声とともに放たれる砲撃、その砲撃はジュエルシードを確実に捕らえた。

ジュエルシードの封印とともに街に生えていた木々が消えていく。しかし、災厄の爪痕は酷かった。

なのは「いろんな人に迷惑かけちゃったね…。」

ユーノ「えっ？ な、なに言ってるんだ、なのははちゃんとやってくれてるよ。」

???「…。」

なのは「私気づいてたんだ、あの子が持つてるのでも気のせいだ
って思っちゃった。」

ユーノ「なのは、お願い悲しい顔をしないで元々は僕が原因で、
なのははそれを手伝ってくれているだけなんだから。なのは！ なのははちゃんとやってくれる。」

???「魔導師の少女よ」

なのは「…。」

???「後悔して立ち止まるならお前はそこまでだぞ」

なのは「?!」

「????」「決めたことを諦めるな、そうすれば道は開ける、ではな。」

漆黒の馬はその場から去っていく。

なのは「まっ待って!」

「????」
「なんだ」

なのは「名前を教えて?」

「????」
「俺の名か、トロンベと名乗っておこう。」

なのは「トロンベさん…。」

トロンベ「ではな。」

なのは達は漆黒の馬トロンベが去っていくの見届けてから家に帰ることにした。

魔法使いになってはじめての失敗自分のせいで誰かに迷惑がかかるのがつらいです。

そうおもったから私はユーノ君のお手伝いすることに決めて自分なりの精一杯じゃなく。

本当の全力でユーノ君のお手伝いではなく自分の意思でジュエルシード集めをしようと思いました。

もう絶対こんなことにならないように。

side end

side 神

なのはから離れ武装を解除し、街の状況を確認して改めてひどい
なと思っていると。

??? 「うゝゝゝゝ! あかん動かへん。」

車椅子の少女が地面の亀裂に車輪を取られ身動きが取れなくなっ
ていた。

神は近づき亀裂から出してあげた。

??? 「あっありがとうございます。」

神 「いや、かまわないではな。」

??? 「ま、まって、うち八神はやていうんよ? 貴女の名前はな
んていうん?」

神 「神、龍鬼神だ、ではな八神。」

はやて 「神ちゃんかあ」

神は振り向かず去っていくのを見ながらはやてはそう呟いた。

神 「やはり女に見えるのだろうか?」

はやての眩きが聞こえていたらしく夜天の書の主であったことよりそちらが気になっていた。

気を取り直して夜天の書のバグに対するプログラムの作成を必要事項に記していく。

神「プログラムは桜花に頼んで、俺は目の前の件を済まさないと。」

神は眩きながら帰宅するのであった。

神が帰ると晩御飯が用意されており母さんと桜花と楽しく食事をした。

夜桜花にプログラム作成を言うと、とても張り切っていた。よほど暇なのか？

桜花「任せてください！完璧なプログラム作って見せますから！」

神「ああ、たのm「すぐに作りますね！」いや、桜花？急がなくてもいいぞ？期限は12月だからって聞いてないな…。」

桜花は創られてから神から頼まれたことは大体が魔法と関係ないことばかりだったためか

初めての魔法関係の頼みごとで、すごく気合が入っていた。

神の頼みごとの内容を聞くとすぐに自室に戻って行った。

神はあ然としていたが、寝ることにした。

次の日、桜花が目の下に隈を作っていたのは言うまでもない。

第3話 『無印』（後書き）

桜花「出番がほしいです。」

八咫「ごめんなさい。 orz」

神「活動が外だからな、なかなか桜花に会わない。」

桜花「それでも出してほしいですよ。」

八咫「がんばる！……たぶん…できる…かな？」

神「自信がないなら言うな。」

八咫「うう、ともかく読んでる皆様次の話にまた会いましょう！」

桜花「またです！」

神「またな。」

第4話 前編

side 神

神は最近学校の後、目的も無く街の中をうろついていた。

いや、正確には目的はある。

プレシア・テストロッサと話す事である。

だが今の神に座標がわからない相手に会う方法は今のところない。
なので自分が持っているジュエルシードを使い囿として街をある
いている。

神「今日は現れるか？」

????「その人持っているジュエルシードを渡してください。」

神が声のした方を向くと金色の髪のスインテール、深紅の双眸、
斧状の黒いインテリジェンスデバイス、黒いバリアジャケットの少
女が居た。

神「それはこれのことか？」

ポケットからジュエルシードを取り出す。

????「大人しく渡してください。」

神「ふむ、条件をのんでくれるならかまわないぞ？」

????「条件ですか？」

??? 「そんなの聞く必要ないよ！」

神の死角からオレンジ色の狼が襲いかかる。

が、

神「奇襲とは静かにやるもんだ。コール・トロンベ」

神のコールと同時に狼の上に漆黒の馬トロンベが出現する。

トロンベ「ぶるるっ」

??? 「ガァッ」

オレンジ色の狼はトロンベの前足で踏みつけられ身動きが取れなくなった。

??? 「アルフ！」

神は何もなかったかのように少女のほうを向く。

神「さて、さっきの続きだが「アルフを離して！」条件をのんでくれれば解放する。」

??? 「条件ってなんですか。」

神「簡単なことだ、お前フェイト・テストロッサの母親プレシア・テストロッサと話がしたい。」

フェイト「えっ？」

神「簡単だろ？ トロンベ。」

神が呼ぶとトロンベはアルフを解放し神の傍による。

フェイト「アルフ、大丈夫？」

アルフ「ああ、大丈夫だよフェイト、それでどうするの？」

神「どうだ、呑むのか？」

フェイト「わかりました。一応聞いてみます。」

神「そうか、ならこれが家の地図だ話があるとき来い、茶ぐらいはだす。ではな。」

神は自宅の地図を渡し、帰っていく。

フェイトとアルフは呆けて神が去っていくのを見ていた。
帰ろうとした神は振り返り。

神「そういえば言っていなかったな。」

フェイト「何がですか？」

神「俺の名前だ、龍鬼神という、ではな。」

そういうと神は今度こそ去っていく。

フェイト「龍鬼・神か、母さんに相談しないと。」

神の姿が見えなくなってからフェイトは帰っていく、その様子を神は物陰から見ていた。

神「これでやっと計画の第一段階、次はプレシアと話してからだな。」

そう呟くと神は商店街に向かい晩御飯の材料を買ってから帰ることにした。

休日、すずかに誘われ月村邸に行くことになっていた。

服装がいつもの普段着ではなかった。

いつもは黒いシャツに紺のGパンだが出発ぎりぎりまで母さんのバイクの修理をしていた。

なので中は白いシャツを着て、紺のオールインワンの作業着の上だけ脱ぎ、袖を腰で縛っている。

天気がよかったので黒いアポロキャップをかぶっていた。

バイクを直していると

色「あれ、神友達の家に行くんじゃないの？」

神「ああ、これが終わったら行こうと思ってたけど今何時だ？」

壁にかけてある時計を見ると約束の時間まで10分も無かった。神の脚力でなら間に合うが、着替えている時間はなかった。

神「母さん時間無いから行ってくる。」

色「忙しいわね、顔と手は洗っていきなさいね。」

神「わかったー。」

すずかの家に行く前の日、母さんに友達の家に行くとお蔭で約束を破らないですんだ。

月村邸につき呼び鈴を鳴らす。

神「すずかに呼ばれて来た。」

???「わかりました、お入りください。」

声とともに門が開かれ入っていく。

ガチャ

門をくぐって屋敷に近づくと庭から重火器などの兵器が出現し神めがけて撃ってきた。

神「ほお、これがここの客の迎え方か……。」

神に向けて飛んでくるゴム弾をすべて叩き落とし玄関に歩いて向かう。

神の拳圧で次々と壊れていく重火器、砕けたゴム弾が通った後に

残っていく。

side end

side なのは

今日はすずかちゃんのおうちでお茶会しているの、すずかちゃんは神君も呼んだって言ってたけどまだ来てないの。

なのは「神君遅いね？いつもなら早めに来てるの。」

すずか「そうだよね？」

アリサ「あいつどころついてんのよ。」

ビー　ビー　ビー　ビー

アリサ「警報!？」

なのは「な、なにになに?!」

すずか「わ、わかんないよ、とりあえず監視室に行ってみよ?!」

なのは達は突然の警報に驚きながら監視室に走っていった。監視室に入るとノエルと忍がモニターを見ていた。

すずか「お姉ちゃん!」

忍「すずか！すずかの友達が来たんだけど防犯装置が誤作動しちゃって……。」

なのは「は、はやく止めてくださいなの？！」

忍「それがその友達すごい速度で防犯装置を破壊してこっちに来てるのよ。」

な・ア・す「「えええ！！」」

ドンッ

玄関の扉が破壊され神が屋敷内に入ってくる。
なのは達は急いで玄関に向かった。

すずか「神君大丈夫？！」

神「ああ、すずかか遅れてすまなかったな。」

すずか「そんなこと気にしなくて良いよ？」

神「わかった、ところでこの当主は居るか？」

すずか「う、うんお姉ちゃん。」

忍「久しぶりね、私が月村家現当主の月村忍よ。」

神「そうか、ここではさっきのやつが客の迎え方なのか？」

神以外「！：！！」

神は言葉の途中からなのは達と同じ年とは思えない怒気を放っていた。

神「覚悟はd「させるか！」邪魔だ。」

恭也が箒を神に振り下ろすが神は虫でも払うかのように箒を逸らし顎を打つ。

恭也「グッ」

忍「恭也！」

倒れる恭也に忍が駆け寄る。

神「気絶しただけだ。」

すずか「待って神君！」

なのは「これには訳があるの！」

アリサ「防犯装置が誤作動しちゃったのよ！」

神「……そうなのか？」

神は恭也を支えている忍に聞いた。

忍「え、ええそうよ。」

神「そうか、すまなかった騒がしてしまつて。」

神は帽子を取り深々と謝った。

忍「えっ、謝らなくていいのよ、元々はこっちが悪かったんだしお互い様ってことでね？」

神「そう言ってもらえると有難い。」

神はそういつて頭を上げると微笑んでいた。

な・ア・す・忍「「「か、かわいい……。」「」」」

元々中性的な顔立ちでかわいいと思われることが多いのだが、表情を変えることが稀なのである。

祖父や母親の前だとよく笑うが学校ではほとんど無表情なのである。

お蔭で笑うとほとんどの人が見惚れるのである。

神「男としてかわいいと言われても困るんだが……」

本人はわかっていないようである。

扉を直してからお茶会になったのだが

神「なあすすか、これはなんとかならないか？」

神に月村邸の猫達が群がっているのである。

足に擦り寄っている猫、肩に乗っている猫、頭に乗っている猫、膝の上で寝ている猫と

お茶を飲むのに動かしている腕以外に猫がくっついているのであ

る。

すずか「ごめんね神君、剥がしてもまたくつついて行っちゃうから。」

アリサ「どうしたら、ここまで懐かれるのかしらね？」

なのは「あ、あはは」

神「はあ」

話してる間も猫達はなでて〜という風に擦り寄ってきていた。ため息をつきながら神は猫を撫でていた。

ユーノ「キュー！」

ユーノが子猫から逃げていた。

なのは「ユ、ユーノ君?!」

ファリン「お待たせしました〜、紅茶とクッキーです。」

ユーノはファリンの足元を走る抜けた。

ファリン「あわっあわわっお〜ととととと」

ファリンはユーノと子猫を踏まないように避けているうちにバランスを崩し倒れそうになる。

すずか「ファリン危ない！」

なのは「わー！」

神「∴。」

すずかとなのはがファリンを支える前にファリンは倒れ「大丈夫か？」なかった。

いつの間にか移動していた神が左手に盆を持ち、右手でファリンの腰に手を回し支えていた。

ファリン「あ、ありがとうございます。」

神「気にするな。」

ファリンは赤くなりながらお礼を言っていた。

神とファリンでは身長差があるので抱き合っている上に顔が近かった。

なのは「あああー！」

すずか「ファリン大丈夫？」

アリサ「あんた達いつまでそうしてるつもりよ。」

三者三様の声を聞きながらファリンを立たせて何事も無かったかのように席に戻って行った。

座ると同時に猫達が再びくっついていった。

その時

キイイイン

なのは・ユーノ「「！」」

なのは「ユーノ君」

ユーノ「なのはも感じた？」

なのは「うん、すぐ近くなの、でも…。」

ユーノ「そうだ」

ユーノは突然走り出した。

なのは「ユーノ君？ユーノ君探してくるね？」

すずか「手伝おうか？」

なのは「大丈夫なの。」

なのははユーノを追いかけて庭の方へ走っていく。

なのはとユーノはジュエルシールドが発動するのを感じた。

ユーノ「ここだと人目が…結界を張ろう。」

なのは「結界？」

ユーノ「魔法効果生じている空間と通常空間の時間進行をずらす

の、僕が少しは得意な魔法だよ。」

ユーノは魔法陣を展開し結界を作る。

結界が広がると木々の奥が折れてい巨大な猫が出てきた。

なのは「……猫なの」

ユーノ「大きいね。」

なのは「あれは…。」

ユーノ「大きくなりたいって願いが正しく叶えられたんじゃないかな？」

トロンベ「そのまますぎるだろ。」

なのは「トロンベさん！」

なのはの後ろからトロンベが近づいてきていた。

トロンベ「封印しないなら俺がするぞ？」

なのは「まっまってなの！」

トロンベとなのはが話していると2人の後ろから金色の魔法弾が飛んできて猫に当たった。

猫「にゃお」

ズドオオン

猫がよろけて倒れた。

ユーノ「今の魔法弾は僕の世界の…。」

トロンベ「お出ましか」

なのは「誰なの?!」

なのは達が魔法弾が飛んできた方を見ると黒いバリアジャケットの少女がいた。

フェイト「同系の魔導師：ロストログアの探索者か。」

ユーノ「間違いない僕と同じ世界の住人、そしてこの子ジュエルシードを知っている。」

なのはとフェイトがお互いを見ているとトロンベは猫に近づき黒い魔法陣を展開する。

トロンベ「ジュエルシード シリアルXIV 封印」

封印が終了し額部分にジュエルシードを回収すると猫は元の大きさに戻っていた。

なのは達はトロンベの行動に気がつき驚いてる。

フェイト「それを渡して。」

なのは「トロンベさん、それをどうする気なの?!」

トロンベ「まあ待て、元々これには執着は無いからどっちにやってもいい。」

ユーノ「何言っているんですか?! それは危ないものなんですよ?!」

トロンベ「だからこうして封印してるだろ? そのあとは知らんがな。」

ユーノ「なっ!?!」

トロンベ「でだ、ここは勝った方に渡そうと思う、なのは準備はいいか?」

なのは「えっえっ? ま、まってレイジングハートセットアップ」

RH「スタンバイレディ セットアップ」

トロンベ「準備できたな、レディ・ファイト!」

BD「サイズフォーム セットアップ」

フェイトはバルディッシュの形状を変形させ鎌の刃のような光刀でなのはに斬りかかる。

なのは「!」

RH「アテンション フライフィン」

なのはは上空に逃げることでフェイトの攻撃を回避した。

BD「アークセイバー」

フェイトはバルディッシュを腰に構え振りぬく。

フェイト「ふっ」

バルディッシュから離れは光刀は回転しながらなのはめがけ飛んでいく。

なのは「!」

RH「プロテクション」

光刀とプロテクションがぶつかり一瞬なのはの姿が見えなくなる。

ユーノ「なのは!」

トロンベ「……。」

なのははさらに上空へ逃げるがすでにフェイトが接近しておりサイズフォームのバルディッシュを振り下ろしてくる。

なのは「はっ! くっ」

ガキイン

なのはは辛うじて受け止めた。

なのは「なんでこんな…。」

フェイト「答えてもたぶん意味が無い。」

なのは「くっ」

バキイン

両者が同時に相手を弾く。

なのはは地面に着地し、フェイトは木の枝の上に着地した。

BD「デバイスモード」

RH「シューティングモード」

両者とも相手に狙いを定めた。

RH「ディバインバスター スタンバイ」

BD「ファトンランサー ゲットセット」

なのは「(きつとなのはと同年くらい…だけど、この子…。)」

お互いにタイミングを探っていると

ユーノ「なのは!」

なのは「!」

なのはは一瞬ユーノの方に気をとられてしまった。

BD「ファイヤ」

ドシユウ

フォトンランサーは狙いを違わずなのはに命中したのはは吹き飛ばされた。

side end

side トロンベ

トロンベ「ふっ」

落ちてくるなのはをトロンベが銜えて助け地面に下ろした。

フェイト「私が勝ったからジュエルシードを渡して。」

トロンベ「まあそう焦るな。」

トロンベはフェイトに近づくと額部分に収納していたジュエルシードを渡した。

フェイト「……。」

フェイトは受け取ると一瞬なのはを見るが無言で去っていった。トロンベとユーノはフェイトが去った方向をお互いに見ていた。

ユーノ「貴方は僕達の味方じゃなかったんですか！」

突然ユーノが怒鳴ってきた。

トロンベ「なにを言っている？そんなことは言った覚えは無いぞ？」

ユーノ「なっ！」

トロンベ「ではな、もう用はない。」

トロンベはそう言うで一瞬にして消えた。

ユーノ「ま、待てっ！」

ユーノが止める間もなくトロンベは消えていた。

トロンベが去った後には気絶したなのはとユーノだけが居た。

side end

なのは達が居なくなってから時間が経つと庭からユーノが慌てた様子で走ってきた。

皆異異常に気がつきユーノの案内で気絶しているなのはを発見した。

屋敷までなのはを運び様子を見ることになった。

夕方になりなのはが目を覚ました。

皆に心配をかけたことを気にしてか少し落ち込んでいた。
その日はお茶会は中断したのは達は各家に帰っていった。

side 神

俺が家に帰る途中フェイトから念話があった。

フェイト「神、母さんが会えるって行ってた。」

神「そうか、いつだ？」

フェイト「明後日の夜に私のマンションに来て。」

神「了解した、ところで晩御飯は食ったか？」

フェイト「?まだ食べてないけど？」

神「なら、使い魔アルフだったか? そいつも連れてうちに来て、
良いもの食わしてやる。」

フェイト「いい、必要」拒否権はないぞ」……わかった。」

神「よし、では6時に来い準備はしておく。」

フェイト「う、うん。」

神「ではな」

俺は家に着くと母さんに人数が増えることを伝える。

色「あらそうなの？友達？」

神「そ、同い年なんだけどお使いでこの街に来てるらしいんだけど。」

色「だけど？」

神「本人は食事はしてるって言ってたけど顔色悪そうだったからね、無理やり晩御飯に招いた。」

色「あらあら、それじゃあ滋養に良いもの作らないとね♪ 神手伝ってね♪」

神「もちろん」

桜花「私も手伝うことありますか？」

桜花の登場が久しぶりな気もするが割愛割愛

神「食器の用意とテーブルを拭いておいてくれ」

桜花「わかりました。」

ピンポーン

3人で晩御飯の準備をしているとチャイムがなった。

色「桜花さんでてくれないかしら？」

桜花「わかりました」

桜花は玄関に向かって行くと少女とオレンジ色の大型犬？が玄関先に居た。

桜花「あなた方神のお友達ですか？」

フェイト「うん、呼ばれたから来た。こっちはアルフ。」

フェイトがそう言うのとアルフは頷いた。

桜花「そうですか、私はここに住んでいる南舞・桜花といいます。それではあがって下さい。」

フェイト「うん。」

桜花「あつアルフは足拭きますね？」

桜花はアルフの足を拭き、居間に案内すると居間の方からいい匂いがしてきた。

神「ん、来たな、好きな席に座ってくれ、アルフにはこっちだな。」

色「あら、あなた神の言っていた友達ね？はじめまして、神の母親の龍鬼・色よ。」

フェイト「フェイト・テストロッサです、こっちはアルフ。」

色「フェイトちゃんね、じゃあ食べましょうか？ いただきます。」

神・桜花・フェ「「いただきます。」」

アルフ「ワフッ」

フェイトは箸を持ちテーブルに並んだ料理を見ていた。

テーブルの上には和食料理が並んでいた。

フェイトは近くにあった肉じゃがに箸をのばし口にはこんだ。

フェイト「！美味しい…。」

神「そうか、それはよかったそれは俺が作ったやつだな。」

フェイト「そ、そうなの？」

神「ああ、鰯の煮付けもそうだな。」

フェイト「料理できるんだ…。」

神「まあはじめは母さんのまねから始まったな。」

桜花「そうですね、最初のころはよく黒こげにしてみましたからね。」

神「言うな、恥ずかしい。」

神は顔を顰めながら言うが、ほのかに赤くなった。

色「あらあら♪神が珍しく照れてるわ。」

桜花「あははっ」

色と桜花が笑っていると

フェイト「ふふっ」

色「あら」

桜花「まあ」

神「ほお」

フェイト「?なんですか?」

神「いや、漸く笑ったなと思ったからな。」

フェイトは自分が笑っていたことに気がつき自分でも驚いていた。

フェイト「／／／」

今度はフェイトも赤くなってしまった。

色「あらあら♪」

桜花「まあ♪」

雑談しながら食事がすすみ食後のお茶をしてる時

色「そういえばフェイトちゃん今日はどうするの?」

フェイト「？」

色「つまり、今日泊まってく？って聞ってるのよ。」

フェイト「今日は「泊まっけ」：泊まっています。」

色「あらあら強引ね？」

神「断るのは判りきってるからね、先手をうったまでだよ。」

フェイト「……。」

神「それに話したいことあるしな。」

色「あらあら。」

桜花「うふふっ」

あつ片付けが終わりフェイトとアルフは神の部屋に来ていた。
フェイト達は神のベットに座り、神は椅子に座っていた。

アルフ「どういふつもりなんだい？」

神「どういふもなにもフェイトの顔色が悪かったし、渡すものもあるしな。」

フェイト「渡すもの？」

神「その様子だと忘れてるな？ほらこれだ。」

神は腰に着けていたリユーズからジュエルシードを取り出しフェイトに渡した。

フェイト「くれるの？」

神「それを渡す条件はクリアしたからな。」

フェイト「ありがと。」

フェイトはお礼をいい微笑んだ。

神「やはり、笑っている方がいいぞ。」

フェイト「えっ？」

神「ああ、その方がかわいいぞ？」

フェイト「……。」

フェイトは顔を赤くして固まっていた。

神「ん？どうした？ふむ、いい時間だな、フェイトそのままそこで寝て良いぞ。」

アルフ「あたしもいいのかい？」

神「ああ、かまわないおやすみフェイト、アルフ。」

フェイト「お、お休み……。」

アルフ「おやすみ」

神は部屋から出て行った。

side end

side フェイト

アルフ「フェイトおやすみ」

フェイト「あ、うんおやすみ。」

フェイトは戸惑いながらアルフが寝ているので寝ることにした。

フェイト「かわいい、か。」

そう呟きながら。

side end

扉の横に神が寝ているともしらずに。

side 神

今俺は遠見市にあるフェイトのマンションに向かっている。

ジュエルシードを渡す条件のプレシア・テストロッサとの会話が今日叶う。

マンションまで来たが…でかいな。

フェイトの部屋番号は…ここだな？

ピンポーン

はーい

呼び鈴を押すと中から声が聞こえてきた。

扉が開き出迎えたのははじめてみるオレンジの髪の女性だった。

??? 「おや、あんたかい。」

神 「誰だ？もしかしてアルフか？」

アルフ 「そうだよ何言ってるのさ？」

アルフは心底不思議そうに首を傾げていた。

神 「なるほど、人型も可能なのか。」

アルフ 「ああ、あんたにこの姿見せるのはじめてだったねえ。」

神 「うむ、なかなか美人だな。」

アルフ 「よ、よしておくれよ、照れるじゃないか。ほ、ほら早く入んな。」

アルフは頬を赤く染めながら室内に案内した。
リビングには誰も居らず、テーブルにドックフードや犬缶が置いてあった。

アルフはテーブルの上に出しっぱなしになっているものに気がつき慌てて片付けていた。

神「アルフ、フェイトはどこに居る？」

アルフ「モグモグ、フェイトは寝室に居るよ」

アルフ片付けるんじゃないかったのか？

寝室に行くとフェイトがベットで寝ていた。

神はフェイトのベットの脇に座り、様子を見ていた。

ふむ、顔の血色ははじめてあった時よりよくなっているが、まだ悪い感じがするな。

ウエストバッグの中にあるもので何とかなるか？

神は腰につけているウエストバッグに手を入れ、おはぎを取り出すとアルフが部屋に入ってきた。

アルフ「そのウエストバッグはいったい何が入ってるんだい？」

神「これか？まあある意味ロストログアかもしれん。」

アルフ「へえ、大層なもの持ってるんだね」

神「武器から回復薬まで何でもござれだ。」

アルフ「そうなのか、それで手に持ってる物はなんだい？」

神「これはおはぎだ、普通のおはぎと違いこれは体力の10%回復させるおはぎだ、フェイトに食べてもらおうと思ってな。」

アルフ「これが、ねえ？」

アルフは一見何の変哲も無いおはぎを見ながら首を傾げていた。

フェイト「…んっ、アルフ？」

アルフ「フェイト、おはよ。」

フェイト「おはよう、アルフ。」

神「おはようと言っても昼に近いがな。」

フェイト「えっ」

神「あがらせてもらっている。」

フェイトが起きたので話すことになったが、着替えると言うので寝室から出て行きリビングで待っている。

少したちフェイトが普段着の黒いワンピースで出てきた。

神「おはよう、フェイト。」

フェイト「お、おはよう、神。」

神は普通にフェイトは少し赤くなりつつ挨拶を交わした。

お互いに椅子に座り、神がおはぎをフェイトに差し出した。

フェイト「これは？」

神「身体にいいものだ、少しは体調がよくなるはずだ。」

フェイトは神からおはぎを受け取り一口食べた。

アルフ「どうだい？」

フェイト「うん、身体が少し楽になった気がする。」

神「そうか、それは重畳。さて、行くか。」

アルフ「行くって何処にだい？」

神「決まっているだろう。」

神はゆっくりと席から立ち玄関に向かい

神「フェイトの母親プレシア・テストロッサの元に、だ。」

家から出て行く神をフェイトとアルフは慌てて追いかけていく。

神達はマンションの屋上に来ていた。

神「さて、早速頼む。」

フェイト「わかった…次元転移・次元座標・876C—4419—
3312—D699—3583—A1460—779—F312

足元に金色のミッド式の魔法陣が展開される。

フェイト「開け誘いの扉、時の庭園　テスタロッサの主の元へ。」

魔法陣は輝き転移が開始される。

場所が変わってここは時の庭園、フェイトの案内でプレシアの居る部屋の前まで来た。

神「ここにいるのか？」

フェイト「うん、母さん、前に言っていた母さんに会いたいって人連れてきたよ？」

フェイトは扉を開き中に入っていく、続いて神もついていくと神目掛けて魔法弾が飛んで来たが歪曲フィールドを展開し弾を逸らした。

神「さて、どういうつもりだ？プレシア・テスタロッサ。」

部屋の奥から全身黒に包まれた女性がこちらに杖を向けながら歩いてきた。

プレシア「フェイト母さんはこの子と話があるから下がちなさい。」

フエイト「わかったよ母さん、神また後でね？」

神「ああ後でな。」

フエイトは部屋から出て行きプレシアと神だけになり暫しの静寂が部屋を包んだが、神が口を開いた。

神「回りくどいのは面倒なのでな、率直に言わせて貰おう。」

神は腰のウェストバッグに手を入れて物を探しながら言った。

神「貴女の病気とアリシア・テストロッサの蘇生を。」

プレシア「！その方法を言いなさい！！」

プレシアは杖の先端に魔力を溜め狙いを定める。

神「1つはこれだ。」

神はウェストバッグからペットボトルを取り出し、一口飲んで見せた。

プレシア「それがなんだというの！」

神「貴女が病気なのはわかってはいるからな、まずそれを治す為にこれを飲んでもらう。話はそれからだ。」

プレシア「そんなことよりア「飲まないのなら帰らせてもらおう。帰れると思っているのかしら？」

プレシアが杖を掲げると神の周りに機械兵が現れた。

プレシア「さあ大人しくア「ふっ」何を笑っているのっ！」

神「いや、この程度で優位に立ったと思っているアンタが滑稽でね。」

神が右手を前に出すと護式・斬艦刀が出現し、上段に構える。

神「火鼠の衣」

シュツ

護式・斬艦刀から月鱗が射出され周りに居た機械兵を切断していく。

月鱗を回収し護式・斬艦刀を消す。

ズ、ズズズ、ドオオン

機械兵は切り刻まれ崩れていく。

神「さて、飲む気になったか？」

神はペットボトルを見せながら聞いてが

プレシア「そんなの飲むわけが、ゴフツ」

プレシアが突然吐血した、神はすぐさまプレシアに近づきペットボトルを飲ませようとするが、プレシアは頑として飲もうとしなかった。

神は仕方なくプレシアの鼻を摘み無理やり飲ませる、最初は抵抗していたが大人しく飲み干していく。

ペットボトルの中身が殻になったのを確認すると神は飛び退いた。神が立ってた位置に魔法弾が打ち込まれていた。

神「病気を治したのに随分なお礼だな？プレシア」

プレシア「殺してや「身体はどうだ？」身体？何のことよ？…？！何を飲ませたの！」

神「まあ落着「早く話して！」はあ、飲ませたのは奇跡の天然水という水だ。」

プレシア「奇跡の…天然水…。」

プレシアは神の説明を半ば呆然としながら聞いていた。

神「奇跡の天然水はな、全ての状態異常、つまり不治の病も治せるものだ。」

プレシア「そう、治してくれてありがとう。」

プレシアは頭を下げお礼を言ったのを見て神は少し驚いていた。

神「どういたしましてと言っておこう、落着いたか？」

プレシア「ええ、ごめんなさいね。」

神「かまわないさ」

神は特に気にしていない様子にプレシアは胸を撫で下ろしていた。

s
i
d
e

e
n
d

第4話 後編（前書き）

後編でできましたのでどうぞ！

第4話 後編

side 神

神「さて、プレシアも落ち着いた事だし、二つ目だな。」

神はウェストバッグから黄金のりんごと緑色の液体が入っている小瓶を取り出した。

プレシア「これらは？」

神「黄金のリングとリライザーと言ってどちらも仮死状態から復活させ、体力の50%回復させるものだ。」

プレシア「！じゃあこれを使えばアリシアが生き返る！」

神「先に言うておくが可能性があるとしか言えない。瀕死の人間には使ったことはあるがそれ以外は試したことは無い。」

プレシア「それでもいいわ、可能性があるのだからやりましょう！こっちょよ。」

プレシアは少し興奮した様子で神の手を引きながらアリシアが居る奥の部屋に連れて行った。

神はため息をつきながら大人しくついていった。

奥の部屋に入り少し進むとフェイトにそっくりなの少女が入ったカプセルがあった。

神「この子がアリシア・テストロッサか。」

プレシア「そうよ、あの子…フェイトの姉にあたる存在よ。」

プレシアは少し暗くなりながらそう言った。

神「そうか、100%復活するかわからないから長期的に見ても
らうことになるかもしれないが構わないか？」

プレシア「ええ、構わないわ、可能性があるのなら待つだけよ。」

プレシアの暖かな微笑を見て神はリライザーの方をプレシアに渡した。

プレシア「こっちは確かリライザーよね？」

神「ああ、カプセルに入っているなら、外に出して黄金のリング
を食べさせるよりカプセル内の液体にリライザーを溶け込ませた方
か安全だと思うからな。」

神はアリシアの入っているカプセルを見上げながらそういった。

プレシア「それもそうね、わかったわ早速入れるわね。」

プレシアは横のコンソールを操りリライザーをカプセル内に注入
していく。

リライザーが入れられたカプセル内は淡く緑色に明滅していた。

プレシア「これで、あとは待つだけね。」

神「ああそうだな、ところでジュエルシードはどうするんだ？」

神はここに来た目的の半分が終わったので聞くことにした。

プレシアは少し考えていたがやがて

プレシア「貴女が助けてくれたもの、もう必要ないわ。」

神「そうか、では俺の計画がうまくいけば目がそれるな。」

神は顎に手をおき少し考えていた。

プレシア「計画って何かしら？私に手伝える事があるなら手伝うわ、嘗ては大魔導師とまで言われたもの。」

神は考えるのを中断しプレシアを見つめる、プレシアが少し赤くなっていたのは割愛。

神は現状プレシアに話した。

神「知っていると思うが今フェイトと高町なのはがジュエルシードを取り合い海鳴市で争っている。」

プレシア「でも、それはもうやる必要ないじゃないの？」

神「いや、フェイトにはこのままジュエルシードを集めてもらう。」

プレシア「それは、どうしてかしら？」

プレシアは神を睨みながら聞いた。

神「説明は最後まで聞け、ジュエルシードを集めてもらう理由はな、早いところ海鳴からジュエルシードを無くしたいのが一つ。」

神は人差し指をのばす、その指をゆっくりプレシアに向けるとプレシアは怪訝そうな顔をした。

神「プレシア達が管理局に捕まらないようにするためだ。」

プレシア「！でも、まだ管理局には見つかってないはずよ？」

プレシアは少し慌てながら言った。

神「可能性が無いわけではない、念のために俺が考えた計画に乗ってもらう。」

プレシア「……その計画に乗れば捕まらないのね？」

神「100%とは行かないが罪は限りなく軽くなる。」

プレシアはそれをきき少し考えてから

プレシア「わかったわ、その計画を教えて頂戴。」

神はプレシアに計画の内容を説明していく。

神「こんな感じだが問題ないか？」

プレシア「そう、でもしかたないわよね？」

神「ああ、辛いと思うが頼む、うまくいけば無罪に持ち込める。」

プレシア「わかったわ、これからよろしくね。」

神「ああ今日のところは帰るとする、定期的にアリシアの状態を見に来る、それと覚悟はしといてくれ。ではな。」

神は扉のほうへ歩いていくと

プレシア「ええ、フェイトを頼んだわよ。」

プレシアの呟きに神は振り向かなかったが頷いて出て行った。

神がプレシアの部屋から出てくるとフェイトとアルフが近づいてきた。

アルフ「最初のほう凄いい音したけど大丈夫だったのかい？」

神「ああ、問題ない無事話し合いも終わったよ。これからよろしくなフェイト、アルフ。」

神の発言にフェイトとアルフは首を傾げていた。

フェイト「これからって？」

神「これから先、俺はフェイトと一緒にジュエルシードを回収することになったんだよ。」

フェイト・アルフ「本当に?!（かい?!）」

神「ああ、本当だ基本的には援護になるだろうがな。それと他の人が居るときはキョウスケと呼んでくれ。」

フェイト「キョウスケ? 普段は神って呼んでいいんだよね?」

神「ああ構わない、さて帰るか?」

フェイト「うん!」

神とフェイト達は帰っていった。

side end

side プレシア

彼女が帰ってから私は彼女の事を考えていた。

初対面の私達に対して無償で手を差し伸べてくる彼女、龍鬼神。魔力少ないのに、機械兵を意図も簡単に撃破する実力。フェイトの事頼むわね。

そう思いながらプレシアはアリシアのカプセルを見ていた。

side end

side 神

今日は連休という事で母さんが休みをとって3人で海鳴温泉に行くことになった。

フェイトを誘おうと家に行ったが居なかったので諦める事になった。

俺の家に車はない代わりにバイクが2台ある。

母さんが温泉に行くのにバイクで行くと言ったとき桜花はどうするか聞くと。

色「桜花さんなら免許取得済みよ？」

神「いつの間に取ったの？」

色「神が学校に行っている間に行かせたのよ。」

桜花「これです！」

桜花は自信満々に免許を見せる。

神「おお、大型二輪まで取ってある。」

そんなのんなでバイクで移動中である。

俺と母さんはGOLDWINGに乗り、桜花はYZF-R1に乗っている。

※ 作者はバイクに詳しくないです、かっこいいなと思ったも

のを選んでいきます。

母さんがとばすから必然的に桜花もとばしている。

峠を100km/h以上でとばすなよ。

途中家族連れの車を抜いたときなのは達だった気がしたが気のせいかな？

side end

side なのは

日本国内は全国的に連休なの。

喫茶翠屋は年中無休ですが、連休のときはお店を店員さん達に委任せして、ちょっとした家族旅行にでかけるの。

今回の旅行は高町家・月村家・アリサちゃん、近場の温泉に行くことになったの。

日ごろの疲れを取ろうという高町家のいつものプランなの。

桃子「神君も誘えばよかったわね、なのは。」

なのは「うん、用事があるなら仕方ないの。」

桃子「なのは…。」

なのは「でも！次は誘うの！」

桃子「ふふふっ」

美由希「がんばれ、なのは。」

なのは「うん、がんばるの！」

なのは達がそんな会話している横を二台のバイクが抜かしていった。

すずか「きゃあ」

アリサ「なんなの?!」

士郎「凄い速度だったな。」

なのは達は気を取り直して、旅行を楽しむことにした。温泉に着くとさっきのバイクがあった。

恭也「バイクのやつらもここに來ていたのか。」

忍「へー、よく整備されているわー。」

忍はバイクの周りを歩きながら見ていた。

すずか「お姉ちゃん早く行こうよ。」

忍「わかったわー、んーこの整備した人に会ってみたいわ。」

忍は名残惜しそうにバイクを見ながら旅館に入っていた。部屋に荷物を置き入浴場に向かった。入浴場の前まで来ると

色「あら、桃子さんこんな所で偶然ですね」

桃子「あら、色さんもここへ？」

色「はい、家族で温泉です。」

なのは「神くんもいるの?!」

桜花「神なら男湯ですよ？」

なのは「そうなの？」

桜花「そうですよ、神は男の子ですからね。」

なのは「むゝ、いっしょに入りたかったの。」

色「もう少し早かったら入れたかもね？」

士郎「ここまではどうやって来たんですか？」

色「外にバイクありませんでした？あれに乗ってきたんですよ。」

士郎「あれですか、どうりで早いわけですね。」

色「ええそれでは温泉には入りましようか？」

桃子「ええそうしましょう。」

士郎「恭也俺達も入るか。」

恭也「そうだね、父さん。」

男女に分かれて温泉に入っていた。

side end

side 士郎

神は温泉に浸かっていると士郎と恭也が入ってきた。

士郎「やあ神君偶然だね。」

神「こんにちは士郎さん、と言っても抜かしたので会う気はしてましたが。」

恭也「あの危ない運転はおまえか。」

神「常識的に考えて9歳の子供が運転できるとでも？」

恭也は殺気をこめて睨んでいたが、神は無視して風呂から出て行った。

士郎「恭也、神君は何者なんだろうね。」

恭也「わからない、俺じゃ敵わないのはわかる。」

士郎「ふむ、戦ってみたいね」

風呂場で物騒な事を言いながら疲れをとっていた。

side end

side 神

風呂から上がり廊下を歩いているとなのは達を見つけ近づこうとしたとき、見たことある女性がなのは達の前に歩いてきていた。

アルフ「はぁい、おチビちゃん達？んゝ君かねうちの子にアレしてくれちゃってるのは。」

なのは「え、え？」

アルフ「あんま賢そうでも強そうでもないただのガキンチョに見えるんだけどね。」

アルフと困惑するなのはの間にアリサが入り込んでいった。

アリサ「なのは、お知り合い？」

なのは「う、ううん。」

なのはは首を横にふり否定したのを確認したアリサは

アリサ「この子貴女を知らないそうですが、どちら様ですか？」

アルフはなのはを見つめていると

神「何をしている？」

神がなのは達の後ろからやってきた。

なのは「神君！」

アルフ「んげっ神！」

なのはは嬉しそう振り向き、アルフは気まずそうにしていた。

神はアルフの前まで来るともう一度問いかけた。

神「もう一度聞く何をしている。」

アルフ「あ、あはははっいやく人間違いだったよ」

アルフは冷や汗を流しながら神の質問に答えていた。

神「そうか、なら行くぞ。」

神はアルフの横をいくと手を繋ぐとなのは達から離れて行く。

アルフ「ち、ちょっと「今のところは挨拶だけね」

なのは・ユーノ「「！」」

アルフ「忠告しとくよ、子供はいい子にしてお家で遊んでなさいね？お痛が過ぎるとガブツといくよ？」

神「行くぞ。」

なのはとユーノは突然の念話に呆然としながら神達が去っていくのを見ていた。

アリサ「神どこに行くのよ!」

神「酔っ払いは迷惑だからな部屋に放り込んでくる。」

すずか「あとで合えるよね?」

神「あああとでそっちの部屋に行く。」

アリサ「絶対だからね!」

神「ああ、あとでな。」

アルフ「だ、だから引っ張るなってば」

神はアリサ達へ返事が終わるとアルフの腕を引っ張り廊下を歩いていく。

ユーノ「…なのは。」

なのは「うん…。」

なのはは神とアルフが消えた方向を見続けた。

アルフを連れて移動した神は問いただしていた。

神「アルフ、フェイトはどこに居る？」

アルフ「フェイトなら森の方にいるよ。」

神「そうか（そういえばここにもあったな。）」

アルフ「手伝ってくれるんだろ？」

神「ああ、フェイトの負担を軽くしなければな。」

アルフ「ありがと！フェイトにも伝えとくよ。」

神「うむ、風呂に入りに来たのだろ？ ゆっくりしていけ。」

アルフ「うん、じゃあまたあとで。」

神とアルフは話しが終わると神はなのは達の部屋にアルフは風呂に向かっていった。

龍鬼家はなのは達がいる部屋に来ており色と桜花は士郎達と飲み交わし、神はなのは達と話していた。

なのは「昼間の人誰なの？」

アリサ「そうよ、知り合いなんでしょ？」

神「まあ顔見知りではあるな。」

すずか「そうなんだ。」

神「最近はよく会うな。」

なのは「そうなの？」

神「ああ、なんでも探し物があるらしい。」

アリサ「早く見つかるといいわね。」

すずか「そうだね、私達で手伝えないかな？」

神「お勧めはしない、探すのは深夜になるからな。」

すずか「それじゃあ仕方ないね。」

神「まあそういう事だ。」

アリサ「まあいいわ、神明日は一緒に入るわよ。」

神「まあ時間が合えばな。」

神はアリサの要求をのりくらりとかわしながら雑談してすごし
寝る時間になったので神達は部屋に戻っていった。

s i d e e n d

side フェイト

時刻は夜、フェイトとアルフはジュエルシードを探しているとジュエルシードの発動を感じ向かった。

アルフ「フェイトあったよ。」

フェイト「わかったよ、アルフ今そっちに向かうね。」

フェイトは発動の感じた方向へ向かっていた。

向かっている途中、神に連絡しなくてはいけない事を思い出していた。

神達がプレシアの所から帰る途中

神「フェイトもし俺が居ない状態でジュエルシードを見つけたら
念話でしらせてくれ。」

フェイト「え？私封印できるよ?。」

神「封印は俺もできる、だがファイトはきちんと食事を取らない
からな体力温存させるためだ。」

アルフ「そうだね」

フェイト「ア、アルフ！私ちゃんと食べてるよ?！」

神「きちんと食べてるやつはそんな顔色をしないぞ。たまにでい

い家に来い。」

アルフ「神の家のご飯はおいしかったからね」

フェイト「迷惑じゃないかな？」

神「迷惑なら誘わん。」

フェイト「うん！また行くね。」

神「予め連絡くれるとありがたい。」

フェイト「わかったよ。」

フェイトと神が楽しそうに話しながら家に帰っていく。

そういうことで、フェイトは移動しながら神に念話を送った。

フェイト「神」

神「どうした？」

フェイト「ジュエルシード発見したの、手伝って？」

神「森の方だったな、すぐ行く。」

フェイト「うん、待ってる。」

フェイトは神との念話が終わるともう少し話したかったなと思い

ながらジュエルシードの場所に向かった。

side end

sideなのは

キイイイン

なのははジュエルシードの発動を感じ目を覚ました。

なのは「ユーノ君。」

ユーノ「うん、急ごう。」

なのはとユーノは急いでジュエルシードのもとへ走っていく。

なのは「レイジングハートお願い。」

RH「スタンバイレディ セットアップ」

途中で前方で封印の光が天にのびる、なのはは変身して発動を感じた所へたどりつくところにはフェイトとトロンベ以外に2人がいた。

1人は昼間旅館で念話を送ってきた女性。

もう1人の男性は黒いカウボーイハットに赤いマフラー、黒いロングコートに黒のズボンという格好だが、目を引くのが持っているものだった。

右手に持っているものは銃器だが付いている物が以上なのである、

マシンガン銃身の下には鋭い鉄杭が装備されており武器の後ろには収納式の刃が装備されていた。

反対側には異常なほどにバレルが長いリボルバーが腰に装備されていた。

アルフ「あゝららあらあら、子供はいい子でっついわなかったっけか？」

ユーノ「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ！それは危険なものなんだ！」

アルフ「さあ、ね、答える理由は見当たらないよ？それにさあたし親切に言ったよね？いい子でないとガブツといくよって。」

なのは・ユーノ「「！」「」」

アルフが人から狼へと姿を変えていく。

アルフ「ワオオオオオオオオッ」

ユーノ「やっぱりあいつあの子の使い魔だ。」

なのは「使い魔？」

アルフ「そうさ、あたしはこの子に創ってもらった魔法生命、製作者の魔力で生きる代わり命と力の全てを懸けて守ってあげるんだ。先に帰っててすぐに追いつくから。」

フェイト「ん、無茶しないでね？」

アルフ「OゝK!」

アルフは返事をすると同時になのはに跳びかかった。
が、ユーノがなのはを守るようにシールドを張る。

アルフ「ちい!」

ユーノ「なのは、あの子をお願い。」

アルフ「させるとでも、思ってるの!」

アルフはシールドをひっかき破壊しようとする。

ユーノ「させてみせるさ!」

ユーノは新たに魔法陣を展開する。

アルフ「移動魔法…まずいつ」

ユーノ「ふっ!」

ユーノの移動魔法の発動し、ユーノとアルフはいなくなった。

フェイト「結界に強制転移魔法…いい使い魔を持っている。」

なのは「ユーノ君は使い魔ってやつじゃないの。私の友達なの」

フェイト「で、どうするの?」

なのは「話し合いで何とかできるって事…「無いな」!」

フェイト「ジ…キョウスケ？」

キョウスケ「我々の主がジュエルシードを欲しているのでな、貴様とは敵同士だ早々に手を引いてもらおう。」

なのは「だからそうゆうことを簡単に決め付けないために話し合いつて必要なんだと思うの！」

チャキ

異型の銃器ナイトファウルをなのはに向けた。

なのは「！」

キョウスケ「ジュエルシードを賭けて戦え。」

フェイト「キョウスケ、私が戦うよ。」

キョウスケの後ろにいたフェイトがキョウスケの横に並んでいた。

キョウスケ「そうか、無茶だけはするなよ。」

フェイト「うん。」

バルディツシュをなのはに向ける。

フェイト「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらない、伝わらない！」

フェイトは瞬間になのはの後ろに回りバルディッシュを振りぬく。

RH 「フライフィン」

なのは「でも、だからって！」

なのはは上空へ逃げて回避するがフェイトはなのはより上空の位置を取った。

フェイトは左手と足元に金色の魔法陣を展開し、なのははレイジングハートをシューティングモードに変えかまえる。

BD 「サンダー・スマッシャー」

RH 「ディバインバスター」

両者から放たれる魔法、威力が拮抗する。

フェイト「！」

なのは「レイジングハートお願い！」

RH 「オールライト」

なのはの声にレイジングハートが応えディバインバスターの出力が上がり、サンダー・スマッシャーを撃ち消した。

その様子を地上で見ていたユーノ達は

ユーノ「なのは、すごい…。」

アルフ「けど、あまいね。」

キョウスケ「終わったな。」

ユーノ「なのは！」

フェイトはディバインバスターをさらに上昇することでかわし、
なのはに攻撃をあたえるため急降下して接近していた。

BD「サイズスラッシュ」

なのはが気が付いたときにはすでに遅くバルディッシュの形状が
サイズモードに変形しなのはめがけ振り下ろされていた。

なのは「くっ」

フェイトは魔力刀をなのはの首ぎりぎりに止めていた。
なのはは動けなかった。

RH「プットアウト」

レイジングハートからジュエルシードが排出される。

なのは「レイジングハート何を?!」

なのははそれを見て驚いていた。

フェイト「きっと主人思いのいい子なんだ。」

フェイトはジュエルシールドを回収し地上に降りていくのを見てなのも降りてきた。

キョウスケ「勝ったか。」

フェイト「うん。」

キョウスケ「帰るぞフェイト、アルフ、はっ。」

キョウスケはトロンベに乗り走り出した。

アルフは狼から人へ戻っていた。

アルフ「ふふ、さっすがあたしのご主人様、じゃねえ♪おチビちゃん。」

去っていくフェイト達になのはは慌てて声をかけていた。

なのは「待って！」

なのはの声にフェイトは振り向かず

フェイト「できるならもう私達の前に現れないで、もし次あったら今度は止められないかもしれない。」

なのは「名前…あなたの名前は？」

フェイト「…フェイト…フェイト・テストロッサ。」

なのは「あたしは…」

なのはが自分の名前を言う前にフェイトは飛び去っていき

アルフ「バイバイ♪」

アルフも続いて去っていった。

その場に残されたなのはただただフェイトが去っていった方向を見ただけだった。

フェイトちゃんにアルフさんか……それにトロンベさんと銃を持った男の人、話し合えないのかな……

また会えるよね、今度こそお話しなきゃ。

ユーノ「なのは……。」

side end

side 神

ジュエルシードの回収も終わったことだし、旅館に帰らないと。

神「フェイト、この後どうするんだ？」

フェイト「え？ マンションに戻ろうと思ってたけど？」

神「せっかく温泉に来たんだ、入って行け。」

アルフ「そうだよフェイト、温泉入っておいでよ気持ちよかったよ」

フェイト「そ、そう？なら入ってから帰るかな。」

アルフ「あたしは昼間入ったから先に帰ってるねよ。」

神「俺も入るか。」

神達は旅館に着き神は先に部屋に戻ってから風呂に行き、フェイトは風呂に入っていた。

神「ふう〜風呂はい「じ、神」フェイトなぜ男湯にいる？」

神が湯ぶねに浸かっているとなぜかフェイトが入っていた。

フェイト「だ、だって温泉に入ろうと思って…」

神がフェイトから顔を逸らして質問するとフェイトは少し赤くしていた。

神「そうか、邪魔したな。」

神が湯ぶねに入らず出て行こうとした。

フェイト「ま、待って！」

神「ん？どうした？」

フェイトは神を呼びとめ顔を赤くしながら

フェイト「邪魔じゃないよ、一緒にはいろ？」

神「そうか：なら入るとしよう。」

神はフェイトから離れた位置に入るがフェイトは神の傍に近寄っていった。

神「フェイト？」

フェイト「こ、この方が話せるよ。」

神「そうか。」

頬を染めながらそう言ったフェイトと微笑みながら応えた神、
2 人はその後雑談しながら入浴していた。

時間が経つのを忘れて話していた、結果的にのぼせた。

フェイトだけが。

フェイト「ふにゃ〜」

フェイトは脱衣所の長椅子に浴衣を着て横になっていた。

誰が運んだかは言わなくても分かるだろうが神である。

運ぶときはフェイトはなにもつけていなかったのはここだけの秘密だ！

神「大丈夫かフェイト？」

神は洗面所から戻ってきた。

ピト

フェイト「あ、冷たくて気持ちいい。」

神「少ししたらよくなる、それより長椅子は硬いだろう。」

神はフェイトの頭を浮かせて椅子とフェイトの間に太腿が来るように座った。

フェイト「あっ」

神「男の俺では固いかもしれないが椅子よりはましだろう。」

フェイト「／／／／／」

神に膝枕してもらっているフェイトは顔を真っ赤にしていた。

神は真っ赤なフェイトを気にせずフェイトの髪を手櫛で梳いていた。

フェイトは気持ち良さそうに目を細めていた。

神「フェイトもう大丈夫か？フェイト？」

フェイト「すう／すう／」

フェイトはいつの間にか寝ていた。

さて、ここにアルフを呼ぶにしても時間がかかるな、仕方ない。

神は素早く考えを纏めるとフェイトをそっと抱え、泊まっている部屋へ連れて行った。

俺はフェイトを自分の布団に寝かせ、俺は布団の横の壁を背凭れにしてその日は寝た。

s i d e e n d

s i d e フェイト

フェイトは寝ぼけていた。

フェイト「…あれ…？神そんな所で寝ていると風邪引くよ」

フェイトは寝ぼけた状況で壁を背凭れにして寝ている神を布団に引き込んで寝た。

フェイト「お休みなさい。」

翌朝

朝起きると

フェイト「…ん、んんっ、あれ？ここは？」

フェイトは目を覚ますと知らない部屋で寝ていた。

神「起きたかフェイト。」

フェイトは神の声がした方を見るとすぐ近くに神の顔があった。

フェイト「／／／！？（え、え！な、なんで！なんで神と一緒に寝てるの！？）」

神「フェイト？」

フェイト「な、なに？」

フェイトは耳まで真っ赤にして神に答えた。

神「おはよう、フェイト。」

フェイト「お、おはよう、神／／／／」

神はフェイトにあいさつをいい、ゆっくり布団から出て行く。

フェイト「あっ」

神「？一応アルフに連絡しておいたが早く帰るといい。」

フェイトが少し残念そうな顔をしていたが神は気がついていない。

フェイト「うん、じゃあまたね。」

神「ああ、またな。」

フェイトは窓から飛んで行ったのを神は見送っていた。

s i d e e n d

s i d e 神

フェイトを寝かせたまではよかった。

気がついたらフェイトに腕を抱えられていた。

抜け出したらフェイトが起きそうだ、それにこんなに幸せそうな顔を見たら抜け出せないな。

フェイトが起きてから挨拶をして、別れた後背後に母さんがいた。

色「今の子フェイトちゃんよね？」

神「母さんの見間違いじゃないかな？フェイトがここにいるわけ無いじゃない。」

色「ふふふ、私に隠し事なんて100年早いわよ♪」

母さんがやついていた、こういうときは全て見透かされている
と言うことだ。

神「いつから気がついてたの？」

色「んゝ最初は夜中に出かけてるの気がついてからかな？今ので確信したけどね♪」

神「最初からばれてたのか。」

色「ちなみに桜花さんも関係してるのは知ってるわよゝ」

桜花「ええ！」

神「そこまでか、なら隠してもしかたないな。」

桜花「い、いいんですか？」

色「あらあら、あっさり言うのね？」

神「ああ、話して協力してもらった方がいい気もするしな。」

色「そういうこと、なら聞かせてもらおうかしら。」

神「実はね母さん……。」

神は色に今までやっていた事とこれから自分がやろうとしている事を話した。

色は神の説明を聞き、全面協力をしてくれる事を約束してくれた。

s i d e e n d

第5話（前書き）

遅くなりましたが、どうぞ！

なお、誤字脱字がある可能性がありますのでよろしくお願いします。

第5話

side 神

旅行から家に帰ってきてからは忙しかった。

家に結界を張って罫を仕掛けていく、俺が管理局に正体がばれた場合母さんに迷惑がかかるといけないからな、問題ないと言っていたが。

母さんにも身を守るためのお守り（結界と転移特化のデバイス）を持たせた、母さんにあげた時は喜んでたな。

色「神から母の日と誕生日以外でものを貰うなんて思ってもいなかったわ〜♪」

桜花「嬉しそうですね、よかったですね、あげて。」

神「あそこまで喜んでくれるとこちらも嬉しいが少し恥ずかしいな…。」

などと忙しい中にも余裕を持たせて準備をしていた。

戦艦の方はエンジン出力が安定しないため今は出せない、早いうちに調整を終えないと計画に支障が出てしまう。

それにいつまでも深海に潜ませておく訳にも行かない、やっぱり基地は必要か…。

神はこれから先何があろうとも対応できるよう現状可能な限り準備を進めていた。

学校へ行っている時間と食事の時間以外は戦艦か自室に籠っていた、

色と桜花は神が体調を崩さないように家事を引き受けていた。

神は授業中も予定の優先度の変更、現在の限界の再確認をしていた。休み時間、次の授業の準備をしてるとアリサとすずかが入ってきた。

アリサ「神！なのはが何悩んでるかあんだ知ってる？！」

神「見当はついてるがそれはなのは自身が超えなければいけないものだ。」

アリサ「それでも力になりたいじゃない！」

すずか「アリサちゃん……。」

神「ふう、わからんでもないがな。」

アリサ「だったら「だからこそ」！」

神「だからこそ待ってやれ、親友だろ？」

アリサ「わかったわ……なのは大丈夫よね？」

神「ああそれは保障しよう、信じてやれ。」

すずか「わかったよ神君。」

アリサ「わかったわ、終わったら話してくれるんでしょ？」

神「ありのままとはいかないがな、約束はしよう。」

アリサ「そ、ならいいわじゃあね。」

すずか「またね、神君。」

神「ああ、またな。」

アリサとすずかは神の話を聞き大人しく自分達の教室に戻って行った。

時間は進み、神は戦艦内部で改造増設作業をしていた。

神「ん？ジュエルシードの強制発動：フェイトも無茶をする。」

フェイト「神ジュエルシードを見つけたよ。」

フェイトから念話してきたが今作業を中断するわけにもいかない、しかたない。

神「フェイト今は手が離せない、今回は頼めるか？」

フェイト「え？う、うんわかった、終わったら来てね？」

神「ああ、危険を感知したらすぐさま向かうことを約束しよう。」

フェイト「ん、またね。」

神は作業を再開しながら桜花に念話を送った。

神「桜花。」

桜花「なんですか、神。」

神「フェイト達がジュエルシードを見つけたが今は手が離せない。危険と判断したら呼んでくれ。」

桜花「わかりました、見つからない様に…ですね？」

神「ああ、よろしくたのむ。」

桜花「了解です。」

桜花との念話後、何か忘れていた気がしていた。

神「なんだったか…んゝ思いだせん。」

神は呟きながら作業を再開した。

side end

side フェイト

フェイトはジュエルシード大まかな場所を見つけたが正確な場所はまだわからない状態だった。

アルフ「フェイトまた食べてない、食べなきゃだめだよ。」

フェイト「少し食べたから大丈夫。」

フェイトが寝ているベットの横にあまり手をつけていない食事があった。

アルフ「広域探索の魔法は体力を使うのにフェイトはろくに休まないし食べないし、あたしはフェイトが心配なんだよ。」

フェイト「平気だよ、私強いから。」

フェイトはベットを離れバリアジャケットを纏う。

アルフ「フェイト…。」

フェイト「さあ行こう、母さんが待ってるんだ。」

フェイトとアルフはジュエルシードの反応がある付近に向かった。時間が経ち時間は夜7時フェイト達はビルの上にいた。

フェイト「大体このあたりだと思うんだけど、大まかな位置しかわからないんだ。」

アルフ「ああ、確かにここまでごみごみしてると探すのもひとく
るだあねえ。」

フェイト「ちょっと乱暴だけどこのあたりに魔力流を打ち込んで
強制発動させるよ。」

フェイトはバルディッシュを掲げる。

アルフ「あーまった、それはあたしがやる。」

フェイト「大丈夫？結構疲れるよ。」

アルフ「このあたしを誰の使い魔だと？」

フェイト「ふふっ、じゃあお願い。」

アルフ「そんじゃあ！」

アルフの下にオレンジ色の魔法陣が展開され魔力流があたりに打ち込まれた。

天候が急激に荒れ雷鳴轟く、雷はビルの避雷針に落ちていた。雷がジュエルシードに落ち発動した。

フェイト「見つけた！」「神神ジュエルシードを見つけたよ。」「

神「フェイト今は手が離せない、今回は頼めるか？」

アルフ「けど、あっちも近くにいたいだね。」「

辺りが結界で包まれていった。

フェイト「早く片付けよう。」「え？う、うんわかった、終わったら来てね？」「

神「ああ、危険を感知したらすぐさま向かうことを約束しよう。」「

フェイト「バルディッシュ」「ん、またね。」「

B D「シーリングフォーム セットアップ」

アルフ「神に連絡したのかい？」「

フェイト「うん、忙しいみたいだから今回は私達だけでよろしく
だって。」

アルフ「そっか、なら問題ないね。」

フェイトはジュエルシードに狙いを定める。
なのはも同じく狙いを定め封印をする。

同時に封印術式がジュエルシードに当たる。

なのは「リリカルマジカル！」

フェイト「ジュエルシードシリアルXIX！」

なのは「封！」

フェイト「印！」

封印術式によりジュエルシードは封印され空中に漂っていた。

s i d e e n d

s i d e なのは

アリサ「いい加減にきなさいよ！」

なのは「！」

アリサ「このあいだから話しかけてもボーっとして！」

なのは「ごめんねアリサちゃん…。」

アリサ「ごめんじゃない！そんなに話したくないなら1人でポットとしてなさいよ！」

アリサが教室を出て行くのをなのはただ見てるしかなかった。

すずか「アリサちゃん……なのはちゃん。」

なのは「いいよすずかちゃん、今のはなのはが悪いから。」

すずか「そんなことないと思うけど…少しアリサちゃんと話してくるね？」

なのは「うん。」

すずかは教室を出て行ったアリサを追いかけていった。

なのは「怒らせちゃったなごめんね、アリサちゃん、すずかちゃん……。」

教室に残ったなのははそう呟いた。

授業が終わりアリサとすずかはお稽古に向かった。

なのはは1人家に帰った。

神はどうしたかって？すずかが帰りがけ教室を覗いたがその時点で居なかった。

なのはは家に帰りユーノとおやつを食べながら今日あったことを話

していた。

ユーノ「そうか、けんかしちゃたんだ。」

なのは「ちがうよ、なのはがボーっとしていたからアリサちゃん
が怒っちゃっただけ。」

ユーノ「でも、親友…なんだよね？」

なのは「うん。」

ユーノはそれを聞き少し罪悪感を感じていた。

なのは「はいユーノ君、こっちユーノ君の分ね、今日は塾もない
し晩御飯までたっぷりジュエルシード探しできるよ、がんばろ。」

ユーノ「……がんばろう。」

なのはとユーノはおやつが食べ終わると町に出かけジュエルシード
探しに出かけた。

なのはたちは街中を探していたが時間があっというまに過ぎていき、
時計は夜7時過ぎを示していた。

なのは「んゝタイムアウトかも、そろそろ帰らなきゃ。」

ユーノ「大丈夫だよ、僕がもう少し残って探しておくから。」

なのは「ユーノ君平気？」

ユーノ「平気だよ、だから晩御飯取っておいてね？」

なのは「うん。」

ユーノはなのはの肩から降りる

なのはとユーノは手を振り、なのはは家に向かって走っていく。

なのは「アリサちゃん達お稽古終わったかな？」

なのはは携帯を取り出しメールを確認するが着信はなかった。
携帯をしまうと再び走っていく。

あたりは急に暗雲が立ち込めてきた。

ユーノ「こんな街中で強制魔法?! 広域結界、間に合え!」

ユーノは突然の強制魔法に驚きながら冷静な判断をし結界を展開する。

なのはは強制魔法を感知したほうに駆けていきながら変身する。

なのは「レイジングハート、お願い!」

RH「スタンバイレディ、セットアップ」

なのはが変身し終わるとユーノから念話してきた。

ユーノ「なのは、発動したジュエルシードが見える?」

なのはは目線の先にある天を貫かんばかりにのびる光を見る。

なのは「うん、見えるすぐ近くだよ。」

ユーノ「あの子達もすぐ近くに居るんだ、あの子達よりも早く封印して！」

なのは「わかった」

なのははレイジングハートをデバイスモードからシューティングモードに変えジュエルシードに向け狙いを定める。
フェイトもジュエルシードに狙いを定める。

なのは「リリカルマジカル！」

フェイト「ジュエルシードシリアルXIX！」

なのは「封！」

フェイト「印！」

封印術式によりジュエルシードは封印され空中に漂っていた。
なのはは封印されたジュエルシードを見ながら考えてた。

なのは「（アリサちゃんやすずかちゃんとはじめてあったときは友達じゃなかった。アリサちゃんが怒ったのもなのはが気持ちを話さなかったからだ。）」

ユーノ「やった、なのは早く確保を！」

アルフ「そうはさせるかい！」

なのはめがけてアルフが上から襲い掛かるが、ユーノがなのはを守るようにバリアをはりアルフを弾く。

バリアが割れ目線をあげるとフェイトがいつの間にか対峙していた。

なのは「（目的がある同士だからぶつかり合うのは仕方ないかもしれないけどしりたい。）こないだは自己紹介できなかったけど、なのははなのは、高町なのは、私立聖祥大付属小学校3年生。」

BD 「サイズフォーム」

なのは「！」

なのはは咄嗟に構えた。

フェイトは舞いあがりなのはめがけ斬りかかる。

RH 「フライヤフィン」

なのはの靴に桃色の小さな羽根が生える。

ドクン

なのはとフェイトは空中で砲撃戦をしていた。
高速で飛ぶなのはの後ろをフェイトがとったが

RH 「フラッシュムーブ」

なのははフラッシュムーブを使用し逆にフェイトの後ろをとり砲撃する。

RH 「デイベインバスター」

BD 「ディフェンサー」

フェイトは振り返りシールドをはりどうにか防ぎ距離をとる。

……ドツクン

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「！」

なのは「話し合うだけじゃ言葉だけじゃなにも変わらないって言うていたけど、話さないと言葉にしないと伝わらないことはきつとあるよ！ぶつかり合ったり競い合うことになることは仕方ないのかもしれないけど、なのははそれはいやだ！」

フェイト「……。」

なのは「なのはがジュエルシールドを集めるのはそれがユーノ君の探し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーの君で、ユーノ君がそれを集めなおさなきゃいけないからで、なのははそれのお手伝いで、だけどお手伝いをするようになったのは偶然だけど今は自分意思でジュエルシードを集めてる自分の周りの人達に危険が降りかかったらいやだから……これがなのはの理由！」

フェイト「私は……フェイト！答えなくていい！」……！」

アルフ「やさしくしてくれている人たちの所でぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか何も教えなくていい！あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

フェイト「！」

フェイトは再び構えた。

ユーノ「なのは！」

なのは「大丈夫！」

フェイトはなのはから目を逸らしジュエルシードに向けて急降下していく。

なのは「！」

なのはも急降下していくフェイトを追いかけて急降下する。

……………ドクン

我先にジュエルシードを確保するため2人は加速していく。

……………ドクン

ジュエルシードに向けデバイスを突き出すが

ガキンッ

ジュエルシードを挟むようにお互いのデバイスがぶつかり合った。

ユーノ「ああ」

アルフ「えっ？」

フェイト「！」

なのは「?!」

2人のデバイスに罅が入る。

ジュエルシールドが輝きエネルギーが膨れ上がっていく。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

なのは「きゃあああああ!」

フェイト「くっ、くうう!」

side end

side フェイト

なのはとフェイトは暴走したジュエルシールドから急いで距離をとったが2人のデバイスは全体的に罅割れがあった。

フェイト「大丈夫? 戻ってバルディッシュ。」

BD「イエ:ッサー」

バルディッシュは雑音が入りながら返答しスタンバイ状態に戻った。フェイトは暴走したジュエルシールドに向けて飛んでいき両手でジュエルシールドを掴んだ。

アルフ「フェイト!」

フェイトの指の間からジュエルシードの光が漏れ手の中で暴れだす。

アルフ「フェイト！だめだ危ない！」

フェイトはアルフの声を聞いてもやめようとはしなかった。

フェイト「止まれ、止まれ。」

ドドドッ

フェイトの手のひらが裂け血が出る。

フェイト「止まれ、止まれ、止まれ。」

ドドドッドドドッ

????「やめろ！フェイト！」

暴走するジュエルシードを離そうとしないフェイトの所にトロンベから飛び降りた神が目の前にいた。

なのは「え？」

フェイト「じ、神…。」

神はフェイトの手を包むように自分の手を重ねて封印を施す。

神「怪我までしてすることじゃない、俺が封印する。」

フエイト「あっ」

神「ジュエルシードシリアルXIX再封印。」

ジュエルシードの暴走が収まるとフエイトは気を失って前に倒れる。

side end

side 神

桜花に念話をした後神は作業に没頭していた、すると

桜花「神！」

突然桜花から念話が来た。

神「どうした、封印は終わったんだろ？」

桜花「はい、封印は終わりましたがジュエルシードを賭けて戦い始めました。」

神「それは前回と同じだろう？」

前回と同じ状況の筈なのに桜花はどこか焦っていた。

桜花「それが封印はしたんですけど2人とも回収しないで戦闘始めてしまったんですよ！」

神「なに？」

桜花「ユーノ君もアルフもお互いを牽制しててそれどころじゃないみたいですし。」

神「桜花、瞬転刀を設置しといてくれ、いやな予感がする。」

桜花「わかりました。」

神は桜花に念のため準備をさせ自分も医務室に準備をするために移動しようとした時

ゴゴゴゴ！！

遠くから何かの魔力反応が急激に膨れ上がったのを感じた。

神「桜花！今は！」

桜花「放置されてたジュエルシードを2人が確保しようとして二人のデバイスが同時にぶつかったんです！」

神「フェイトとなのはは！」

桜花「2人とも無事です！」

神「わかった、とりあえずそっちに向かう。」

桜花「はい！」

神は転送ゲートに向かい桜花が設置した瞬転刀陣に転移した。転移して最初に見たのはフェイトが暴走しているジュエルシードを

掴む瞬間だった。

神「あの馬鹿！ トロンベー！！」

自身も駆け出すと同時にトロンベを出して乗り加速する。

ドドドッドドドッ

神はトロンベに跨ると自分とトロンベに加速を使う。

通常でも早いトロンベが加速を使用したことにより残像が残るほどの速度にまで加速した。

ドドドッドドドッ

桜花が設置していた位置はフェイト達からかなり遠かったが加速を使ったトロンベは2, 3秒で移動した。

フェイトが両手でジュエルシードを掴み封印を施そうとしているがデバイスがないためうまくいかない。

ジュエルシードの出力が大きく掴んでいたフェイトの手のひらが裂け血が出る。

フェイト「止まれ、止まれ、止まれ。」

神「やめろ！ フェイト！」

それでもやめようとしないうフェイトの近くでトロンベから飛び降りフェイトの前で止まる。

なのは「え？」

フェイト「じ、神…。」

神はフェイトの手を包むように自分の手を重ねて封印を施す。

神「怪我までしてすることじゃない、俺が封印する。」

フェイト「あっ」

神「ジュエルシードシリアルXIX再封印。」

ジュエルシードの暴走が収まるとフェイトは気を失って前に倒れる。

神「おっと。」

アルフ「フェイト！」

神が倒れるフェイトを抱える。

なのは「なんで神君が…。」

神「……行くぞアルフ、トロンベ。」

アルフ「ああ。」

トロンベ「ブルルッ」

神はフェイトをお姫様抱っこで抱え自分達の周りに瞬転刀を4つ出す。

なのは「神君?!」

神「……高町、敵対するなら容赦はしない、幼馴染だろうと…な。」

なのは「神君!!」

神「ではな、瞬転。」

神達が瞬転刀による瞬転したあとには呆然と立ち尽くすのはとなのはを心配するユーノだけが残った。

神は自宅に帰らず戦艦内の医務室のベットに治療したフェイトを寝かせ脇の椅子に座りアルフと話していた。

神「アルフ何があった?」

アルフ「フェイトとあの高町とかいうガキンチョが戦い始めてあたしは向こうの使い魔が邪魔をしないように牽制してたんだよ。」

神「封印したジュエルシードをほったらかしにしてか。」

アルフ「し、仕方ないじゃないかフェイトもあたしも戦闘してたんだから。」

アルフは神が怒っているのを感じ耳が垂らして話していた。

神「今後は無いように気をつけろよ? フェイトとアルフが怪我をして悲しむものもいるのだから。」

アルフ「うん、わかったよ。」

神「そうか。」

神はそう言うのと寝ているフェイトに視線を向けた。

アルフ「そういえばここは何処なんだい？」

神「ここか？ここは俺が作った秘密基地だな、正確には戦艦だけどな。」

アルフ「せ、戦艦?! しかも自分で作ったのかい?!」

神「ああ、だがこれは秘密な? いろいろ面倒だからな。」

アルフ「わかったよ。しかし医務室だけでもこの広さかなりの大きさの戦艦なんだね」

神「全長550mぐらいあったはずだな」

アルフ「ほえ」。

神とアルフが戦艦の話をしているとフェイトが起きた。

フェイト「……ん、あれ私は…。」

アルフ「フェイト!」

神「起きたかフェイト?」

フェイト「アルフ、神……！そうだジュエルシールドは！」「回収したよ」そっかよかった。」

神「よかったじゃない。」

ほっとするフェイトに対して神は静かに怒っていた。

フェイト「じ、神？」

神「フェイト、自分がどれだけ危ないことをしたかわかっているのか？」

フェイト「で、でもジュエルシールド」でもじゃない。」…。」

神「ジュエルシールドよりフェイトの方が大事なんだから無茶はやめてくれ。」

フェイトは神のフェイトの方が大事と言うのを聞いて頬を染めていた。

そんなフェイトに気がつかない神は話を進めていく。

フェイト「わ、わかったよ神。」

神「分かってくれたか、それでは今後の話に移るか。」

アルフ「今後？今までと同じじゃないのかい？」

アルフは首を傾げながら聞いてきた。
フェイトも同じ考えなのか首を傾げていた。

神「いや、今後俺も戦闘に参加する。」

フェイト・アルフ「「ええ!!」」

神が戦闘に参加することに驚くフェイトとアルフ。

神「そんなに驚くことか？」

アルフ「神は戦えるのかい？」

神「戦えるぞ？ 見せてなかったか？」

フェイト「見てないかな、最初だってトロンベでアルフを押さえつけてただけだし。」

神「それもそうか、まあ足手まといにはならないと思う。」

アルフ「神はあの高町ってのと戦えるのかい？」

フェイト「…神。」

神「ん？ 問題ない、敵対した時点で容赦する気は無い。」

神は何の迷いもなく断言する。

アルフは思った、この男を敵に回すのだけはやめようと。

神「さて、フェイトも起きたことだし帰るか。」

フェイト「うん。」

アルフ「わかったよ。」

神が先頭に付いていくフェイトとアルフ

転送装置まで行く間にいろいろな部屋があつた。

制御室・動力炉・格納庫・食堂・銭湯・訓練室・整備室
そして最後に転送室

フェイト「ここってどこなの？」

神「ん？ ああそうだったなフェイトは寝てたから聞いてなかったか。」

アルフ「そうだったね、フェイト此処は神が作った戦艦の中なんだよ。」

フェイト「ええええええ！」

今自分がいる場所が戦艦内と聞き驚くフェイト

神「そんなに驚くことか？ 時の庭園のほうが広いだろ？」

フェイト「ここまでいろいろは無いよ。」

フェイトがそう呟くとアルフも頷いていた。

神「まあ余裕ができたならこの中を案内するさ。」

フェイト「約束だよ？」

神「ああ約束だ。」

神とフェイトはゆびきりをして約束を交わした。

フェイト「／／／」

フェイトが赤くなってたのはアルフだけの秘密だ

神「そうだフェイト、今後戦闘のときも普通に呼んで構わないかな。」

フェイト「うん？うん、わかったよ神。」

アルフ「どうしたんだい急に？」

アルフの質問に神は頬をかきながら

神「いやな、さっき変装魔法かけないでなのはの前に出てしまった正体がばれてしまった。」

フェイト「それって私のS「それは違うぞ？」でも…。」

神「いずればれるのは分かってたからな、早まったただけだ気にするな。」

神はフェイトの頭を撫でながらそう言った。

フェイト「うん／／／」

アルフ「よかったねフェイト。」

ピピピッピピピッ

場を和やかな雰囲気包んでいると電子音が聞こえてきた。

神「ん？俺の携帯だな。」

神はフェイト達から少し離れ話し始める。

神「はい、はい、ええわかりました、……………了解しました。
メイガス。」

電話が終わりフェイトの傍に戻ってくる。

神「待たせたな。」

フェイト「誰からだったの？」

フェイト達は神の電話が気になり聞いてみた

神「……………秘密だ♪」

フェイト・アルフ「／／／」

が、笑顔でフェイトとアルフの鼻の頭を順番につついていった。

神「さあ帰るぞ。」

フェイトとアルフをマンションに送り神は家に帰った。

家に帰った神は色と桜花と今日起きたことを話していた。

色「フェイトちゃん怪我したんでしょ？大丈夫だったの？」

神「大丈夫だよ、治療したから。」

色「そう、神が言うなら問題ないわね。」

神と色が話していると桜花がお茶を持ってきた。

桜花「これからさらに忙しくなりますね。」

色「あら、さらに忙しくなるの？」

神「ああ、急がなきゃならない。」

色「あらあらあら、じゃあいつその事学校休む？」

神が今まで以上に忙しくなることを告げると色は笑顔で爆弾発言をした。

桜花「えええええ！！」

神「いいのか、母さん」

驚く桜花と困惑する神に対し色は笑顔だった。

色「いいわよ、両立してて体壊してちゃ意味ないしね♪」

神「ありがとう、母さん。」

色「どういたしまして、神♪」

桜花「それより、また戦闘になったらどうするんですか？」

神「大丈夫、今度戦闘から俺も参加する。」

色「そうなの？怪我してもいいけど無茶はしちゃだめよ？」

神「大丈夫だよ母さん、俺強いから怪我も無茶もしないさ。」

色「がんばってきなさい、神。」

色は神に優しい笑みを浮かべながら応援していた。

神「がんばってくるよ、母さん。」

神も色に笑いかけながら、そう答えた。

桜花「サポートは任せてください。」

桜花も色と神を見て張り切っていた。

その日は三人一緒に寝ることとなった。

神を挟んで川の字で眠った。

次の日、神は学校に行こうとしていた時、色に呼び止められた。何か用かと思い、振り返ると

色「明日から休むって学校に言っておいたからね」

神「は？」

色の言葉に神は驚きを隠せなかった。

しかし、神は忘れていた、自分の母親の座右の銘が「有言実行、唯我独尊、自由奔放」であることを

色「学校で聞かれたら家庭の事情って言っておいてね」

神「え、いや、母さん？」

色「それじゃ、いつてきまうっす。」

色はバイクに乗り走っていく。

神「はあ。」

色がなくなった後にはため息を吐く神と途中から話を聞いていた桜花だけだった。

桜花「神、いいんでしょうか？」

神「いいもなにも、母さんがああ言ったら余程の事が無い限り覆らないよ、桜花。」

神・桜花「「はあ」」

困惑していた桜花と諦めていた神は同時にため息を吐いていた。

神「仕方ない、とりあえず学校行ってくる。」

桜花「あ、はい、いってらっしゃい。」

神「いってきます。」

神は開き直って学校に行くことにした。

第5話（後書き）

八咫「次回はついに彼らが出てきますよ！」

神「張り切ってるな。」

八咫「このためにこれをかき始めたといっても過言ではないですから！」

神「ほどほどにな。」

八咫「オウ！」

神「（わかってないな。）」

八咫「それでは次回またお会いしましょう。」

神「それではな。」

第6話（前書き）

大変遅れていました。

仕事が忙しかったり、突然P Cが動かなくなったりと…

まあ言い訳はおいといて、今回はK Yな彼がです。主人公が力の一部を見せたり

では、どうぞ！

第6話

ジュエルシードの暴走によってレイジングハートとバルディッシュは大きなダメージを受けた。

どちらも自動修復機能をフル起動していた。

そのためなのはレイジングハートを持たずに学校に登校する。

side 神

今日から母さん公認で学校を休んでジュエルシードに専念できることは嬉しいが、なのは達に話したら質問攻めになるのは目に見えてるな。

「それでも行かねばならんのか…はあ。」

神はため息を吐きながら学校へ歩いていく。

「あ」

「ん？」

神が学校につき、下駄箱に外靴を入れ上靴を履いているときなのは鉢合わせた。

「じ、神くん昨日の事なんだけど…。」

「話すことはない、昨日言ったのが全てだ。」

昨日の事を聞くなの是对して、神はなのはを冷たく言い放ち教室

に向かう。

それでも、なのは慌ててついてくる。

「神くん、お話しよ？ そうしたら分かり合えるよ。」

OHANASIはしたくないなOHANASIは。

「自分の教室に行け、SHRが始まるぞ？」

「で、でも」

「席に着け、SHRは始めるぞ」

「行け。」

「う、うん、でもお話してね？」

諦めないな。それがいいところでもあるか。

「時間があつたらな。」

それを聞きなのは急いで自分の教室に向かい、SHRが始まる。授業が始まり、休み時間になってなのはが神の教室に来るが神は居なかった。

それでも諦めずに毎休み時間に来るが居ず全て空振りに終わった。昼休みには一緒にお昼を食べたがアリサとすずかが居るため話すことはできなかった。

放課後帰る時に話そうとしたが、神はすでに帰っており、なのはは仕方なく帰ることにした。

s i d e e n d

s i d e プレシア

フェイトがジュエルシードを確保してそっちに向かうということ
を神から連絡があった。

連絡の中にはフェイトが怪我をしたと聞いたときは飛び出しそう
になったが、治療したと聞き安堵した。

しかし、優しく節してしまったら計画が失敗してしまう、それだ
けは避けないといけない。

転移反応…フェイトが着たみたいね。

「ただいま母さん、お土産もって来たよ。」

「お帰りなさいフェイト、それでジュエルシードは？」

「はい。」

フェイトはバルディッシュからジュエルシードを出し渡した。

「……これだけなの？」

冷酷に冷酷に

「え？」

…冷酷に…冷酷に

「足りないわ。」

「か、母さん？」

ジュエルシードをお土産を受け取るとフェイトから離れていった。

……冷酷に……冷酷に

「たったの5つ、これはあまりにも酷いわ。」

「ご、ごめんなさい母さん。」

「いいフェイト、あなたは私の娘、大魔導師プレシア・テストロツサの一人娘不可能なことがあってはならない。」

……冷酷に……冷酷に

「どんなことでも成し遂げなくてはならない。」

「……はい。」

「これだけ待たせておいて、拳がつてきた成果がこれだけでは、母さんは笑顔であなたを迎えることはできないの。わかるわね？ フェイト。」

…冷…酷に

「……はい、わかります。」

「そう、なら帰りなさい。これ以上母さんを失望させないために。」

」

「……はい。」

「次は必ず母さんを喜ばせて頂戴。」

「…はい。」

フエイトは俯き扉にトボトボ歩いていった。
部屋から出て行く途中振り向き

「お土産の中身はケーキだからね。」

………フエイトごめんなさい。

「早く出て行きなさい!!」

「!」

フエイトは驚き出て行く。

フエイトが出て行った後、別の扉から桜花が出てくる。

「よかったですか？冷たくあたって。」

「それが計画のため、娘達のためならなんでもするわ。」

「それは間違ってますよ。」

「なんですって?」

「神は言っていました。『貴方達のための計画』って。」

「……ふふふ、彼ならそう言いそうね。」

「はい♪」

「アリシアの様子はどうかしら？」

「経過は良好ですね、近いうちに目が覚めると思いますが、予想ですけどね？」

「経過が良好ならいいわ、神は年内にはって言っていたから。」

「そういえばそうでしたね。」

「そうそう、フェイトが買って来てくれたお土産1人で食べるには多いから一緒に食べないかしら？」

「いいんですか？」

「ええ。」

「では、頂きますね。」

「ええ、食べましょ。」

s i d e
e n d

side 神

神は学校を終え一旦家に帰ってからフェイト達と合流する。

「フェイト待たせたな、身体のほうはいいのか？」

「うん、神が治療してくれたから大丈夫だよバルディッシュも治ったよ。」

「リカバリーコンプリート」

「がんばったね、偉いよ。」

「感じるね、あたしにも分かる。」

「もうすぐ発動する子が近くに居る。」

「……そうか。」

少し経ったときジュエルシードが発動した。

公園の木に寄生したジュエルシードは木を怪物に変えていった。

「封時結界、展開！」

ユーノによって周辺に結界が展開される。

「グオオオオオ」

木は完全に変化した。

少し遅れて駆けつけた神たち

「さっさと終わらせるか。武装・アルトアイゼン！」

神は対象を確認すると同時に武装した。

バリアジャケットの様な衣服ではなく機械兵の様な装甲を装備した。

機体全体は赤を基調とし、各部に白と黒、頭部にはヒートホーン、肩部には大火力のクレイモア、右腕にステーク、左腕に3連マシンキャノン、背部に大推力バーニア・スラスターが装備されている。全身武装のため一見すると機械兵にも見えなくはない。

BGM　　＼鋼鉄の孤狼＼

「なんだいその格好?!」

「え? じ、神?!」

「神くん?!」

「なんだあれは」

初めて全身武装を見た4人は驚いていたが、神は首を傾げていた。

「見せたことなかったか？」

神の疑問に4人は同時に頷いていた。

「まあ説明は後だ！」

神は言い終わると同時に3連マシンキャノンを怪物に向けて放った。

「グオオオオオ」

怪物は神の攻撃をバリアを張ることで防いだ。

「へへ、生意気にバリアまで張るのかい。」

「うん、今までのより強いね。」

「さっさと終わらせたいんだがな・・・仕方ない。」

今までは素の身体能力でやっていけたがそれだと時間がかかりそうだ、ここは。

神は右腕を前に伸ばし宣言する。

「技能習得・インファイト＋９、アタッカー、Ｂセーブ、予知！さらに、コマンドセレクト・熱血、覚醒、直撃、かく乱！」

宣言と同時に神の足元に魔法陣が展開され８回点滅すると消えていった。

「神、今のは？」

「今のは、自身に強化の魔法を使ったとしておいてくれ、詳しくは帰ってからだ。」

「あたし達にも使えるんだろ？」

「そのあたりも含めて帰ってからだ、今はジュエルシールドを。」

「うん、わかった。」

フェイトが構える前に神がフェイトの前に出た。

「神？」

「こいつは俺が1人で片付けよう、そのための強化だ。」

「でも・・・」

「フェイトは高町との決着があるだろ？」

神はフェイトに向けえ微笑む、全身武装のお蔭で見えないが。

「・・・うん、わかった気をつけてね？」

「任しておけ。」

背部のスラスターに魔力が噴出し怪物目掛け突撃する。

「グオオオオ」

シュバツ

怪物は根を伸ばし神目掛けて鞭のように振った。

「その動き……命取りになる！」

神は怪物の攻撃を回避し、さらに接近する。

「零距离…とったぞ…！」

突撃しながら3連マシンキャノン、両肩に収納されているスクエア・クレイモアと続けて放つ。

「グオオオオオオオオオオオオ？！」

怪物はさっきと同じくバリアは張るが破られ直撃をうけ仰け反る。その間に神はヒートホーンを加熱させ、上空へ急激に方向を変え飛び上がる。

怪物の上空から急落下し切り裂く。切り裂かれ動けない怪物にリボルビング・ステーキの撃鉄を上げ下から突上げるように撃ち貫く！

ガキョン…ガキンツガキンツガキガキガキンツ…ドガンツ！

撃ち貫かれた怪物は根が千切れ吹き飛び…

ズゴゴゴゴオオオオオオ

爆発する！それを背に撃ち終わった葉莢を排出する。

「これが…俺のジョーカーだ。」

カシュツ

爆煙が収まるとそこには粉々に碎けた木とジュエルシールドがあった。

「ジュエルシールドシリアル？…封印。」

神はジュエルシードを回収しフェイト達のところに戻る。

「格好良かったよ、神！」

「あんたがここまで強いなんてしらなかったよ。」

フェイトとアルフは神の戦闘力に驚いていた。

「これも力の内の一つだ、さて高町賭けようか、このジュエルシードをどちらが手にするかを。」

神の発言にその場に居た神以外が驚いた。

「このまま帰るんじゃないのかい?!」

「このまま帰っても獲物を掠め取ったようなものだ、条件は同じでなければ、フェイトも万全だからお互いに全力で勝負ができるだろう。どうだ？」

「うん、やるよ神！」

「フェイト?!」

「そうか、高町はどうする。」

空気になりかけてたなのた達に声をかける。

「うん、なのはもやるよ神君。」

「2人ともいいな？」

神の呼びかけに2人は頷き上空へ飛翔する。

「譲れない。」

「わたしはフェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど・・・」

「...。」

「わたしが勝ったら、ただの甘ったれた子じゃないって解ってもらったたら、お話聞いてくれる？」

「...：始め！」

合図とともに2人はぶつかり合う。

「ストップだ！」

2人の間に何者かが乱入し戦闘を止めた。

「お出ましか...：武装・ブーストハンマー、この鉄塊...：受取れ！」

神は乱入者目掛けてハンマーを飛ばす。

「ここでの戦闘は危険すぎる、時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおう、っ！！！」

ハンマーを直撃した乱入者^{クロノ}は海へ飛ばされていた。

「真剣勝負の邪魔をして、何者だ？」

「神…」

「神君…」

「あんた、あいつが言ってたこと聞いてなかったのかい？」

戦闘が止められたので一旦降りてくるフェイトとなのは、神の行動に驚き近づいてくるアルフ。

「時空管理局だったか？俺は知らないぞ、そんな組織。」

「君は魔導師なのに知らないの？」

近寄ってきたユーノの素朴な疑問

「ユーノ、俺は魔導師ではないぞ？」

「「ちがうの？」」

神の言葉にフェイトとなのはは反応してた。

「ああ、自称だが魔導機使だ。」

「魔導、機使？」

「今の姿を見てわかるだろうが、全身を分厚い装甲で覆い、各部に武装を装備する姿が機使の由来の一つだな。」

「由来の一つってことは他にもあるのかい？」

「ああもう一つはっ！」

神は突如フェイト達の盾になるように移動すると

ガガガッ

海上からステインガーレイが打ち込まれ

「貴様！公務執行妨害で逮捕するぞ！」

海に飛ばされていたクロノが戻ってきていた。

「神！」

「問題ない、傷にもならない、フェイト引きつけておくから撤退するんだ。」

「でも！」

「デモもストも無しだ、アルフ頼む、これももって行け。」

神はいつの間にか回収していたジュエルシールドをアルフに投げた

「おっと、ちゃんと戻って来るんだよ、神！行くよフェイト。」

「う、うん、ちゃんと帰ってきてね、神！」

アルフとフェイトは撤退するために飛んでいった。

「待て！」

クロノが撤退するフェイト達に向けてステインガーレイを撃とうとする

「貴様が待て。」

が、神はフェイト達への攻撃を遮るように移動する

「邪魔をするな！」

「邪魔は貴様だ。」

睨み合う神とクロノ、その様子を見てて半ば空気と化しているのはとユーノ

「コール・ヴァイスリッター、コマンドセレクト・魂、直感、熱血、同調、てかげん」

神は新たな機体の召喚と同時にコマンドを発動した。
アルトアイゼンとヴァイスリッターは青と赤の炎に包まれていく。

「バインド！」

クロノは隙を逃さず捕縛しようとバインドをかけるが

「その程度で捕まるとでも思ったか？」

見た目に反して軽やかな動きで回避する神

「次はこちらからだ！」

アルトアイゼンとヴァイスリッターはクロノに向けえ突撃する。

「くらうか！」

クロノはシールドを展開するが

「その程度で防げるとでも思ってるのか。」

直撃したクレイモアによりシールドに罅が入る

「グッ！」

連携攻撃をするヴァイスの実弾とビームの連撃により割れ、ビームが直撃する

「とどめだ！」

アルトアイゼンとヴァイスリッターはクロノを前後に移動し3連マシんキャノンと3連ビームキャノンで挟撃する。

直撃によりクロノは動けず全弾命中する。

「これが俺の……」

アルトアイゼンはステーク、ヴァイスリッターはオクスタンをクロノに突きつけ全弾撃ち込む！

「切り札だ！」

「うわああああ!!」

クロノは無残に撃墜された。

「この程度か……武装・解除。」

神は武装を解除し、なのはと向き合う。

「神君……」

「高町、またな。」

神は去って行くと

「バインド!」

ほお動けるか……

クロノはデバイスを杖代わりにしつつ立っていた。

「公務執行妨害とロストログア不法所持で逮捕する!」

ふむ、捕まってやるか。

「クロノ無事?!」

突然空中に画面が展開され緑の髪の女性がクロノを心配していた。

「大丈夫です、かあ、艦長、一組逃がしてしまいましたが、こち

らはなんとか逮捕しました。」

「ご苦勞様、ちょっとお話を聞きたいからそっちの子達もアースラに案内してくれるかしら？」

「了解です、すぐに戻ります。」

通信を終え、なのはと神のほうに振り返り転送の準備をする。

アースラに転送したクロノ達は艦長室に向けて移動していた。

「ユーノ君、ユーノ君ここっていったい？」

「時空管理局の時空航行船の中だね、えと簡単に言うと幾つもある次元世界を自由に移動するための船。」

「あんま簡単じゃないかも…。」

「えーっとね、なのはが暮らしている世界の他にも幾つもの世界があつて、僕達の世界もその一つでその狭間を渡るのがこの船で、それぞれの世界に干渉しあうような出来事を管理してるのが時空管理局なの。」

「そうなんだ…。」

「ああいつまでもその格好つてのも窮屈だろ、バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ。」

「あっそうですね。」

なのは制服姿に戻った。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「ああそういうばそうですね、ずっとこの姿で居たので忘れてました。」

ユ一ノは目を瞑ると魔法陣が現れた。

魔法陣が輝きユーノの姿が消えたかと思うと金髪の少年が姿を現した。

「はあ、なのはにこの姿見せるのは久しぶりになるのかな？」

「ふえええええええええええ！」

「ほおほお」

「なの？」

なのはは激しく混乱していた。

「ユーノ君って、ユーノ君って、えと、その、なに?! ええ! だって嘘! ふええええええ!」

「君達の間で何か見解の相違でも？」

「ええとな、なのは僕達が最初に出会った時って僕はこの姿じゃ？」

「違う違う！最初からフェレットだったよ」

「そうだったな。」

「ん」

ポク ポク ポク ポク ポク ポク チーン

「ああ！そ、そうだそうだ、あはあゴメンゴメン、この姿見せてなかった。」

「あゝゴホン、そのちよつといいか？」

「「？」」

「…」

「君達の事情はよく知らないが艦長を待たせているので、できれば早めに話を聞きたいのだが。」

「あつ、はい。」

「すいません。」

「俺は早く開放してほしいのだが？」

「貴様の事情聴取は後だ！」

神が呟いた言葉にクロノは過剰反応する。

「はあ」

「きつ貴様！」

神のため息が余計にクロノを逆なでする。

「ほれ、早く話が聞きたいんだろ？案内しろ。」

「くっ、こっちだ。」

「「あはははっ…」」

ユーノとなのはは苦笑していた。
クロノを先頭に移動していく。

「艦長来てもらいました。」

「あっ」

「ほお？」

艦長室に入ると盆栽に茶の道具、ししおどしなどがあつた。
部屋の真ん中に翠の髪の女性が座っていた。

「お疲れ様、まあ三人ともどろどろぞ楽にして？」

なのはと神は呆然としてたがユーノはよく分かっていないようだった。

「私はリンディ・ハラオウン、この艦アースラの艦長をしているものよ？」

「私は高町なのはです、私立聖祥大附属小学校3年生です。」

「僕はユーノ・スクライアです。」

「…。」

自己紹介をしていく中、神だけが話さなかった。

「あなたは確か、クロノを撃墜した子よね？」

「そこにいる餓鬼がクロノという名前ならそうだな。」

「貴様！」

「クロノは黙ってなさい。」

「しかs「黙ってなさい。」わかりました。」

「貴方の名前聞かせてくれるかしら？」

「これを解いてくれたら答えてやる。」

神はバインドを示して言う。

「解けるわけが「解いていいわよ」かあ、艦長?!」

「ここまで来て、逃げることはないでしょう。」

「わかりました。」

クロノは不満気だが神に掛けられていたバインドを解いた。

「ふう、要望に答えてくれて感謝する、リンディ・ハラオウン艦長。」

「リンディでいいわ、それで名前教えてくれるかしら？」

「ああ、私立聖祥大附属小学校3年生、龍鬼神だ。」

「神君ね、それではこっちへどうぞ？」

絨毯の上に座ると茶と羊羹が出された。

「どうぞ。」

「あっはい。」

「なるほど、そうですかあのロストログア…ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね。」

「それで、僕が回収しようとして…。」

ユーノは申し訳なさそうであった。

「立派だわ。」

「だけど同時に無謀でもある。」

「まあ無茶ではあるな。」

「うう…。」

三人の言葉にユーノは落ち込んでしまった。

「あの、ロストログアってなんですか？」

「ああ、異質世界の遺産って言ってもわからないわね、えっと次元空間の中には幾つもの世界があるの。」

それぞれに生まれて育っていく世界、その中に極稀に進化しすぎる世界があるの。

技術や科学、進化しすぎたそれらが自分達の世界を滅ぼしてしまっ
て、

そのあとに取り残された失われた世界の危険な技術の遺産。」

「それらを総称してロストログアと言う、使用法は不明だが使い
様によっては世界どころか

次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つこともある危険な技術。」

「しかるべき手続きをもっ
てしかるべき場所に保管されてい
なければいけない品物。」

貴方達が探しているロストログア：ジュエルシードは次元干渉
型のエネルギーの結晶体

いくつか集めて特定の方法で起動させえれば、空間内に次元震
を引き起こし、

最悪の場合次元断層さえ巻き起こす危険物。」

「君とあの黒衣の魔導師がぶつかったときに発生した振動と爆発、

あれが次元震だよ。」

「あつ。」

「あああれか。」

「たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の1の発動でもあれだけの影響があるんだ。

複数個集めて発動した場合の影響は計り知れない。」

「聞いたことあります、旧暦の462年次元断層が起こったときのことを…。」

「ああ、あれはひどいものだった。」

「隣接する平行世界が幾つも崩壊した、歴史に残る悲劇、繰り返しちやいけないわ。」

ぽちゃん

「あつ」

「むっ」

リンディが茶に角砂糖を入れるのを見て神となのはは驚いていた。

「これよりロストログア：ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「「え?」」

「…。」

「君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。」

「でも、そんな…。」

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入してもらうレベルの話じゃない。」

「でも！」

「まあ急に言われても気持ちの整理が付かないでしょう、今夜一晩ゆっくり考えて2人で話し合ってから改めてお話ししましょう？」

「では俺も帰るとしよう。」

「待て！貴様は公務執行妨害とロストロギア不法所持で捕まえられてるのを忘れたか！」

クロノがデバイスを神に向けるが、神は呆れていた。

「それは俺が魔導師であることが前提だろ？生憎俺は魔導師ではないしロストロギアも持ってない。」

「魔導師じゃないって、それにあれがロストロギアではないですって？」

「一つ俺は魔導師ではないし管理局を知らない、二つあの武装は俺の能力だ。」

「あれが能力だと？ふざけた事を言うな！」

「ふざけているのはどちらだ、これ以上拘束するならこちらにも考えがあるぞ？」

「待つてクロノ、それが本当なら諦めるしかないは。」

「しかし！」

「その代わり情報提供と協力を「断らせてもらおう。」え？」

「だから、情報提供も協力も断らせてもらおうと言っている。」

「…仕方ないわね、クロノ拘束を。」

「バインド！」

「ふむ、強行に出るか、さっきも言ったがこちらにも考えがあるぞ？それでも拘束するか？」

「大人しくしろ！」

クロノはさらにバインドをかける。

「仕方ない、コール・ハガネ」

EMERGENCY EMERGENCY EMERGENCY

EMERGENCY

「なんだ！」

『艦長！後方にSSSクラスのロストログリア反応がある艦が現れました！』

「なんですって?!」

『正体不明艦艦首にエネルギーが集中しています！ああこつちをロックしてる！』

「何とかならないのか！」

『無理だよ！向こうのほうが機動力は上だよ！』

「さて、リンディ・ハラOWN艦長殿？交渉といこうか。」

「あの艦は貴方のなの？」

神の問いかけにリンディは冷静に反応した。

ほお、以外に冷静だなさすがは艦長と言った所か。

「あの艦はハガネ、スペースノア級万能戦闘母艦式番艦ハガネだ。」

「あなたは交渉と言っていたけれど、あなたは何を要求するのかしら?」

「要求は三つ。」

「貴様！」

「クロノ！」

「……一つ、俺の家族・仲間に出さない、手を出した場合問答無用で消す。」

「わかったわ。」

「二つ、俺の情報は勝手に収集しろ、情報提供はしない。」

「それは、仕方ないわね。」

「三つ、俺が何かを回収した場合干渉しない。」

「何かって何かしら？」

「強いて言うなら人とかデータとかだな。」

「物にもよりますがいいでしょう。」

「要求を呑んでもらい感謝する。もし、一つでも破った場合は…。」

「

神がリンディを威圧する

「ええわかっているわ。」

ほお肝が据わっているが、冷や汗が出てるな。

「そうか、では帰らせてもらう。ユーノになのは帰るぞ。」

「え、あ、うん、あの僕は手伝いたいです。」

「あ、あたしも！」

なのはとユーノが手伝うことを願います。

「いいのかしら？」

「はい。」

「あたしも。」

「なのはは桃子さんに話してからにしたほうがいいぞ。」

「それは神君も同じじゃないの？」

なのはは当然な疑問をぶつけるが

「俺はとっくに母さんから許可貰ってるぞ？」

「えっそうなの？」

「母さん勘がいいから隠し事できないんだ。」

「大変だね」

なのはは神に少し親近感を感じていた。

「とりあえず一旦帰ってからにしたほうがいいな、返してもらおうか？」

「くっわかった、元の場所でもいいだろう。」

side end

side なのは

地球に戻ってから

「俺は今後敵対になる、ではな。」

神は必要最低限のことを話し帰る。

「待って神君！」

「なんだなのは。」

振り返らずに止まる。

「話し合いでなんとかならないの？」

「……………何とかなっていたら」

「なっていたら？」

「俺が動くことはなかった…いや、もう遅いか。」

「神君！」

どうしても戦わなきゃいけないの……

なのはが呼ぶが神は振り向かず去っていった。

「なのは…。」

「…。」

「大丈夫、管理局の人たちも協力してくれるし、なのはは僕が守るよ！」

「うん、そうだね、ありがとうユーノ君♪」

夕日の中お互いに赤くなりながら元氣付けていた。

なのはは家に帰ると

魔法とユーノの事を伏せて手伝いがしたいという事
少し危険だけどやり遂げたいという事を桃子に言う

「心配だけなのははやるって決めたらやる子だもの、がんばってきなさい。」

後押しをしてくれた、お母さん

「お母さんありがとう！私がんばるよ！」

「それでこそ、私の娘よ！」

小さくハイタッチをする親子。

その夜お泊りの準備をしてアースラに向かう。
内に秘めた決意と共に…。

s i d e
e n d

第6話（後書き）

えっと、久々に書いてますね、地味に疲れが抜けなくなっていたりするのですが、

調子がよければもう一つのと同時進行で書いていきたいと思っています。

誤字脱字がありましたらよろしくお願いいたします。

第7話（前書き）

今回は少し短いですが・・・どうぞ！

第7話

side 神

なのはと決別した神はフェイトと今後のことを話していた。

「フェイト一時的に俺は離れることになりそうだ。」

「えっ」

フェイトは泣きそうになってた。

「いや、待て、泣くな、最後まで聞けフェイト。」

「ぐすっ…うん…」

「俺が管理局の艦で話したのは俺の家族・仲間に出さないという約束してきた。」

「家族はわかるけど仲間ってあたし達のことかい？」

「何を当たり前なことを。」

「神…／／／」

フェイト話は終わってないんだが？アルフもなにニヤニヤしている。

「まあ捕まらなければ問題ないと思うが気をつけてくれ。」

「うん、わかったよ。」

「大丈夫さ、フェイトにはあたしがついてるんだから！」

まあ2人で行動すれば大丈夫だと思うが心配だ。

「それで、暫く別行動になる、対管理局対策を考えなきゃいけないからな。」

「うん、わかったよ、決まったら教えてね？」

「もちろんだ、そっちも大きな事やるなら言ってくれ。」

「うん！」

「それじゃ晩御飯にするか」

「神が作るのかい！」

アルフくいつきいいな、しかし顔が近いな

「ア、アルフ」

「まあそこまで期待してくれるのならいいのを作ってやろう。」

「やったあ~~~~~!!」

「恥ずかしいよ〜アルフ〜」

おもいつきり喜ぶアルフと恥ずかしがりながらも期待しているフェイト

2人の声を後ろに聞きながら腕を揮う神、その口物は微笑んでいた。フェイト達と別れた神は海鳴市の沖に潜伏しているハガネの中に居た。

「桜花はプログラムで忙しいから手が離せないか…人手が足りないな。」

となると人手がほしいな、生み出すかWシリーズとメイガス

「よし、方針は決まった。けど、ハガネじゃ手狭だな、作るかクレイドル。」

場所は深海だな、邪魔されることないだろう。さて、早速移動せねば。

ハガネ移動中…

この辺りなら問題ないだろう、北西太平洋のマリアナ海溝、海面下110,911mと

深く着過ぎたか？まあいい、早速始めるか

構造選択 耐圧、耐水、対魔法、対物理、歪曲フィールド G
テリトリ

部類選択 拠点、メインコンピュータメイガス作成、研究室作成
精製開始……。

5時間経過

ああ時間がかかるな、流石に拠点は辛い常時回復量以上の魔力が消費されてく

ここは飲んでおくか、S・SPドリンク旨いからたくさん飲みたくなる

一回料理に混ぜてみたが単品で飲むのがベストだ。

10時間経過

………はっ！

拙いこれは死ぬる、あと少しだからがんばるしかない

追加で、楠舞印の珈琲牛乳と巨大かぼちゃパイ

珈琲牛乳はいいんだがかぼちゃパイ如何せんデカイからな、胃にくる。

なんとか飲み込まなければ回復しない、ングッ

ふう腹いっぱいになった、取りあえず、プログラムをやらねば。

早く終わらないだろうか…。

15時間経過

で、できた、外見はムーン・アースと同じ

中は研究施設エリア、農作物エリア、魔導炉、転送ポート、居住エリア

まあこんなところだろ、寝るか。

三日後

はっ！今は……三日後か、寝過ぎたな。

Wナンバー16・17作成開始、彼女達のデバイスも作らねば、

ああ時間が…。

ユニゾンにするか。

さて、作製開始…。

一週間後

「さて、気分はどうだ？」

「エキドナ・イーサッキ、問題ありません。」

「ラミア・ラヴレス、問題ありやがりません、ん？」

やっぱりなったか

「……………まあデフォってことで。」

「問題ありません。」

「問題ありまくったりします、なんとかなんのですか？」

「まあ調整してみるか？問題無かったんだが、エキドナ手伝ってくれ。」

「はい。」

ラミア調整中

「んゝ何処も問題が…ああ声帯部分だがこれを治すと他に支障がでそうだな。」

「そうですね、治すと戦闘・思考に影響がでます。」

「なるほど、処置だけにしておくか。」

「はい。」

「さて、調子はどうだ？ラミア」

「はい、問題ありません。」

まあ気にならなくなるだろ

「ラミアにはここ、アクアクレイドルの管理を頼みたい。」

「了解しました、メイガスの調整はどういたしましょう？」

「メイガス：彼女はもう少し眠っておいて貰おうと思う。」

「それは何故ですか？」

「まだ体の構成が終わってないからな。」

「了解であります。」

「……エキドナにはある所に行ってもらいたい。」

「ある所…とは？」

「それはな？」

s i d e e n d

s i d e フェイト

神が居なくなって一週間私達は2つのジュエルシードを手に入
れていた。

だけど、あと6つ見つからない。海にあるんだろうか…。

「フェイト今いいか？」

「神?! いいよなに!？」

「あと明後日には合流できると思う。」

「明後日だね! 待ってるから!」

「ああではな。」

「うん!」

神が帰ってくる♪神が帰ってくる♪

「フェイトどうしたんだい？」

「明後日に神が帰ってくるんだって!」

満面の笑みを浮かべながら話すフェイト

「そっかぁ〜楽しみだね」

顔が緩むアルフ

その日フェイト家は賑やかだったとか

side end

side 神

フェイトと約束した日、とりあえずフェイトの家に行くことにした。

ピンポーン

「はい、ちょっと待ってな」

この声はアルフか

「どちらさまって神お帰り！フェイト神が帰ってきたよ！」

「じーん！」

「ソニックムーブ」

フェイトがソニックムーブを使って飛び込んでくる。

「ぐっ！」

「お帰りのさい神！」

フェイトは神の胸に頬を擦り付けていた。

神は痛みを耐えていた。

「た、ただいまフェイト、吉報だぞ。」

スリスリ

「ん、神成分補給、吉報って？」

「6つのジュエルシードの場所がわかった。」

スリスリ

「いい匂い、本当？」

「ああ、明日にでも回収するぞ？」

スリスリ

「うん、わかった。」

「……なあフェイト？」

スリスリ

「ん、な、なに？」

「そろそろ、離れてくれないか？」

スリス

「え？」

「いや、なんでもない、そのままでもいいぞ？」

「そう？」

「ああ。」

我ながら泣顔には弱いな、そしてアルフ

ぷにぷに

「はあゝ落着くゝ」

人の頭と抱えるんじゃない。

その日はトイレと食事中以外はくつつかれてた。

次の日

神達は海鳴臨海公園沖に来ていた。

「だいたいこの辺りの海中だな。」

「うん。」

「わかったよ。」

海中に電気を流すには…あの技か

「2人ともバリアを張ってくれ。」

「なんでだい？」

「今からやるのは範囲攻撃で無差別だからな、加減はするが念の為だ。」

「わかったよ、アルフ。」

「ああいつでもいいよ。」

神はリ्यूズを眼前に構える。

「武装・グレイターキン」

神は全身に青い装甲を纏った。

右手に盾を持ち左肩に5つの刀身、背中に戦闘機の翼を装備した機体。

5つの刀身を広げ雷電を纏う

「神！」

「いくぞ！サンダークラッシュ！」

刀身に纏った雷電は雲に当たり増幅され飛来する雷を纏い一気に周囲に解き放つ

「きゃあ」

「なんて威力だい、これで加減してるっていうのかい！」

雷は海に落ち6つのジュエルシールドが発動した。

「あつたな、フェイト封印を、アルフは広域結界を、サポートは俺がまわる。」

「うん、わかった。」

「ああ、わかったよ。」

「手早く済ませるぞ、高周波ブレード。」

各々の役割を果たすべく解散する。

side end

side なのは

神君が居なくなってから一週間が経った。

私達はリンディさん達と協力してジュエルシールドを3つ回収してるけど、

フェイトちゃんも2つ回収してる、だけど神君は姿が見つけてない。

「今日も空振りだったねえ」

「もしかしたら神が回収してたりして。」

「神君凄かったからね、でも最近見ないね？」

「逆に会わない方がいいかもね、クロノじゃ威力負けするから。」

「私じゃ勝てないな、神君速そうだし。」

「大丈夫、なのはなら」

Emergency Emergency Emergency

突然の警報になのは達はメインルームへ駆ける。

「なんて事する子達なの。」

「神君すごいね、測定魔力値SSだって」

「エイミィ！そんなこと言っている場合か！」

「だって」

「そんなことより、奇襲と捕縛の準備を。」

「了解。」

「あの、私行きます！」

「頼めるかい？」

「はい！」

「結界内に転送するよ」

「はい、高町なのは行きます！」

「ユーノ・スクライア行きます。」

side end

side 管理局

「なのはちゃん達彼女達の結界内に転送完了。」

「よし、こちらも奇襲のタイミング逃すなよ。」

「本当にやるのクロノ君？」

「もちろんだ、僕も出る。」

「クロノ気をつけてね？」

「はい、艦長。」

side end

side 神

アルフが竜巻を捕縛し、神がメガビームバスターで撃ち無効化する。
最後にフェイトが封印する、現在2つ封印完了している。

管理局が出てくるのも時間の問題だな

「！フェイト来たぞ。」

「フェイトちゃん！神君！」

「邪魔しに来たのかい！」

「違う！協力しにきたんだ！」

「フェイトちゃん！一緒にやろ？」

「えと……じ、神」

そこで俺に聞くか

「フェイトの思う通りにやってみろ。」

「うん！」

フェイトは残りを分けるのならいいと了承した。

仕方ないやるか

「フェイト、なのは4つ同時にし止める封印を頼む。」

「わかったよ神。」

「わかったよ神君。」

「アルフ、ユーノはフェイト達を守ってくれ、範囲じゃないが余波がデカイからな。」

「あいよ！」

「わかった。」

「よし、やるぞ。」

グレイターキンの胸部が開き砲身がでる。

「フォトンビーム砲！ファイヤ！」

砲身から放たれる青い閃光は竜巻を巻き込み爆発する。

「今だ！」

「「ジュエルシード封印！」」

封印され空中に漂う。

アースラの方の動きが気に！

突如上空から赤い波紋が振ってくる。

「ぎゃあ！」

「デिकासテスカ！」

空が明るくなると同時に金色の砲撃が降り注ぐ。

ゴォー!!

「くっ、フェイト!」

「え?」

フェイトが気が付いたときには眼前まで砲撃が来ていた。
砲撃からフェイトを守るため神は前に出る。

歪曲フィールド展開!

「グウウウ!」

「じ、神!?!」

「アルフ、フェイト逃げろ、いつまでも防げない!」

「で、でも!」

「アルフ!」

「わ、わかった! フェイト行くよ!」

「でも、神が!」

「行け!」

「ゴメンフェイト!」

「じーーーーーん!!」

アルフはフェイトを抱えると連続転移しながら逃走する。

「なのはお前も逃げろ!」

「でも、このままじゃ神君が!」

「なのは、彼の言うとおりにした方がいいよ。」

現在の状況を把握して冷静に判断するユーノ

「どうして?!」

「彼1人なら逃げることは簡単だけど、僕らが居たんじゃ逃げる
ことができないからだよ。」

「でも!」

ビシッ

フィールドの一部に輝がはいる

「ちっ、ユーノ!」

「わかったよ、ゴメンね?なのは、バインド!」

ユーノはなのはの自由を奪い小脇に抱えて逃走する。

「ユーノ君戻って!神君が!」

「…」

「ユーノ君！ユーノ君！」

必死に呼びかけるなのは
それを無視して逃走をするユーノの強く唇を噛みしめられていた。

ビシビシッ

歪曲フィールド全体に輝がはしる

「全員逃げたか…。」

脱出は無理だな、魔力も尽きる。

パリンッ

フィールドは割れ、砲撃が神を呑み込み海上が爆発した。

神の意識はそこで途切れた。

side end

side アースラ

「ジュエルシールド封印確認しました。」

「そろそろ捕縛の用意を。」

Alert Alert Alert Alert

「待ってクロノ君！これは…次元干涉?!」

「なんだって?!」

「別次元から本艦及び戦闘空域に向けて魔力攻撃来ます！後5秒！」

「転送中止！衝撃に」

アースラを赤い波紋が襲う。

「うあああ！」

波紋は徐々に治まってくる。

「逃走するわ、補足を！」

「だめです、今の攻撃でサーチャーが機能停止!」

波紋は消え追跡ができなくなってしまった。

「……………」

「機能回復まであと30秒!だめです追いきれません!」

「機能回復まで対魔力防御、次弾に備えて。」

「はい!」

「それからなのはさんとユーノ君を回収します。」

「くっ、今のはいったい…。」

「わかんないよ、でも神君はディカステスって言ってるね。」

「ディカステス…。」

「確か、この言葉で裁判官だったと思ったよ。」

「裁判官…か。」

side end

side フェイト

管理局が居なくなっただ後アルフと一緒に海岸に戻っている。

いくら探しても神の姿は無かった、いくら念話を送っても繋がらない。

神…何処に行っちゃったの…。

「フェイト！これ！」

アルフが慌てて戻ってくると手に持っていたものをフェイトに見せる。

「これって！」

アルフの手の中にあったのはリ्यूズだった。

あちこち壊れているらしく所々から火花が出ていた。

「神……。」

「フェイト…だ、大丈夫だよ！神は強いからひょっこり帰ってくるさ！」

落ち込むフェイトを一生懸命励ますアルフ

「主は生きています。」

「「！」」

リ्यूズは火花を散らせながら

「主からあなたに、伝言が。」

「聞かせて！」

「はい、再生します。」

空中に画面が表示される。

『これが再生されているということはフェイトが拾ってくれたんだろう、ありがとう。』

神からお礼を言われてフェイトは赤くなりながらもじもじしていた。

『お礼代わりと言っては何だが俺が帰るまでリユーズを預ける、魔力伝道効率を上げてくれるから魔法が使いやすくなるだろう。』

「へえゝ凄いんだねゝ」

「ありがとうございます。」

『最後に無茶するんじゃないぞ？』

「うん！」

「わかってるよ！」

『ではな。』

「伝言はここまでです。」

「とりあえず母さんにジュエルシード持っていこう？」

「ちゃんと6個手に入ったし！」

「一旦家に戻ろうか。」

「そうだね」

フェイト達はマンションに帰っていった。

s i d e e n d

s i d e ラミア

フェイト達がリユーズを回収して帰った後

私は海中からマスターを背負いながら浜に上がる。

まったく無茶をするもんだ。

マスターもマスターならエキドナもエキドナだ

派手な攻撃でということは何故ボスクラスを出す？

確かに派手だが限度があるだろ、クロスマッシャーでもよかつたじゃないか。

まあマスターを介抱できるからうれしくはあるが。
さて、クレイドルに帰らねば。

周囲に瞬転刀が出現しラミアを転送する。

ラミアが去った後はただ波の音だけが響いていた。

第7話（後書き）

遅くなりました！

12月中にもう一話だせるといいな！

とかいいつついろいろなゲームが溜まっています。

小説優先で行こうと思ってますが速度がさらに落ちることを書いておきます。

それでは、また！

第8話（前書き）

大変っ遅くなりました！！Orz|||||

言い訳としましては、破界篇にはまっていたました。無双6にもはまりました。さらに言う地球を防衛してました。あっどうでもいいですね・・・。

それではどうぞ！

第8話

ディカステスによる攻撃に倒れる神

ジュエルシードを3つずつ手に入れたフェイトとなのは
攻撃により一時的に航行不能となったアースラ

事態の収拾にあたるクロノ

わずかな情報でも探すエイミィ

砂糖たっぷりの茶を啜るリンディ

・・・・アースラへの攻撃から3日

side リンディ

アースラを攻撃してきたディカステスの情報が

一切掴めないまま時間だけが過ぎていく。

一旦今の状況を確認するために集まっていた。

「なにかめばしい情報は見つかったかしら？」

「情報でいくつも見つけられました。」

「そうなんですか？」

「ああ、エイミィモニターに」

「はいはい」

机の中央にモニターが現れる。

「あら？」

「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師プレシア・テストロッサ専門は次元航行エネルギーの開発、偉大な魔導師でありながら違法研究と事故によって構築された人物です。登録データとさっきの攻撃の魔力波動も一致しています。」

そして、あの少女フェイトは恐らく…。」

「親子…ね、エイミィプレシア女史の詳しいデータ出せる？放逐後の足取り、家族構成、その他なんでも！」

「はいはい、すぐ探します。」

「しかし、神が言っていたディカステスがわからないですね。」

「彼に関係するものなのかしら、対応が早かったわ。」

「神は1人なら回避できるって言ってました。恐らく彼がディカステスの正体を知っているんだと思います。」

「神君無事かな…。」

「彼が見つかった報告はない、あの攻撃が直撃したんだ無事だとしてもただではすまないだろう。」

彼が無事なら手札を少し見せて欲しいものね、

「艦長ありました、プレシア・テストロッサ、ミッドの歴史で26年前は中央技術開発局第三局長でしたが、

当時彼女個人が開発していた次元航行駆動炉ヒュードラ使用の際、違法な材料を使用し失敗。

結果的に中規模次元震を起こしたことによって中央を追われて地方へと移動になりました。

随分もめたみたいです、失敗は結果に過ぎず実験材料には違法性はなかったと、

偏狭に移動後も数年間は技術開発に携わっていました。暫く後行方不明になって、それっきりですね。」

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

「その辺のデータは綺麗さっぱり抹消されちゃってます。今本局に問い合わせて調べてもらってますので…。」

「時間はどれくらい？」

「一両日中にはと。」

「ディカステス或は神君に関してのデータは？」

「ディカステスに関しては本局に問い合わせてますがたぶん何もでないでしょう、

神君の方は地球出身の子とこれといって突出したことのないデータですねいつ魔法を知ったか、

どうやってあの力を手に入れたかは不明です。」

「ふう、プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した後では早々動きは取れないでしょう、

神君もあの攻撃をうけてはすぐには動けないだろし、その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…。」

あなた達は一休みしておいたほうがいいわね？」

「あ、でも…。」

「特になのはさんはあまり長く学校を休みっぱなしでもよくないでしょ、一時帰宅を許可します。」

ご家族と学校に少し顔を見せておいたほうがいいわ。」

「はい…。」

今ある情報を整頓しないとね…。

side end

side プレシア

謎の女性が神の命令で来た。

海中にあるジュエルシードを取るためフェイト達が海上で戦闘を始めた。

私は彼女に機体ディカステスに乗るように言われた。

必要なことか？と聞いたら必要なことだ、と返されディカステスに搭乗した。

…私の記憶はそこで途切れた。

side end

side 神

目が覚めると時の庭園だった。

確かディカステスの攻撃をくらって：

「マスター起きましたか？」

「ん、ラミアかここは？」

「時の庭園であります、エキドナが準備が完了したとのことです。」

「

「わかった、フェイト達は戻ってきたか？」

「まだ戻っていません。」

「そうか、先に準備しておくか、さてここからが本番だ。」

「了解であります。」

玉座の間に着くとディカステスとエキドナが待機していた。

「お疲れ様です、こちらの準備は整いました。」

「フェイトが来る、二人とも：。」

「「はっ」」

「：武装ゼカリア」

ラミア達が隠れ、神は全身緑の鎧に身を包むと部屋の扉が開きフェイトが入ってくる。

「! 貴方は誰ですか？」

『吾か？ 吾はゼカリア、お前と取引をするものだ。』

「取引？ それより母さんは何処ですか?!」

『お前の母親はこのディカステスの中に居る。』

ゼカリアが沈黙していたディカステスに手を翳すと腹部が開きコアの部分が露出する。

そこには操縦席で動かないプレシアの姿があった。

「母さん!!」

『安心しろ今のところ命を取るつもりは無い。だが、取引に応じない場合は保証しかねる。』

『ジュエルシードを集めて来いそうすれば母親は解放しよう。』

「本当に？」

『ああ本当だ、母親は解放してやろう。』

「わかった、取ってくる。」

フェイトは頷くと部屋を出て行った。

これで条件はそろったが後一手が欲しいところだな

ドガン！

扉を壊す音が聞こえ振り返るとアルフが立っていた。

『何のようだ？』

「アンタの要求なんて呑む必要なんて無いんだ、ここでアンタを倒せばいいだけだ！」

叫ぶと同時に駆け出すアルフ

『浅はかなり、己が力量を弁えろ。』

対してライフルを持っているだけのゼカリア

「はあああああああ！」

拳に魔力を溜めて殴りかかったが

『この程度か……。』

「があっ！」

ゼカリアの鎧には傷は無く逆にライフルで壁に押し付けられるアルフ

『計画の障害は少ないほうがいいからな。』

ライフルの先に陣が現れる。

「！（こんな所でやられるわけには行かない！）」

アルフは転移魔法を発動させるが撃つ方が早かった。

バシユン

時の庭園の外まで飛ばされるアルフ

「（何処でもいい、逃げなくちゃ、ごめんね・・・フェイト。）」

アルフが転移したのを見届けたゼカリアの後ろに人影が現れる。

「よかったですか？逃がしても。」

「追いますか？」

「武装解除・・・ふう、追わなくていい、これも計画のうちだ。」

「「了解」」

全てが終わったら皆に謝らなければな・・・。

side end

sideなのは

一時的に帰ってきたなのははありさの家で遊ぶことになった。
そこには傷を負ったアルフが保護されていた。

話を聞いていくとプレシアは操られているだけで、

主犯はゼカリアという緑色の鎧を着た者だという事。

アルフは何とかしようと戦ったが力及ばず今に至るという事。

「今までの情報を考慮して、ゼカリアを真犯人として捕縛する。アースラへの攻撃指示をしただけでも十分お釣が来るからね。だから、僕達は艦長の命があり次第任務をゼカリアの逮捕に変更することになる。君はどうする？」

「なのははフェイトちゃんを助きたい！アルフさんの思いと私の意志

フェイトちゃんの悲しい顔は見たくないしね。」

「わかった、フェイト・テストロッサに関してはなのはに任せる。

」

「なのはだったね、頼めた義理じゃないけど・・・お願いフェイトを助けて」

「うん、大丈夫任せて。」

「予定通りアースラへの帰還は明日の朝、それまでに君がフェイトと遭遇した場合は。」

「うん、大丈夫」

決意を胸になのはは楽しく過ごした。

早朝、臨海公園まで来たなのは達

「ここまで来ればいいよね、出てきてフェイトちゃん。」

街灯の上に降立つフェイト

「ただ捨てればいいわけじゃない、逃げればいいわけでもない、切欠はジュエルシードだから賭けよ、お互いのジュエルシード全部を」

「・・・。」

「プットアウト」

「それからだよ、全部それから・・・。」

「私達の全てはまだ始まってもない、だからはじめようこれから。」

side end

side フェイト

戦いは激しくお互いの魔力弾を回避し、反撃するという交戦が続いた。

はじめてあった時は魔力が強いだけの素人だったのに今は早くて強い、迷っていたらやられる！

フェイトの下となのはの周りに魔法陣が展開される。

「ファランクスシフト」

「!」

なのはがライトニングバインドにより身動きが取れなくなる。

「まずい、フェイトは本気だ!」

「なのは今サポートを「だめー」っ」

「アルフさんもユーノ君も手を出さないで、
全力全開の勝負だから! 私とフェイトちゃんの勝負だから!」

「でも、フェイトのそれは本当にまずいんだよ。」「平気!」

「アルカス・クルタス・エイギアス、疾風なりし天神、
今導きのもと撃ちかけ。バルエル・ザルエル・ブラウゼ
ル。」

フェイトの周りにフォトンランサーが展開され

「フォトンランサー・フアランクスシフト。撃ち碎け、ファイア
ー」

フォトンランサーがなのはへ向けて一斉射撃される。
着弾したなのはの周りは煙に覆われ姿が見えなくなった。

s u d e e n d

s i d e なのは

「なのは!」

「フェイト」

煙が晴れなのはが姿を現す。

「いたゝ、撃ち終わるとバインドってのも解けちゃうんだね。」

バスターモードのレイジングハートをフェイトへと向ける。

「今度はこっちの『ディバイン』番だよ！『バスター』」

放たれる桃色の砲撃、それに対抗するためにフェイトはフォトンラ
ンサーを放つが

威力差の前に消される、フェイトはシールドで砲撃を耐える。

「くっ」

フェイトのジャケットがぼろぼろになりながら砲撃を耐え抜いた。

「・・・フェイト」

「はあはあはあ、はっ」

疲労困憊のフェイトを照らす桃色の光

「受けてみてディバインバスターのバリエーション」

空中に大きな魔法陣が展開され周辺の魔力を集めていく。

「くっ、バインド！」

回避しようとしたが手足をバインドにより固定されていた。

「これが私の全力全開！スターライト・ブレイカー！」

放たれた桃色の激流は瞬く間にフェイトを呑み込んでいった。

「なんつう馬鹿魔力。」

「フェイトちゃん生きているかな。」

光が消えると、疲労したなのはが見たのは気絶し海に落ちていくフェイトだった。

「フェイトちゃん！」

『武装・トロンベ』

突如フェイトの下に黒い馬^{トロンベ}が姿を現した。

「トロンベさん?!」

『・・・ブルル』

「・・・ん」

トロンベの背中に乗せられてたフェイトが気がついた。

「気づいたフェイトちゃん・・・ごめんね、大丈夫？」

なのはの声にフェイトはコクンと頷いた。

「私の勝ちだよね・・・？」

「そう・・・みたいだね。」

『プットアウト』

バルディッシュからジュエルシードが排出される。

「よし、なのはジュエルシードを確保してそれから彼女を「いや、来た！」」

なのは達の頭上の空間が歪み十機の青い戦闘機ソルプレッサが2人目掛け突撃する。

突撃時に放たれた砲撃はフェイトに命中しバルディッシュが破壊される。

「あああっ」

「フェイトちゃん！」

2人を通り過ぎると反転し再び歪んだ空間に入っていた。

「ビンゴ！尻尾掴んだ！」

「不用意な転送が命取りだ、座標を「もう割り出して送ってるよ！」」

「武装局員転送ポートから出動、任務はゼカリアの身柄確保です

！
」

「はっ
」

転送された武装局員達は速やかに玉座の間へ行きゼカリアを包囲する。

「ゼカリア、時空管理法違反並びに管理局艦船への攻撃容疑で逮捕します。」

「武装を解除してこちらへ」

『ククク、その程度で捕まえられると思っているのか？ディカステス、ビックバンウェイブ』

「危ない！防いで！」

ゼカリアの後ろに鎮座していたディカステスから深紅の波紋が発生する。

「うあああああ！！」

「いけない局員の送還を！」

『そそそ面白い話をしてやろう。』

右手を掲げると周辺にウィンドが表示される。
そこには礫にされたプレシアが写っていた。

『研究が上手いかず俺と契約したプレシア』

次に写ったのは筒の中に漂うフェイトと瓜二つの少女

『そしてプレシアが契約した内容は、「娘の蘇生」その時言っていたのがな』

画面が変りプレシアとゼカリアが少女が入った筒を挟む様に立っている。

『この子を亡くしてから暗鬱な時間をこの子の身代わりの人形を娘扱いするのも』

『せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけだったわ、

役立たずでちっとも使えない。あんな人形、あなたの好きにつかってもいいわ』

「はあ、最初の事故のときにねプレシアは実の娘アリシア・テスタロッサを亡くしているの。

彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の精製。

そして、死者蘇生の秘術フェイトって名前は当時彼女の研究につけられた開発コードなの……。」

『よく調べたな、まあ結果的にはうまくいかなかったがな、偽者は所詮偽者ってことだな』

「！」

『そうそう、良い事を教えてやるよフェイト・テストロッサ、プレシアはお前のこと大嫌いだったとさ!』

「!?!」

フェイトの手からバルディッシュが落ち、フェイトも倒れる。

「フェイトちゃん!」

「フェイト!」

「何これ!庭園内に魔力反応多数!」

「いったい何が起きているんだ!」

移された映像には1mぐらいの大きさのハリネズミやウニのようにとげとげした青い機体ガロイカ

ガロイカ・ナイ薄緑の機体が大量に出現しており、少数だが深緑の機体ガロイカ・デクが混ざっている。

「庭園内に魔力反応多数!何れもA反応以上!総数100・・・200・・・まだ増えてます!」

「ゼカリア一体何をするつもり?!」

『・・・修正スル・・・静寂ナ・・・世界ヲ・・・』

ゼカリアはジュエルシールドに魔力を注ぎ発動させる。

『破壊スル・・・再生ト進化ノタメ・・・』

DANGER! DANGER!!

「次元震です、中規模以上!」

「振動防御、ディストーションシールドを!」

「ジュエルシード9個発動!次元震さらに強くなります。」

「転送可能な距離を維持したまま影響の薄い区域に移動を!」

「了解です。」

「ランジ係数拡大!このままだと次元断層が!」

「なんて事を!」

「クロノ君!」

「ゲート開いて、僕が止めてくる。」

デバイスを起動させながらゲートに向かうクロノ

「次元震発生!震度徐々に増加しています!」

「この速度で震度が増加していくと次元断層発生予測値まで後30分です!」

「あの庭園の駆動炉もジュエルシードと同系のロストログアです。」

それを暴走させ過剰に魔力を精製しています。」

「次元断層を発生させる気なのね！」

なのは達は倒れたフェイトを医務室へ運ぶために移動していた。
反対からクロノが走ってきたのが見えた。

「クロノ君何処へ？」

「現地に向かう、現況を叩かないと。」

「……私も行く！」

「僕も。」

「わかった。」

「アルフはフェイトに就いていてあげて。」

「う、うん」

「行こう！」

「「うん！」」

「クロノ、なのはさん、ユーノ君私も現地に出ます。
あなた達はゼカリアの逮捕を！」

「「了解」」」

アルフはフェイトを医務室のベットのの上に寝かせ様子を見ていた。

ゲートを使い庭園に到着していた。

なのは達を取り囲むガロイカの群れ

クロノの活躍によりなのはとユーノは駆動炉を停止に向った。

クロノはゼカリアが居る玉座の間へ向かう。

場所が変りアースラ内

「私も出ます、庭園内でディストーションフィールドを展開して次元震の進行を防ぎます。」

医務室内

「あの子達が心配だからあたしも手伝ってくるね。」

ベットに眠るフェイトは反応をしない。

「すぐ帰ってくるよ、そんで全部終わったらゆっくりでいいからあたしの大好きなフェイトに戻ってね。」

これからはフェイトの時間は全部フェイトが使っているんだから。」

アルフが医務室から出て行くとフェイトは気がついた。

フェイトは今までのことを思い出しながら考えていた。
バルディッシュを展開し語りかけていると。

『フェイト嬢、主から連絡です。』

行方不明だった神から連絡がきた。

「!、繋いで!」

『久しぶりだなフェイト、そこは・・・アースラ内か』

「うん、なのはとの勝負に負けて捕まっちゃった。」

『すまなかった、近くに居たらそんなことは防いだのだが。』

神が通信越しに頭を下げたがフェイトは首を振って否定する。

「そんなことないよ、こうしてまた話せるんだもん気にしてないよ。」

微笑むフェイトを見て神は照れくさそうに頬をかいていた。

『ありがとうなフェイト、つとそろそろ時間も拙いか

フェイト俺はディカステスに取り込まれたプレシアを救出しに行く。』

「!、でも母さんはゼカリアに殺された『それは違うぞフェイト』え?」

『ディカステスに取り込まれているということは生きていますと言う事だ。』

あれは自己修復機能・自己魔力回復機能を持っているから旨く助け出せば簡単な処置で元に戻るだろう。』

「よかった・・・神私に手伝えることないかな?」

フェイトの瞳に決意が燈る。

『フェイト・・・そうだな、なのは達の援護に行ってやってくれ
きつと喜ぶぞ。』

「うん、わかったよ、また後でね神。」

『ああまたあとでな、っと忘れる所だった、リューズの能力を
使ってやってくれ「コール・トロンベ」と呼べば漆黒の機械馬が
出てくるから移動に使ってくれ。』

「うん、ありがと神、また後で・・・。」

『また後で、だ。』

神との通信が切れバルディッシュをリカバリさせる。

「いくよバルディッシュ！」

『イエッサー』

フェイトの足元に魔法陣が展開され転移する。

庭園内

ラピッド・ガンを放つガロイカを倒すが数が一向に減らない。

「くそっ数が多い！」

打撃で撃破していくアルフ

「だけならいいんだけど！この！」

ディバインシューターで同時撃破をするなのは

「くっ何とかしないと。」

捕縛魔法で拘束するユーノ

しかし、ユーノの鎖の一つが千切れてしまう。
開放されたガロイカ・デグがなのはに突撃する。

「なのは！」

ユーノの声に反応して振り返るがデグはすぐ近くまで迫っていた。
なのはは目を閉じる

『サンダーレイジ』

デグは上方から降り注ぐ雷を浴びる。

なのはが目を開けるとデグは一時的に動きを止めていた。

『ゲットセット』

「サンダァー・レイジー！」

魔法陣から放たれる雷によりデグは撃墜された。

「フェイト?!」

フェイトがゆっくりなのはと同じ高さまで降りてくると
壁を破り一実寸大（全長11.5m）のガロイカが現れ方針をな
は達に向ける。

「大型だ、装甲が硬い。」

「それにあの頭の。」

「だけど、2人でなら。」

「うん、うん! うん!」

「いくよ、バルディッシュ!」

『ゲットセット』

「こっちもだよ、レイジングハート!」

『スタンバイレディ』

ガロイカが2人に狙いを定める。

「サンダー・スマッシュャー!」

ガロイカに中るが動きを止める程度

「デイバイイイン・バスター!」

完全に動きを止め、装甲に輝がはいる。

「「せえの！」」

2人の砲撃が一つとなってガロイカを貫いた。
砲撃は庭園の下まで突き抜けた。

アースラ内

「え？何これ、艦長庭園上方に転移反応！」

「S級ロストロギア反応です！」

庭園の上の空間が割れ、そこから巨大な白い蠍のような物体が降ってきた。

白い蠍は庭園の上部に捕まると尻尾を構え庭園を貫いた。

「艦長！UNKNOWNの攻撃により動力炉破壊されました！」

『エイミィ！どうなっている！』

「わからないよ！『割り込み失礼』誰?!」

『誰とは失礼な、久しぶりだな怪我が治ったから援軍として来たぞ。』

「もしかして庭園の上に乗ってる白いのって神君!?!」

『白いのがジュデッカを指しているのなら俺だ。』

「ジュデッカ・・・相変わらず規格外だね」

『そんなことよりエイミィ、ディカステスの位置がわかるか?』

「それなら玉座の間にゼカリアと一緒に居るよ!」

『了解した、頼むぞ。』

『了解しやりました。』

ジュデッカの背中から人が庭園へ降りていく。

玉座の間

『コレデ修正サレル・・・揺レガ止マッタ・・・?』

『ゼカリア終わりですよ、次元震は私が抑えています。

駆動炉もじき封印、貴方の元には執務官が向かっています。

世界の破壊なんてさせません!』

『破壊スル・・・世界ヲ・・・修正スルタメニ・・・

ディカステス・・・メガフラッシュャー・・・』

ゼカリアの命令によりディカステスに魔力がチャージされていく。

「させると思うか?」

『ナニ?』

天井を突きぬけ紺色の騎士が降ってきた。

「奥義・光刃閃」

着地と同時に姿を消えると同時に

ジジジジ ジジジジ

床を何かが擦る音が何度か聞こえる。

シャキン

音が止まると同時に騎士が姿をディカステスの後方に姿を現した。

『ナニオシタ？』

ズズ

ディカステスに切れ目が入りばらばらになる。
コアとして使われていたプレシアが落ちてくる。

「任務完了。」

紺色の騎士が危なげなくプレシアを受け止めると
フェイトとアルフが玉座の間に到着した。

「母さん！」

騎士に抱えられているプレシアを見てフェイトは駆け寄る。

「貴方は誰ですか！母さんを放してください！」

「敵ではない、神の仲間だ。」

「神の仲間、そっか、あつ母さんは！」

「安心しろ、気絶しているだけだ。」

「よかった・・・。」

「よかったね、フェイト」

フェイトはプレシアの無事に安堵していると

『グググ・・・修正スル・・・世界ヲ・・・理解不能！

破壊スル・・・破壊スル！！・・・破壊スル！！オオオオオオオオ

オ！！！！』

「くっ」

「ぎゃあ！」

「なんだい一体！」

ゼカリアから大量の魔力があふれ出し周囲を破壊し始めた。

『破壊スル・・・世界ヲ・・・静寂二・・・』

『艦長！駄目です、庭園が崩れます戻ってください！

この程度の崩壊なら次元断層は起こりませんから！
クロノ君達も脱出して！崩壊まで時間がないの！』

「了解した、フェイト・テストロッサ急いで艦に戻るぞ！
そっちの騎士も同行してもらう。」

「わかった。」

頷くフェイトとアルフ

「自分は神と共に後で向かう、ではな。」

プレシアを抱えたまま騎士は天井の穴に飛んでいった。

「あ、くそっフェイト急ぐぞ！」

「う、うん」

『お願いみんな、脱出急いで！』

side 神

『静寂ナ・・・世界ヲ・・・』

庭園が崩壊する中ゼカリアはジュエルシードに魔力を注ぎ暴走を助長させる。

庭園の上部に佇む神は騎士の帰還を待っていた。

「ただいま戻りました。」

「首尾は？」

「上々でございます。」

「では、片付けるか。」

「先に帰還しやがりますのことよ。」

騎士の周りに瞬転刀が現れ騎士が転送される。

ジュデッカの形状を通常状態に変更した神は庭園から少し離れる。

「全員脱出したようだし、庭園ごとジュエルシールドを破壊するか。」

ジュデッカの両腕を庭園に向け突き出す。

「第二地獄アンティノラ」

胸の前に集めた魔力を崩壊していく庭園に放たれると同時に庭園が凍っていく。

ビシビシ

「・・・砕けろ。」

言葉と同時に庭園が粉々に砕けていく。

『・・・スル・・・静・・・界ヲ・・・』

ジュエルシールドと一緒にゼカリアも破壊される。

「さて、アースラに向かうか。転移」

ジユデツカは粉々に砕けた庭園跡を少し見てから転移した。

side end

アースラ内

「庭園消失、破片は全て虚数空間へ吸い込まれていきました。」

「次元震停止します。断層発生ありません。」

「了解。」

「第三船速で離脱、巡航航路に戻ります。」

アースラ医務室

「あれ、フェイトちゃんは？」

「アルフと一緒に護送室へ彼女はこの事件の重要参考人だからね。申し訳ないが暫く隔離になる。」

「そんな痛たたっ」

「なのはじつとして。」

「……しゅん」

「今回の事件は一步間違えれば次元断層引き起こしかねなかった重大な事件なんだ。」

時空管理局としては関係者の処遇には慎重にならざるおえない。それはわかるね？」

「うん・・・。」

「エイミィやり直し。」

「ちええ〜」

次元震の余波が収まるまでの間なのは達は数日アースラの中で過ごしていた。

そんななか神がアースラに連絡を取ってきた。

『久しぶりだな。』

「久しぶりね、神君」

『プレシアが目覚ましたからフェイトに会わせたいのだが構わないか？』

「ええ構わないわ、こちらもいろいろ聞きたいから。」

『そうか、ではこれから3人で向かう。』

「（3人？）ええわかったわ。」

通信が切れ後ろに居たなのは達のほうへ向く

「今の通信のとおりフェイトさんを連れて来てくれるかしら？ クロノ」

「わかりました艦長、プレシアの逮捕の方はどうします？」

クロノはプレシアの逮捕を考えていたようだがリンディは眉間に皺を寄せていた。

「クロノ、プレシアを逮捕しようとしては駄目よ？ 彼との契約に違反することになるわ。」

「それならあいつも「クロノ！」っ！」

「彼はさっき3人で来ると言ったのよ？ 神君とプレシアそれにあの紺色の騎士でしょうね。」

貴方にプレシアはともかく神君と騎士を同時に止められるのかしら？ 「しかし！」

駄目よ、彼の力は底が知れないわ、分の悪い賭け……いえ、賭けにもならないから

やめなさい、これは艦長命令よ。」

「くっ、わかりました。艦長。」

クロノは悔しそうに顔を歪めていた。

「懸命な判断だな。」

「「！」」

声の方を向くと神とプレシアと翠髪の女性が入って来た。

「まあ捕まえようとしても返り討ちにするがな。」

「しないわよ、命は惜しいもの。」

扉が開きなのは達が入ってきた。

「リンディさん、フェイトちゃんと来ました。」

「フェイト？」

フェイトの名前を聞きプレシアは後ろを振り向く

「母、さん・・・」

フェイトもプレシアを見て瞳に涙が溢れ駆け出した。

「母さん！」

「フェイト！」

プレシアとフェイトは駆け寄り抱き合った。

「ごめんなさいフェイト、私の心が弱いばかりに
貴女に辛い思いばかりさせてしまつて。」

「ぐすつ、いいよもう終わった事だもん。」

「ありがとうフェイト、こんな私でも母親と思ってくれるかしら

「？」

「うん、私はプレシア・テストロッサの娘だもん！」

「フェイト・・・大好きよ。」

「私も母さん大好きだよ。」

フェイトとプレシアはお互いに笑顔を向けていた。
神達はそれを自分のことのように喜んでいた。

第8話（後書き）

遅れてなんですすが引っ張ります。

今月中にはできるように努力しますので
よろしく願います！

あつ感想なども願います！

第9話 無印 エンディング（前書き）

たいつつつつへんっ！

遅くなりました！！！！orz|||

一言で言いますとスランプと浮気と目移りと・・・。

で、では短い上にグダグダ感が否めないですが、どうぞ！

第9話 無印 エンディング

「感動の再会でございやがりますね神。」

「そうだな、さてリンディ艦長今回の事件をどのように纏める心算か

教えてもらいたいね。プレシアが主犯ってのはなしだろ？」

「それは主犯では無いにしろ共犯なのだから罪には問われるわ」
「ならば消せ。」え？」

「だから、その罪を消せ、プレシアはこちらで回収した。」

「それがどうかしたのかしら？」

「要求の三つ目、俺が回収した場合干渉しない。忘れたか？」

「駄目よ、私は回収した物にもよるって言ったわよ？」

「勘違いしてもらっては困る、これは契約ではなく要求だ。
要求を呑んだ後の拒否とは・・・覚悟はで「まっ待って！」
ど
うした。」

「わかったわ、プレシアの罪はどうかして消しましょう。」

「艦長?!」

「ただし！フェイトさんには仕方ないとはいえ次元干渉犯罪の

一端を担ってたのは事実です。」

「だが、フェイトはプレシアを人質に捕られており協力せざるおえなかった。」

「ええあとは私達がどれだけ上にわかってもらえるかです。」

神とリンディはお互いの言葉を繋げるように言い合った。

「……。」

「か、艦長？」

「ふう、こんな感じでいいかしら？」

「ああ、フェイトの事よろしく頼む。」

「「「「「え?」「」「」「」」

神とリンディは握手をしていた。

その光景を見ていたなのは達は呆けた、プレシアと翠髪ラミアの女性は先に話を聞いていたので特に動じなかった。

「ど、どうゆうこと?」

いち早く困惑から抜け出たユーノが質問をしてくる。

「それはな、俺がリンディさんと話し合ってプレシアの罪を軽減又は無くす

ために一芝居うったってことだ、これで彼女の罪は無くなる。

それに脅迫されていた少女を罪に問うほど管理局も冷徹じゃないだろ。」

「意味がわからないぞ？詳しく説明しろ！」

「つまりは私達はプレシアを逮捕しようとするでしょ？」

「そこに俺が来て戦力を見せて脅迫してプレシアを奪う。」

「その代わりに機密に触れない程度の情報提供をするってこと。」

「死ぬ間際の犯罪者で未知の情報が手に入るんだ。文句は言わないだろう。」

簡単に説明する神とリンディはにこやかに笑っているがなかなか黒かった。

「「「「「.....」」」」」

説明されたなのは達は神とリンディの黒さにドン引きだった。

「なのは、フェイト。」

「「なに？神（君）」」

「せっかく友達になったのに離れ離れになってしまった。すまなかつたな。」

「そんなこと無いよ神、神は私の為に危険なこともしてくれた。」

「そうだよ神君、神君が協力してくれたからフェイトちゃんと友達になれたんだよ。」

「・・・・・・・・・・・・なんかそこまで言われると恥ずかしいものがあるな。」

神は2人に言い寄られて頬を掻きながら照れていた。

「さて、皆さん！」

突如リンディが皆に声をかける。

「間もなく本艦は地球を離れミッドに帰ります。名残惜しいでしょうがお別れです。」

「そうか、こちらからの情報はゼカリアと他数体のデータをやるう。」

ゼカリアが出た以上出てくる可能性があるのをピックアップしておいた。」

「そう、エイミィに渡しといてください。」

「わかった。なのは達も渡すのものは今のうちに渡しておけよ。」

「うん、わかったよ神君。」

「何を渡したらいいんだろう。」

「んゝあっお互いのリボンを交換しよ、そうすれば遠くてもいつもいっしょだよ！」

「うん！ そうだね！」

なのはとフェイトはお互いのリボンを交換した。

そして、次元震の影響が無くなりそれぞれの場所へ帰る時が来た

「それじゃ今までお世話になりました。」

「世話になった。」

「ええ元気でね、ユーノ君も戻るときは言ってね？ 転送ポート使わせてあげる。」

「ありがとうございます。」

「それじゃ転送するね。」

「またね、フェイトちゃん！」

「また会おう、フェイト。」

「うん、またねなのは！ 神！」

こうしてジュエルシード事件が幕を閉じた。
しかし、これは序章でしかなかった。

事態は静かにそして、深く進んでいった。

第9話 無印 エンディング（後書き）

はい！グダグダゝ

駄文が最高潮ですね、この後はA・Sに移行していきますが、早く出せるといいなあ、スランプ抜けるといいなあ

皆さんスランプの時ってどうしてるんでしょうか・・・。

それではまた次回お会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3473/>

魔法少女リリカルなのは SRWOGs

2011年10月9日22時50分発行